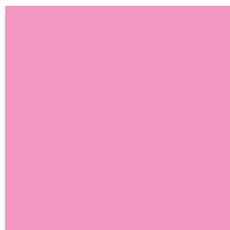
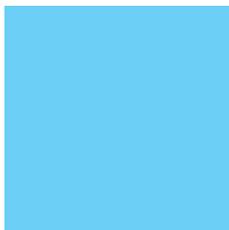
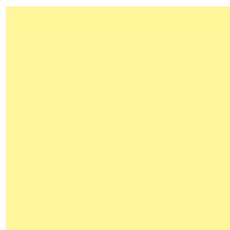
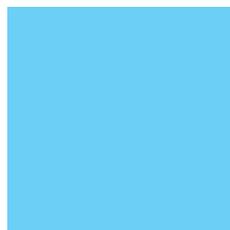


# 保 育 子 育 て 研 究 所 年 報

2010年度

—第8号—

桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所



# 目 次

はじめに	【宍戸洋子】	2
2010年度 第8回夏季保育研究セミナーの報告	【田端智美】	3
2010年度 講演会報告 「子どもの発達と保育の質」 —子どもの見方を変えて保育を楽しく—	【大宮勇雄】	8
「子どもの発達と保育の質」 —子どもの見方を変えて保育を楽しく—を聴いて	【牧 信子】	23
大宮勇雄氏の講演を聴いて	【今野正良】	26
子育て支援活動の今後の課題 —子育て交流会を支えるスタッフの声を通して— 【荒川良子・上村鐘子・清 葉子・宍戸洋子・高田伸子・水谷真理子・ 難波佐保・加藤 香・富崎昭子・松浪ゆかり・武藤愛子】		28
資料 2010年度子育て交流会の経過・参加人数・内容		38
研究報告 保育者養成校における「保護者支援・子育て支援」力の育成課題について	【豊田和子】	44
実践記録 「『かぐや』を助けるために1つになったこどもたち」 お母さん お父さんに今、伝えたいこと —園長だより「つながり」を通して— 「完璧な親なんていない！」から始まる子育て支援	【富田靖子】 【松本敏子】 【横山悦子】	57 64 69
海外保育留学 海外での保育士資格取得プログラム～その構想から成り立ちまで	【高橋一郎】	76
資料 2010年度 事業報告	【田端智美】 【野津 牧】	83 86

## はじめに

保育子育て研究所は、名古屋短期大学保育科と桜花学園大学保育学部が、保育に関する研究・教育の総合キャンパスへと発展し、保育者として巣立っていく卒業生をはじめ、現役保育者、地域の子育て中の父母を支援し、今日の保育の課題をめぐる共同研究の場となることを目指して2002年10月に設立されました。

そして、2003年度から具体的事業を開始しました。研究所の主な活動には4つあります。

1つ目は、保育者として働いている人たちへの支援です。毎年、たくさんの卒業生を保育現場に送り出していますが、保育現場でいろいろな問題にぶつかります。一人で悩むのではなく、職場の仲間を誘い合って、問題解決をはかるため「夏季保育研究セミナー」を毎年、7月に実施しています。このセミナーには、保育科、保育学部の全教員が参加し、セミナーを盛り上げています。

2つ目は、子育て中の父母への支援です。子育てに悩む0歳から3歳までの未就園の子どもと保護者が、だれでもいつでも気軽に参加できる「子育て交流会」を実施しています。8年を経過し、しっかり地域に根ざし、年々、参加者が増えています。

3つ目は、保育、子育てに関する学習を深めるため、学生、地域の方々、現場の保育者、研究者を対象にした「公開講座」を開催してきました。これまでの講座の内容は、「育児について」「保育内容」「保育の質」「子どもの貧困」「保育行政」と多岐にわたっています。

4つ目は、『保育子育て研究所年報』の発行です。保育実践者と研究者が共に保育内容、保育研究の向上をめざし切磋琢磨し、より質の高い保育研究誌になることを目指しています。

『保育子育て研究所年報』創刊号に神田英雄主任研究員は、「保育子育て研究所が語る夢」と題して、次のように書いています。

「保育実践、子育て、大学教育、研究活動のそれぞれが相互に影響しあってうまく回転していく接点に保育子育て研究所が位置づきます。それぞれの分野が単独で回転し発展するだけでなく、接点を持つことによっていっそう内容豊かに発展していけるように、保育子育て研究所は創意ある活動を模索していきたいと思います。保育子育て研究所の研究員は保育学部と保育科の教員ですが、研究員だけの意見でなく、研究所の活動に接点を持つ全ての方の創意やアドバイスによって、いっそう内容のある活動主体として研究所を育てていきたいと思います。どうぞ、さまざまなお意見をお寄せください。」

この夢が夢でなく一步一步、実現し発展していくことを願っています。

2011年3月  
名古屋キャンパス保育子育て研究所  
所長 宍戸 洋子

# 2010年度 第8回夏季保育研究セミナーの報告

本学卒業生を中心とした若手保育者対象のセミナーが、下記のプログラムにそって開催された。

## 記

日 時 2010年7月25日（日）  
場 所 名古屋短期大学・桜花学園大学 名古屋キャンパス  
主 催 名古屋短期大学・桜花学園大学 保育子育て研究所  
対象者 保育者（学生の参加も可）  
参加者 236名

（名古屋短期大学卒業生 65人・桜花学園大学卒業生 49人・その他 35名・学生 87名）

### <午前プログラム>

10:00～

#### 開会式

○オープニング 野津 牧・吹奏楽サークル（ファンファーレ）  
石山・基村ゼミ2年（器楽演奏・歌）  
高田吉朗（歌「おみくじ階段」）

○あいさつ 宍戸洋子（研究所長）

10:20～

#### 講演会とワークショップ

「夏を遊びつくそう！！—保育者の援助と環境づくり—」

愛知教育大学教育学部創造科学系教授 竹井 史 先生

○諸連絡・閉会

12:20～13:00 昼食・休憩

### <午後のプログラム>

13:10～14:40（分科会1限）（担当者）

- A 実践屋台村＋手遊び村（場所：食堂） 浅野・高田・竹井・田中・田端・中川・水谷  
B 乳児保育（場所：721教室） 石山・大村・高柳

- C 幼児保育（場所：722 教室） 牧・鏡・左口
- D 特別支援保育（場所：723 教室） 河内・今野・松本
- E 施設保育（場所：724 教室） 嶋守・野津

14：50～16：20（分科会2限）（担当者）

- F 実践屋台村＋手遊び村（場所：食堂） 浅野・高田・竹井・田中・田端・中川・水谷
- G 乳児保育（場所：721 教室） 木村・近藤正・橋本
- H 幼児保育（場所：722 教室） 近藤茂・豊田・宍戸
- I 保護者支援（場所：723 教室） 小嶋・吉見
- J アレルギーと食育（場所：724 教室） 原田・村松・藤田

### 講演会とワークショップの記録

本年度は、講師に愛知教育大学教育学部創造科学系教授 竹井 史先生を招き、「夏を遊びつくそう！！－保育者の援助と環境づくり－」と題して講演会とワークショップを行った。

昨年度の参加者に、現在の保育の悩みについてアンケートを行ったところ、「日々の保育内容について」の項目が突出していた。本セミナーの参加者は、本学の卒業生を中心に1～3年目の若手保育者が中心である。明日から使える実践的な内容について学びたいという意欲が窺えた。よって、本年度は夏の遊びについての講演とワークショップを、竹井先生にお願いした次第である。

最初に、若手保育者全体の悩みの一つである保育のネタについて話があった。大切なことは単発の遊びネタではなく、遊びの本質をふまえたネタ・援助・環境づくりである。その際には遊びの楽しさのツボをおさえることが大切である。竹井先生のユニークな関西弁の魔術に、参加者が壇上に引き込まれていく瞬間であった。

続いて、映像とともに泥遊びの3つの楽しさについて紹介があった。

- ①感覚遊び
- ②造形（製作）遊び
- ③ごっこ（する）遊び

「①感覚遊び」については、泥の中を裸足で遊ぶ子どもの姿、また、「②造形（製作）遊び」については砂場で穴を掘ってトンネルを作ったり泥団子を作ったりする子どもの姿、次に「③ごっこ（する）遊び」においては砂でケーキを作りお店屋さんごっこをする子どもの姿についての映像内容であった。

竹井先生は、この3つの遊びをすすめていく上でベースとなるのは、環境であるという。特に大胆に土で遊ぶことができることができる環境が大切だと。そこで、土についての説明があった。土には色があり、形を作ることができる。土の色については、鉄化合物や腐食によって決定される。褐色・赤・黄色・黒といった100種類以上の土の色について実際に紹介があった。参加者はその色の多さと美し

さに驚いた。

そして、その土を使った食べ物遊びについて紹介があった。カレー・ケーキ・パフェ・寿司・ドーナツと多彩な形と色使いに、これがすべて土でできているのかと感嘆した。これらの遊びを行うには、土の中の粘土成分がカギを握っている。粘土成分は水によって粘性、可塑性をおびる。保育の現場には、砂場がある。しかし砂の粘土成分が圧倒的に少ない。そこで、粘土成分がたくさん含まれる微粒子の砂が参加者に配られた。フィルムケースに入った砂を実際に触ることで、砂場の砂とは違うさらさらとした心地よさを体験することができた。

ここで、刈谷市 K 保育園の実践が紹介された。先ほど触った砂が含まれた粘土質の砂場で様々なものに形を変えた作品が紹介された。またその砂場で感覚遊びをする子どもの姿も紹介された。要は、水と砂の適切な配合によって良好な環境を作ることができる。

次に遊びの楽しさを援助・支援することの大切さについて述べた。土遊び(泥遊び)において、感覚遊びをしている子どもの楽しさは、「気持ちいいねー」ということにある。造形(製作)遊びをしている子どもの楽しさは、泥団子を作ることにある。ごっこ(する)遊びをしている子どもの楽しさは、お団子屋さんごっこをすることにある。子どもが土遊びをしているとき、昨日は泥だんご遊びに夢中だったが、今日は泥の感触の気持ちよさに泥団子を作ること中断する場面がある。これは遊びが連続的に発展する場合と、なにかのきっかけで非連続的に別の遊びへと発展する場合があることを示している。

それではどうすれば子どもの遊びを理解できるのか? その答えとして次の3つを示した。

- ①「子どもの遊びをじーっと観察」
- ②「何を楽しいと感じているのかを考える」
- ③「楽しいと感じていることを基本に遊びを広げる」

最後に、遊びは、始まり→盛り上がり→転化発展という展開がある。保育者がそれぞれの場面を繋げる援助をすることで遊びが発展する。遊びの援助は奥深く面白い。保育はその面白さを知ったらやめられないステキな仕事であると、参加者を激励した。



ここで第1部の講演会が終わり、第2部おもちゃづくりに入った。  
作ったものは以下の7つである。

- ① 色紙を使って（笛・紙とんぼなど4種）
- ② ストロー笛
- ③ ストローロケット
- ④ 水中エレベーター（ペットボトルを使って）
- ⑤ ぱたぱた鳥（紙コップ・ストローを使って）
- ⑥ くるくるたこさん（紙コップ・水糸を使って）
- ⑦ タオル人形（タオル・輪ゴムを使って）

以上7つを、実際に製作した。身の回りにあるもので作るということが保育の製作では重要である。竹井先生はストロー笛を作る際、ストローをはさみで切りながら、手品のように音階を披露した。また、水中エレベーターを作る際には、保育者の演出次第で遊びが何倍にも面白く、不思議なものになることを子どもたちに見せるように披露した。科学のような工作に参加者は目を輝かせた。

また、子どもが使うことのできる道具の紹介もあった。ビニールテープの有効な使い方、かっこを使った穴の開け方、水糸の強度について説明があった。明日から保育の現場で使うことのできる実践的なワークショップであった。

あっという間に2時間が過ぎ、盛大な拍手で講演会とワークショップを終えた。参加者は、早速明日からの実践に使いたいということであった。

若手保育者は保育のネタに困り、明日のことを考えると不安になるという。特に夏休みのころは学生生活で学んできた保育のネタも尽き、「明日何しよう？」といっそう不安が増すという。そういった悩みから解放される充実した講演会とワークショップであった。

## 午後のプログラム 分科会の報告（担当者報告書より抜粋）

### ○実践屋台村＋手遊び村

実践屋台村では、「お菓子な家をつくろう」「お菓子なファニーフェイスをつくろう」「新聞紙を使ったおもちゃ」「めばえ棒」を製作した。また、手遊び村では、現在、園で流行している手遊び・替え歌バージョンの披露が行われ、交流を行った。

### ○乳児保育

参加者は66名（1限42名・2限24名）であった。かみつき・癩癩・いやいやなど乳児の発達について具体的な助言を行った。乳児は複数担任のため、職場での人間関係の築き方などの助言も行った。今年は猛暑であるため、水遊びの実践についても紹介があった。

### ○幼児保育

参加者は66名（1限38名・2限33名）であった。年齢別に分かれて話し合いを行った。

現在の保育の悩みについて共有し、自分だけの悩みではないことを確認し明日からの糧とした。また、子どもの目が輝いた実践について意見を出し合った。最後には笑いの輪が起こり、日ごろの悩みが軽減されたと感じる。

#### ○特別支援（本年度新設）

参加者は18人であった。最初に、特別支援の必要な子どもへの保育の観点として、

- ①子どもが生活の中で大変と感じている
- ②子どもが生活の中で楽しいと感じている

の2つが提示された。その上で年齢や障害についての特徴を述べた。対応に困ったという発想に陥ることなく「手のかかる子どもを愛することのできる保育」を行っている報告が多く、有意義な交流であった。

#### ○保護者支援（本年度新設）

参加者は11名であった。実際に保育現場で困っている事を発表し、それについての意見交換を行った。気になる子どもへの保護者対応、連絡ノートの書き方、保護者とのコミュニケーションの仕方など具体的な助言を行った。

#### ○アレルギーと食育（本年度新設）

参加者は13名であった。最初に困っていることの見聞交換をした。給食・おやつの出し方、アトピーの子どもの気持ち、咀嚼できない子どもへの対応、給食の外注について、保護者の対応などの知識を共有できた。

#### ○施設保育

参加者は12名であった。現役の施設保育者の方を交え見聞交換をした。施設の現状を知ることができ有意義な時間であった。本学において施設保育者になりたいと考える学生が増えてきている。今後横のつながりを作るためにもこのような会が必要であると感じた。

(田端智美)



# 講演「子どもの発達と保育の質」 — 子どもの見方を変えて保育を楽しく —

講師 福島大学人間発達文化学類教授 大宮 勇雄

2010年12月11日、名古屋短期大学・桜花学園大学保育子育て研究所主催による講演会「子どもの発達と保育の質」は、300名の参加者を得て好評のうちに終了することができました。

本論文は、大宮勇雄先生のご好意により、講演内容にそってまとめていただきました。講演会当日の内容とは違う部分もありますが、保育の質についての先生の思いが伝わる内容となっています。

## ◇今日の保育に思うこと—わが国の保育政策の根っこにある子ども観の問題

OECDの報告書で、この20年くらいの各国の家族政策や保育政策の動向を分析した「スターティングストロング」というタイトルの報告書があります。どの国でも幼児教育・保育は大事だと力を入れていることがわかります。日本は例外だなあと思いました。

その報告書は、各国力を入れているがその背景になっている子ども観がちがっていて、それによって政策の充実度が違うと書いてあるんです。

子ども観には大きく2つのタイプがある。1つは、子どもの時代を学校に入るための準備の時代とする考え方。その基本は、子どもは労働力として重要だという見方がある。だから、社会に直接つながる高校・大学がいちばん大事。その大学・高校のために中学があり、中学のために小学校があり、小学校のために幼稚園・保育園があるという考え方ですね。つまり小学校で上手くやるために、幼児教育が大事、という政策になりますね。例えばアメリカやイギリスがそうで、日本もその仲間かもしれません。

もう1つの考え方は、子どもは主体であり、未熟者とか未完成品ではない。子ども時代はそれ自体が大事、人生の最初の段階として大事とする見方です。今ここにある毎日の生活そのものの中に、子どもの成長や未来の姿がある。子どもは日々の生活の中でいろんな事、必要な事を自ら学んでいる。小さいときからすでに子どもは、有能な学び手なんだ。だから基本は、子どもたちの生活、食事遊びを豊かにすることになる。この考え方に立っているのは、デンマークを始めとする北欧の国々ですね。

子ども時代を豊かにする保育政策と言うのは、もちろん政治の問題なんだけれども、子ども観こそが大事な問題なのだというわけです。その社会が子どもをどう見ているか。子どもの時代をどう考えているか。私はこれを読んで自分はどうなんだろう、子ども時代をどう見ているんだろうと振り返り

ました。私は両方大事だと思っていたと思います。でもこの報告書はどちらの子ども観に立脚するかが重要だ、と言っているんです。私は自分が曖昧だなあと、子どものことを有能な学び手とは見えていないなあ、と思いました。子どもはやはり人間になるには、大人が教えて管理してやらないとダメでそれを決定的に必要と思っているかも。デンマークやフィンランドの大人、保育者は子どもの見方が違うのかと、そこから勉強した事をこの間話しているわけです。

2つの子ども観のどちらがナチュラルなものでしょうか。皆さんの今の人生は何かの時代の準備ですか。「私は退職の準備してるわ」とか「結婚の準備してるわ」とか部分的な準備はあるでしょうが、何かの準備をするためにすべて今があるわけじゃないでしょ。今が本番でしょ。

だからどの時代も本番なんです。でも子ども時代をそう見ないのはなぜか、という事です。

私たちが幸せに過ごしたいと思っていると同じに、子どもたちも今を幸せに過ごす権利を持っているでしょ。なのになぜ準備として子ども観が優先になるのか。それは幼児期よりも小学校が大事だと思っているからです。小学校よりも中学校が大事だと思っているからです。中学校よりも大人が偉いと思っているからです。小学校の先生が、幼稚園・保育園の先生に向かって、「もうちょっとお話が聞けるようにしておいてもらえませんか」と少し上から目線で言うでしょう。でも小学校の先生も中学校の先生の前に来ると、「もうちょっと小学校で何とかありませんか」とか言われちゃう。よく、学校間の連携と言いますが、実際には上下関係になりやすい。それはつまり大人が一番偉いと思っているからですね。保・幼・小連携と言ったって、小学校と保育園は対等じゃないですよ、対等に言い合える関係になってないですよ。小1プロブレムの問題も、小学校が保育園に変わってよ、家庭にこうしてよという形でもっばら問題になっちゃうのはこうした不平等な関係が下敷きになっているからです。

#### ◇「子ども観」転換の時代を生きる

けれども、OECDの報告書には、2つめの子ども観、つまり準備じゃなく、それ自体が大事な時代なんだ、子どもは一人の有能な学び手なんだという子ども観が、今は広がっているとある。子ども観は変わりつつある、と。今の時代は、そういう目先の成長を求めるプレッシャーが大きい時代だと見るだけでは間違いで、変わって来ている時代なんです。その象徴が国連で採択され、日本でも批准された「子どもの権利条約」です。

「子どもの権利条約」の素になったのが、コルチャック先生の「権利宣言」です。養護施設を作って、第2次世界大戦下、子どもたちの生活・命を守った、教育者でもあり医者でもあり、実践家でもあるコルチャック先生が書いたものを読むと、たとえば『子どもは悲しみを尊重される権利がある』とあります。当たり前の事ですけれどね。子どもが泣いていたら、「悲しいんだなあ。気持ちを理解しなきゃ」とその時は誰でも思いますけれども、もしいつも泣いている子だったら「また泣いてるの?」というふうになるのはどうしてなのでしょう。「この子!いつまで泣いているの」となったら悲しみを尊重しているとは言えないでしょう。

『子どもは抗議し、望み、要求する権利がある』—。当たり前の事ですよね。うちの学生が、「子ど

もの“食べ遊び”について研究したことがあります。遊んでいる子がいたらその子の視線に立って見てみた、するとその学生が言うには「食べ遊びとか言いますが、それにはいろいろありました。ひとつは、まずいって言ってるんです。でもその抗議を先生は抗議と聞かないで『遊んじゃだめ』と言っている。でもあれは違うんです。私も食べてみましたけれども、まずいです」と言っていました。さらに、「遊んでいる理由にはいろいろありました。好きな食べ物でも遊びます。食べ物というより、好きなものなんです。何だろうと手で持ったり、触ったりしてるんです。だから好きなものでも遊ぶし、嫌いなものでも遊ぶんです」と言うのですね。大人は食べ物と決めてかかっているけれども、子どもは意外に何だろうと思って遊んでいる、そんな話でしたね。

『子ども同士のけんかはたいてい子どもが解決することができる』ともあります。当時のポーランドは戦乱と混乱の時代。戦争なんかで家族が離散したり、親が亡くなったり見捨てられたりして、普通の目から見ると悪い事ばかりしたような子どもたち。あるいはすごい人間不信に陥った子どもたちに自治と裁判の権限を与えたんですよ。友だちの物を盗んだ子どもの罰をどうするかというのは、自分たちが決めるんです。

今の日本の子どもたちは問題ばかりが指摘されます。でもコルチャック先生はある意味、今以上に大変な状況にあった子どもたちと向き合って、そこに学ぶ力とか、公平に判断する力とか、人を思いやる力とか、そういうものを見ていたわけです。だから子どもたちにそういう権限を与えて、子どもたちの要求に応じて、意見を尊重しなきゃと考えたわけですね。

だから、権利条約に書かれた意見表明権は、「意見を言う権利」ととらえるだけでは弱いんです。その意見を大人の側が尊重しなければならないと理解すべきです。子どもっぽい、おかしい意見でも尊重するというのではないんですよ。コルチャック先生は、子どもをしっかりと意見の持ち主だというふうに見ていたから、尊重すべきだと言ったのです。どうしてそう見えただろう。ですから、この2つめの子ども観は、目の前にいる現実の子どもたちの中に素敵な肯定的な力が「事実として見える」ということとして押さえるべきものです。私たちは、子どもをどんなふうに見て、どんなふう理解して保育をしているのかということ問われなくてはなりません。



### ◇保育の質の中心問題としての「子ども理解」 — 「保育の質」を自分の言葉で語る

さて最近、「保育の質」がよく話題になります。保育指針には“保育課程を作って自己評価をなささい。それが質の向上にとって大事だ”と書き込まれた。保育園は質向上の責任を負っているとなったので、「自己評価やらないといけないんだってよ」「自己評価ってどうやるの？」となる。しかし、「評価するチェックリストとかないの？」「あ、雑誌に書いてあったよ」というような、受身な受け止め方が少なくないのではないのでしょうか。自己評価と言うのは自分が評価することなのに、自分が評価される側になっていませんか。何が保育の質なのかを保育指針がはっきり書いていないというのが、こうした事態の背景にあると私は思っています。

保育所保育指針には、『保育の質を向上させるやり方』は書いてあっても、『保育の質とは何か』というのを書いていない。だから、保育者一人一人が自分で質を語るにも手がかりがない。「保育指針が出て、自己評価をしなければならない。保育課程も書かないといけない。そのための事務仕事が増える。それについての会議もしなくちゃいけない。大変だ」 — 保育の現場は猛烈に忙しいのですから、本当に自分たちに意味のあることをやれば良いのです。そのためには、自分のことばで、保育の中の実感で、「保育の質」をとらえるという事を始めないと、ただ仕事が増えて、それが自分たちの身になかなかならないという悪循環になってしまわないかと思うのです。

### ◇保育の質は「プロセスの質」

「保育の質」にはいろいろな要素があります。中でも大事なものは、「条件の質」とか「制度の質」とか言われるものです。つまり、職員の配置基準とか、クラスの人数とか、保育者の資格などが重要なんです。しかし今ここでは、保育実践のことに限って質を考えます。

それを「プロセスの質」と言います。最近の質研究の大きな特徴は、一時期流行った「何ができるようになったか」という「結果を測って質を推定する」というやり方があまりやられなくなった点にあります。

簡単に測れるような結果で質を評価するのはむずかしいということですね。その時にあることができなくても、結構育っているものはあるし、今、他の子よりも早くできるようになったとしてもあまり意味のない事も多いのです。さきほどのヨコミネ式を例にとれば、だって逆立ちで保育園の中を歩けるとか、本を何千冊読んだとか、その後どんな意味があると思いますか？私は10冊でもいいんじゃないかと思うんですよ、1年間にじっくり読めばいいのです。

大事なものは、目先の結果、できばえじゃない。日々子どもたちが経験しているものの質です。何を子どもたちが実感しているか、経験しているかということです。

例えば、『熱中・安心』。これはヨーロッパで使われている、ある自己評価のツールがあるんですが、そこでのプロセスをはかる2つの視点がこれなんです。子どもたちが毎日安心して心地よく過ごしているか。もう1つは、何か好きな事、面白い事に熱中してやっているか。そういう日々があるかという事が、その子の将来につながる大事なものであり、何かできるかと言う事だけに目を奪われないで、そういう毎日を作り出す事、それ自体が大切だと言われているんです。

ではそうした生活を作り出す上で何が大事か。それは、子どもが理解されていると感じながら生活できることなんじゃないかなと思う。自分の事がわかってもらえているとわかったら、安心するじゃないですか。それ程幸せな事はないでしょう。自分の好きな事をわかってくれる保育者がいたら、熱中できるような環境が作られていくでしょう。だから、私たちが子どもたちをどう理解するかが、保育の質の中心問題だといって良い。最初に言った、子どもたちを肯定的に見ているかということに、質の問題は直結しているんです。

子どもたちが理解されていると言う実感があるかどうかは、保育者の側から言えば、子どもたちが肯定的な好ましい、愛らしい存在に見えているかどうかということです。

しかし、一般論としては子どもは信頼できる豊かな人間だと思っても、現実問題としては、どの子も肯定的には見えないかもしれませんよね。かみつく子、乱暴する子、他にもいろいろ気になるところがあると、肯定的には見えてこない。たとえそういう子でも、私は、肯定的に見えるはずだとあえて言いたいのです。だって私たち大人は自分の事をあんまり否定的に見ていないでしょう。私はだめだわーと思うこともあるかもしれませんが、でも基本的には自分を肯定的に見ていませんか。子どもだって同じじゃないですか。大人が自分を肯定的に見るのと同じくらいに、子どもを肯定的に見られなければおかしいでしょう、と私は思うのです。

#### ◇子どもの成長（発達）をどうとらえるか—私たちがめざす人間像を明らかにする

子どもを理解する際のポイントは、子どもの成長をどうとらえるかという点にあります。私たちがめざす人間像を明確にする必要があります。

私たちは子どもにどんな成長を期待しているのでしょうか。今の時代に共通しているのは「学力」ですが、学力というのは“学ぶ力”のことです。学ぶ力＝学力を育てたいとは誰でも思うでしょう。でも今は、学力＝テストではかられたもの＝点数を上げること、になっていますよね。

その端的な例が、全国で行われる学力テストです。かなりの学校が参加して、都道府県別に平均点を出して、小学校では3年連続秋田県が1位なんですよね。大阪はちょっと低いといわれて、橋下知事は市町村や学校ごとに公表すべきだと息巻いています。ああいう人たちは学力テストの点数はとても大事だと思っているわけです。

秋田県に行って「3年連続トップと言うけど、例えば100点満点で平均点が10点違ってどれくらいの意味があるんですか。東京の人がすべて秋田県に移住するくらい大事ですか」と言いました。そして後で感想をうかがったら、『最近、秋田の教育委員会でも困った問題が出ているんです。大学進学率が全国最低レベルなんですよ。説明ができないって言っているみたいですよ。進学率にどんな意味があるの？という事にもなりますが、学力テストが大事だと思っている人たちから見ると、とても意外な、説明できない結果なのです。』

紙上のテストで測ったものを「学力」と見るというのはすごく狭いですね。大人になって仕事をするとときに大事なのは「意欲をもって学ぶ力」でしょう。「自分から」が大事でしょう。「テストがあったから」「受験に影響するから」じゃなくて。同じ問題に直面して、学ぶ人と学ばない人がいるでしょ

う。つまり自ら学ぶという意欲を抜きに学力を論じる意味がないんですね。最近では文部科学省も意欲が大事だと言いますが、でも授業中先生の話をよく聞いていたという態度みたいな話になって、子どもたちはますます窮屈になってくる。意欲が大事と言うなら、本当に意欲が発揮されている姿をきちんと評価すべきです。

幼児期は意欲が育つ時期だと言われています。日本の学力をめぐる一番大きな問題は意欲の低下です。基調報告にもありましたけれども、自ら学ぶ意欲がなかなかわきあがってこない。だから私たちがめざす成長を考えた時に、意欲とは何か、ということを知る必要があるんです。

#### ◇意欲とはどういうものか—Carol Dweck の研究

キャロル・ドゥエックというアメリカの心理学者が学習意欲について研究しています。4歳の子どもを対象に、乳幼児期に身につく学習意欲とはどういうものか、実験をする。パズルをやらせてもらいます。最初の3題はとてむずかしくどの子もできない。最後の1題は全員ができる。それから「どれでもいいから、好きなものを選んでやっていいよ。時間制限なしでやっていいよ」と言うと、できたパズルを選んだ子と、できなかったパズルを選んだ子どもと半々くらいに分かれるんだそうです。できたパズルを選んだ子に「どうして選んだの?」と聞くと、「だってこれ簡単でしょ。必ずできるから、失敗しないから大丈夫」。できるという結果が大事だから、できる問題を選んだ子どもたち。そういう子どもたちを「結果志向」と名付けています。

もう一方のできなかったパズルを選んだ子に「どうして選んだの?」と聞いたら「だってこれむずかしいじゃん。できなくて悔しいし、今度やったらきっとできるはずだよ。だいたいこっちの方が面白いじゃん」。その子どもたちはできないことに挑戦するのが面白いと思っているわけですね。できない事に挑戦する、困難なことに立ち向かう。そういうことが実は学ぶということで、こういう子どもたちを「学び志向」と名付けているわけです。あきらめないで、くり返しやってみる。工夫してやってみる。そういう中に学ぶ意欲の始まりがあるんです。

私たちはよくね、「できる子」を意欲があると見て、できない子を見るとどうして頑張らないの?と、意欲に欠けるかのように言ったりするわけです。できる／できないの延長線上に意欲があるのではなくて、それは独自の力なのだ、困難な事に立ち向かう事を面白いと感じる、そういう事自体が意欲なんだ、ということですね。

ここで注意すべきは、困難なこととか、わからないことというのは、「他の子と比べて」ではなくて、「その子にとって」のことだという点です。自分にとってむずかしいと思うことをやってみる、それが面白くて粘り強くやる、それが意欲です。

私には2人の孫がいて、保育園に行っているんですけども、はなちゃんとりんちゃんと言います。上のはなちゃんが1歳半の時、散歩に行くのに、自分で靴をはこうとしている。「むっかしい。むっかしいなあ」と言いながらやっている。困難に立ち向かっているのですね。結果はできないんですよ。いつまでやってるの?と言いたくなる程やっている。でもそれをできるとかできないとかで見ちゃ、意欲はわからないんです。困難に立ち向かうのが面白い子は、できない場面が多いんです。「結果志向」

の子は、できないことはやりたくないんです。だから結果はできちゃうんです。先生から見たら、もしかしたら「結果志向」の子の方がいい子に見えますよ。

「結果志向」と「学び志向」の子が4歳くらいでどうしてこんなふうに違ってくるのか。次の実験です。小さな失敗をしてしまった子どもの話を、「結果志向」の子と「学び志向」の子に聞かせます。例えば「おうちの絵を書きました。とても上手に書きました」と言って見せて、「でも入口の玄関を描くところがなくなってしまいました。その小さな失敗をした子に、何か言ってあげてちょうだい」とたずねる。つまりその子の親が、小さな失敗をした子に対してどう対応しているかというのを見る実験です。すると「結果志向」の子どもたちは、激しく非難する。あるいは罰を与える。非常に真剣に子どもを責めるんですね。

ドゥエックは、「そんな小さい事で体罰を与えたりするような親は現実にはいない。けれども子どもの対応から見てはっきりわかるのは、その子どもたちは、失敗は悪い、いけないことと思っている。失敗するのは悪い事だよと、親は子どもに教えている」と言うわけですね。親が、結果だけで子どもを評価して対応していると、「結果志向」の子になるんだよ、という事です。「学び志向」の子どもは、子どもの絵を見て、素晴らしいね、と感心するわけですね。そんな小さな失敗は気にしないんですね。それを上から目線で、簡単な事なのにできないの？といつも対応していると、子どもは「失敗は悪いことだ」と思っちゃう。

大事なことは、意欲を持って学ぶ力は、遊びや生活の中で育つということです。学校の教室の中で育つものではないんです。私たちの課題は、そういう子どもを保育園や幼稚園で育てるということですね。では、その意欲を持って学ぶ子どもというのはどういうふうに育っていくのか、その具体的な姿を私たちはとらえられるようにならなくてはなりません。

#### ◇学び志向の子どもを園で育てる

ここからは、ニュージーランドのマーガレット・カーという研究者に学んだことです。カーは大学の先生ですがけれども、幼稚園で20年働いていた方です。幼稚園や保育園に行くと、学び志向の子どもを観察して、むずかしいこと、わからないことに積極的に取り組む姿が頻繁に見られる子どもがどんなことをやっているのかを調べていった。

例えば4歳のジェイソン君という男の子の話を紹介すると、ジェイソン君がマーブルペインティングという遊びをしようとした。四角の箱に白い紙を敷いて、そこに絵の具のついているビー玉を入れて、その箱を揺らすと白い紙に絵の具のマーブル模様がつくという、ただそれだけの単純な遊びなんです。その遊びをしようとして、箱を探しに行ったらなかった、それでジェイソン君は「じゃあ、自分で作るからいいよ」と言って、その辺からコーンフレークの空き箱を持ってきて、それをハサミで切ろうとした。でもどうやってやればいいのかわからないから、自分なりに考えて上のところを切ったけど、間違えて横のところも切っちゃった。ビー玉がポトンと落ちてしまって、慌てて拾ってビー玉を手でおさえてやった。まさに彼は、困難に立ち向かい、うまくいなくてもあきらめずに工夫し苦労している。

学び志向の子どもって、こういう感じなのです。こんなときつい思わず、「どうして先生に言わないで勝手にやってしまうの？いつも先生に言ってからやりなさいって、言っているでしょう！ ほら床が汚れちゃって。あ、手も汚れて。ぞうきん持ってきなさい。だめよ。こんな事やっちゃ」なんて対応しがちですよ。いませんか、そういう子。結構、あの子困るよね、って言う子どもなんですよ。

その幼稚園で誰もマールペインティングをやるのに空き箱から作った事がないんです。それなのに、彼は自分から進んで困難を選び取っている。すると、そこにネルちゃんという女児が「わたしもやりたい」と言ってくる。ネルちゃんは普段は結果志向の子どもなんです。「結果志向」ってどういう子どもかという、たとえば紙を丸めて、帽子を作ったりする。かぶるとだいたい自分の頭に合わないんです。それでどうするかという、「これはね、うちの赤ちゃん用に作ったの」とか「これはネコちゃんがかぶるのよ」とそこにいないこのことを言うんですね。結果志向ってかわいいでしょう。

そのネルちゃんが初めて「I don't know」って聞いてきた。知らないから教えてと、そういうできないかもしれないことを自分からやろうとした。それでジェyson君が「横を切って失敗したから、切っちゃだめだぞ」と言いながら教えていったのです。

そういう様子を観察しながら、マーガレット・カーという人は、「できる・できない」ではなく、「やろうとするとこころ」を5つのポイント、つまり『関心→熱中→チャレンジ→コミュニケーション→責任』という姿に注目するようにして見ていくと、子どもの成長がよく見えてくると結論した。ジェyson君みたいな子は、困難に立ち向かうと言う意味で、いろんな事にチャレンジするわけですよ。でもチャレンジがいきなり始まるのではなくて、たいていいろんな事に関心を持ち、関心を持ったことに熱中し、くり返しやったり、いろいろ試行錯誤したりする中ではじめて、チャレンジが生まれる。だから関心や熱中そのものが、意欲を持って学ぶ力の育ちなんです。さらに、チャレンジすると、友だちとのコミュニケーションが豊かになってくる。ジェyson君がやったチャレンジは他の子から見ると、とっても素敵に見える。ネルちゃんはそこにひかれたわけですよ。「責任」とあるのは、その時ジェyson君は一生懸命教えたということを示しています。教えるというのは、相手の事を考え、行動すると言う事です。

このように、何てことないように見える場面かもしれませんが、その中に意欲を持って学ぶこと、人間として大事な力につながるような5つの姿があるととらえて見たらどうか。その子の視点に立って、その子が何かを真剣にやろうとする中に、育ちの姿を見る。5つのポイントで子どもの成長をとらえる事が、実は日々の生活や遊びの中にある子どもの豊かな成長をとらえる事につながるんですよ、これが「学びの物語」というニュージーランドの多くの園で使われている、子ども理解の新しい方法の要点です。

子どもの成長をその瞬間だけ見ているとわからない事がありますが、その前後のつながりを見ていると、育ってきているというストーリーが見えてきます。そういう事をもとにして、保育者同士で子どもの学びをとらえていくと、思いもよらないような子どもが成長する姿が見えてきます。マーガレット・カー先生は、そういう子どものとらえ方を「学びの物語」として紹介し、いろんな園でやっているのです。日本の保育士さんにやってもらいました。事例を紹介したいと思います。みんなと

一緒に遊べない子として、ネガティブに、否定的に見ている子を選んで、5つの視点を頭におき、学びの視点でやってください、とお願いしました。その子のやっている事のありのままの記録です。

※以下の資料は、すべて要旨及び一部抜粋です〈編集部〉

◇「学びの物語」実践—子どもが肯定的に見えてくると保育が変わる

◎事例「こう太君—やっぱりドライバーの方ができたね」6月13日（観察 桜井先生）

ポイント	とらえ方（例）	記 録
関心を持つ	話題、活動、役割等、ここにある何かに関心を見いだしたとき。見知っているものを見つけたとき、見知らぬもので遊んでいるとき、通常とはちがう変化についていこうとしたとき。	排水溝の蓋をはずそうとしている教師の仕事に関心を持ち見ている。 「金槌でたたいても無理だと思う。それはドライバーでやったほうがいいよ。」 教師がドライバーを取りに行こうとすると、「2本ね」。自分も手伝うつもりで2本のドライバーを準備するように伝える。 思うように蓋が取れない。こう太は、自分のドライバーをたてに差し込むので、できた隙間には教師のドライバーを差し込むよう、作業の手順を話す。 何度か繰り返すうちに、蓋が少し浮くとドライバーの差し込む位置を角度を変えながら進め、無事排水溝の蓋をとることができた。 「やっぱりドライバーのほうができたね。」 こう太は自分が手伝ったことで、できたことが満足気だった。
熱中している	一定の時間注意を持続したとき、心地よさを感じているとき、誰かに信頼を寄せているとき。他の人やものに遊び心を発揮したとき。	
困難に立ち向かう	むずかしい課題を課し、選んだとき。難問にぶつかったとき問題を解決するためにいろいろな工夫を凝らしているとき。	
考えや気持ちを表現する	言葉、ジェスチャー、音楽、造形、文字、数、お話などいろいろな手段で、表現しているとき。	
責任ある行動	他の人やお話や想像上のできごとに、公平さや誇り・助け合い・クラス生活を守るように、応答する。	
短期間の振り返り（ここではどんな学びが進んでいますか） こう太は酪農を営む家の仕事を手伝い、機械・工具などに関心を持っている。教師が使っているものでは開かないことを予想し、差し込む角度・ドライバーの使い方を考え、自分の進め方が間違いないと確信できるまで根気強く続けた。	次はどうしますか？ ・こう太くんの知識・関心を引き出したい。 ・こう太は自分から表現することが少ないため、こう太のよさを認め自信を持たせたい。	

ここに登場するこう太くん、彼は友達と一緒に何かをやるというのがとても苦手な子で、とても先生が困っているのを記録してみたということです。しかしね、これを読んだ時には誰もが「どこが気になる子なの？」と思うくらいしっかりしてますよね。排水溝の蓋が外せなくて、ドライバーを使って30分くらいやっていた。上手いかなないとじゃあこうしてみようと自分で考えてやってみる。考える力も人に指示する力もある。「こう太君って自分で問題を解決する力を持っている子なんだなあ」と、すごく見直しました」と桜井先生はおっしゃっていました。

こう太君は酪農の家の子どもさんで、ご両親は牛の世話とかやっているのですね。彼は毎日熱心に手伝いをしている子で、機械とか工具の事に詳しいんですね。ある時、お母さんが幼稚園にやってきて「先生、夕方まで保育をやってくださると助かるんですけどね。夕方忙しくて、こう太がいると本当に邪魔で」と話していた。それを聞いていたこう太君は「母ちゃん、俺がいなかったら、こまっぺ」と言ったそうです。それくらい立派に手伝いをしているつもりなわけですね。お父さんやお母さんのやっている事を尊敬しながら、実によく見ているわけですよ。でも先生は、こう太君をそんなふうに見ていなかったということですよ。

こう太君の見方が変わって、自分で問題解決できる子だなあと、その子の可能性が見えてきたら、保育の手立ても見えてきました。こう太君をどうやって遊びの中に混ぜるか、引き込むかということばかりこれまで考えてやってきたけど、たいてい失敗してきた。でもこの記録をとってみて、彼はおもしろいことをやれる子なんだから、彼の知識や関心を引き出していったら、友だちとの関わりも生まれるかもしれない。そして2週間後の記録には、今度は友だちの方から「こう太君がやっている遊びに混ざりたい」と参加していく場面が書かれていました。こういうような記録がとれると、こう太君の見方が変わるのですが、なんでこういう記録がとれたかという事をちょっとだけ説明します。

#### ◇子どもの育ちをとらえる—「学びの物語」の5つの視点

「学びの物語」の5つの視点とは、『関心→熱中→チャレンジ→コミュニケーション→相手のことを考える・責任を持つ』です。この記録に沿って言いますと、「排水溝の蓋を外そうとしている教師に関心を持ち見ている」と書いてあるでしょ。この一文がポイントです。排水溝の蓋を修理している桜井先生は、担任じゃないんですね。担任の先生や仲間は別の所において、クラスの子どもたちは別の所において、こう太君が1人でやってきたんですね。

普通だったら「またこう太はフラフラやって来た」なんて思ってしまう。フラフラやって来たと言えれば、次の言葉は決まっています。「ほら先生が呼んでるよ。あっち行って！」でもね、そういう大人の視点からではなく、こう太くんの視点に立って見て書いた。彼はフラフラとやって来たんじゃないんですよ。とても強い、具体的な関心を持ってやって来た、それはその後の言葉でよくわかるんですが、近づいてきた時点でそう見たというのが大事です。それでこう太が「先生、かなづちじゃダメだよ。ドライバーの方がいいよ」と言ったのですね。それを受け入れた。それで彼の関心から熱中へ、そして困難なことに立ち向かうと言う、そういう機会が作られた。

子どもの視点で見るというのは、単に傍観するだけじゃなくて、関心に寄り添ってそういう機会を作っていくことです。するとこう太の持っている可能性が見えてくる。「学びの物語」と言うのは、子どもの視点にたって見るということですね。5歳になったらこういうことができないといけなとか、頭から決めてかからないで、子どもの、その子なりの成長をとらえようとするということなんですよ。 次の事例を見てください。

#### ◎事例 「タケノコの物語」

記録1：園庭の隅の竹林でまことは毎日友だちと協力して汗だくになって夢中になって「タケノコ掘り」をしている。周りを丁寧に掘り、大切にタケノコを掘っている。お土産にと家に持ち帰る子どもが多い中、まことはタケノコに興味を持って硬い皮をむくと、白いやわらかいタケノコの赤ちゃんが出てきた。

記録2：給食にタケノコご飯が出た。「僕が掘ったタケノコと一緒に！どうやってタケノコご飯を作ったのかな？」「先生が作ったの？」

記録3：雨の日の保育室で、まことを中心に粘土でタケノコを作っていた。実際に食材に触れている

ので、五感を使って、とても丁寧で本物そっくりであった。何よりその集中力がすばらしかった。誇らしげに「先生見て！」と見せてくれた。

記録4：「タケノコはどこから出てきたの？」と園庭を深く掘る。春の図鑑で調べている。

\*「やる前は一人一人の学びを考えようと思わず、タケノコを掘っている子どもを見ても、『いいのかな？園長先生に怒られても知らないよー』としか思わなかったのだが、それを粘土で表現している姿を見て、これだ！！と思った。出来事や遊びの中で学んでいるんだと改めて感じた。」

\*「子どもたちが遊びに熱中し、打ち込んでいる時、遊びは深く、長時間続く。その遊びには、子どもにとって何かしら意味のあることがある。小さな行動、なにげない行動にも学びの意味を持たせ、発展させられるよい視点である。今までだと『たけのこを見つけて掘りました』という表面的なおたよりで終わっていたであろう活動を、学びの物語の五つの視点から考えることで、皮をむき、粘土に表現し、匂いをかぎ、五感をとぎすます活動へと発展した。本児の『学びの物語』を担任や保護者に伝えると、このような本児の行動に担任も保護者も驚き、そして成長とともに喜び合うことが出来た。」

◆子どもの成長は複雑で予測不可能

4歳のまこと君の入園して2ヶ月たった頃の記録です。まだお母さんと別れ際に泣いているまこと君。2週間くらいの間にとった記録で、目についた様子を簡単に記録しています。「学びの物語」の記録は、あんまり細かい記録じゃなくて良い、と言われていました。マーガレット・カー先生は幼稚園の教師としての経験を踏まえて、記録は細くなればなるほど、長くなればなる程、二度と読まない、でも振り返らない記録は意味がない。忙しい保育者には、そんな丁寧な記録は向かないと断言しています。

これを読むと、彼の中でタケノコに対する関心がずつつながっているという事が分かりますね。子どもが主体になってやっている活動をその子どもの視点で見ると、子どもの関心って一貫していて、しかも発展しているのですね。広がっているでしょ。最後はタケノコとは何ぞや、タケノコ学者のように調べることに熱中しています。知的な探究心が彼の中にしっかりと育ってきているのがわかるでしょ。

記録1は“熱中”していたから記録したものです。記録した時点では、そこに学びとか成長とかあるのか、全く見えなかったと書いています。子どもの関心というのは、最初はどんな意味があるのか、どんなふうに関心していき、予測がつかないものなのです。しかしつなげて読んでみると、確かに学びがあるのだとこの先生は書いていますね。

タケノコを粘土で作ったとありますね。どうやって作ったと思いますか。想像するからにやりにくそうですね。粘土を薄く延ばして、タケノコの皮を1枚ずつ作ってそれを巻き付けてタケノコにしていったのですね。そんな表現見たことないですね。その時、先生は、まこと君の造形のセンスが素晴らしいと思ったのではなくて、『記録1がポイントだった』のだなと思ったのですね。「今日はタケノコ掘りやったね。後はクラスだよりにのせて、おみやげに持たせればばっちりよ」と先生は思って、

おみやげで1本ずつ持たせた。そしたらまこと君は待ちきれなくてむいちゃった。そうしたら硬い皮の中に柔らかい赤ちゃんみたいなタケノコがいたんですね。そこが彼の感動であり発見でありおどろきだったのです。

そしてタケノコが食べられるということにも、彼は感動し、その感動を表現していく。子どもの関心と言うのは、この世界の豊かさを示すものなのです。だから、つながりや広がり生まれ、その中で熱中が深まり、チャレンジが生まれてくる。そこから子どもたちは意欲を持って学ぶ主体になっていくのです。

「こんな事をしてるのですか？うちのまことは」とお母さんは当然驚きます。いつも泣き虫のまこと君が、幼稚園でどろんこになって遊んでいる中で、こんな成長があるんですか、と。お母さんはとても喜んだそうです。子どもが自分から学んでいるんです。やらされてできるようになっているのではないのです。意欲と一緒に学ぶ力が育っていると思うでしょ。それが私たちが育てようとしている人間であるし、そういう姿が見えてくると、子どもはどの子も学び成長していることがわかるんです。

しかし、繰り返しになりますが、子どもの関心の姿に何があるかはそのときにはなかなかわからないのです。これはたまたま発展したから良かったけれども、発展しない事もあるかもしれない。ただここで「打ち切りね」としてしまったら、そこで終わりになってしまうのです。私たちが子どもの主体性とか子どもの関心を大事にするというからには、子どもの関心はどのように発展するか予想がつかないということを認めなくてはなりません。給食でタケノコを出すというのも、意図せぬ教育ですよ。そして造形で、まこと君はとても友だちから注目される存在になって、今では泣かなくなったとのことでした。

子どもの関心に沿って学ぶ機会を作っていくという意味で「子どもに任せる」ことが大事です。それは、本当に深い学びというか、スケールの大きい人間に育てる上でとても大事だからです。こういうふうはこの子が世界の素晴らしさと一緒に自分の素晴らしさを発見していく。やっぱりそういうプロセスが保育の面白いところなんじゃないかなと思っております。

#### ◇保育の記録を「学びの物語」の視点で読み返す

次の事例にいけます。これは学びの物語という視点に沿って、自分たちがこれまで書いてきた子どもの記録、保育日誌とかを読み返し、子どもをもうちょっと理解しようとしている東京の保育園の先生が書いたものです。2歳児クラスで、8月に3歳になったとうご君という男の子の記録です。

#### ◎事例 「学びの物語」を学んで、子どもの見方がどう変わったか

##### 1 中間総括のときのとうご君の報告から

…春から初夏あたり、とうご君の噛み付きや引っかく・押すなどの乱暴な行為が目立ちました。理由は、おもちゃをとられそうになったりというのが多く、あとは一緒に遊びたかった、「だめよ」など否定されて嫌だったなど。でもたまに理由もなく、通りすがりにお友達の頭をたたいたりという行為も見られました。

とうご君は私だけではなく、たぶんいろんな先生に一日中何かしらで怒られたり、注意されたり、いけないことをしていたわけですが、よく考えると本人も苦痛だったのではと思います。今、とうご君は、だいぶ言葉で言えるようになってきたことや、少しずつですが以前より感情を抑えることができるようになったことで嘔み付きや引っかくなどの行為は落ち着いてきたと思います…

## 2 学びの物語の視点に立って記録を読み返して書いた、総括会議の報告

<8月以降のとうご君について>

8月21日 みくちゃんがトイレのあとにトイレットペーパーを使っているのを見て、「とうご、女の子になったらやってもいい?」と聞いていくる。

→それまで、とうごはよく排尿のあとトイレットペーパーを使っていた。保育士は「それは女の子だけだよ」と声をかけ、とうごは「みくちゃんは女の子?」「とうごは?」「ばんくんは?」とお友達のことも気になっていた。よく「とうごちゃん、女の子!」と言っていたが、このときは自分は男の子なんだと理解し、このようなことを言っていた。でも男の子も女の子になれる?という発想は子どもならではだなど感じた。

9月14日 とうご君とたくちゃんが、二人でイスを使って電車ごっこを始める。二人とも運転手をやりたくてもめ始める。どちらも譲れない様子だったが、ふととうご君がイスを二つ横に並べ「こうすれば?」と二人で一緒にやる。

→もめるだけでなく、自分で考え解決できる力があるんだなど感心した一場面であった。

## 3 振り返ってみて

…それまで私はとうごの引っかきや押す、叩くなどの行為がやはり気になり、なんでやっちゃうのだろう、理由やその行動に至った背景はあるのだけど、どうしたらそれがなくなるのか…そればかり考え悩んでいたと思います。…受け止めていこうと思いつつ、正直、よい方へ変わればいいのにと目で見えてきたと思います。とうご君もきっとどうにか変わってほしいという私の気持ちは少なからず感じていたのでしょう。やってしまったときに、大人の顔色を見るようになりました。

学びの物語の視点に立ってみて、皆に認められたいとうご君の気持ち、でもうまく表現できないもどかしさ、それをいろんな形で表現していることも改めて理解できました。そしてやさしさや気遣いができるよい点も伸ばしてあげたいと思いました。また、とうご君は自分で遊びを考える力があること、おままごとなどが上手であること、手先が器用なので作業する遊びが好きです。遊びこめているとうご君はとても落ち着いていて穏やかです。…今回学びの物語を学んで、日誌を読みつつ自分自身でも振り返ることにより、子どもの視点に立って考えることができました。落ち着いてじっくり考えるとほんとうにいろんなことが見え、そして伸ばしていきたいところも見えてきました。その子を肯定的に捉えることで、よりその子について深く考えることができるのだなと思いました。もっと早い段階で、そしてリアルタイムでやれていたなら、とうご君の世界を共有し伸ばしてあげたのに、もっともっとう

ご君と楽しく遊んでいたのにも思いました。本当にもったいなかったなと思います。このことをこれからの保育に活かしていけたらよいなと思います。

.....

「中間総括」のところを読んでもわかるように、この先生は子どもの視点に立って考える事のできる先生ですが、しかしつい気になるところにばかり目がいついていた。とうご君から見たらどういう世界が広がっているんだろうと言う視点で自分の記録を読み返してみた、そしてまったくちがったとうご君の育ちが見えてきたという報告です。

8月21日と9月14日の記録、その次の「→」から以降は、学びの物語として読み返したときのコメントですね。「中間総括」のところを読むと、やや衝動的に行動する傾向があるのかなという印象を受けますよね。でも8月21日と9月14日の事例を見ただけでも、とうご君は色々考える子だと思いますか。行動をどれだけ抑えられるかという点から考えるとどうかわかりませんが、そんなに衝動的で、その時だけの自分の勝手な都合ばかりではないんじゃないかな、という感じがしませんか。

8月21日の記録を見て、私はとても驚いたんですけれども、みくちゃんがトイレの後にトイレットペーパーを使っているのを見て「とうご、女の子になったらやってもいい？」と聞いてくる。つまりトイレットペーパーが好きで、長く引っ張って遊んだり、紙で拭くのが好きだから、そのためにおしっこをしますみたいな感じでいたんでしょ。でも先生が「それは女の子だけよ」と教えると、とうご君の関心は、男の子・女の子への関心になっていくのです。次の日あたりから「お前は男の子？女の子？おれは？」と聞くのですね。聞いて回って出した結論は「おれは男だ」という事ですね。しばらくは女の子と言っていて、そういう行動を見たら「この子って変な子ね。自分のやりたい事だけを優先して、先生の言う事を全然聞いてない」という感じじゃないですか。ましてや記録の事例も読み方によっては、女になってまでトイレットペーパーを使いたいのか？なんて事になるじゃないですか。トイレットペーパーを使ってはいけないと言われたのにちゃんと聞かない子のようにみえるでしょ。でも彼は、みんなに男か女かを聞いて行って、自分は男だという結論を出して、そしてそこで止まらずに「じゃあ、どうやったらトイレットペーパーを使えるのか」という事を考え直すのですね。「そうだ、女になればいいんじゃないか」と言うのが彼の結論で、「じゃあ、とうごが女になったらいいの？」と言うのが、その日の言葉なんですね。だから、これはただその日の思いつきで言ったわけじゃなくて、彼の何日かにわたる調査と結論があって、そして彼は新しい結論に立ったわけですね。彼は考えているんです。衝動的でもなんでもないとはいませんか。

だから記録にあるように、運転手を2人ともやりたくて譲れなかったけれども、ケンカにならないで「こうやったら？」と彼が提案する。提案する力があるんです。2歳から3歳になって成長したんじゃないかという見方もあると思いますが、中間総括では「乱暴で理由もなく友だちをたたいたりすることがある子」となっているのに、ここでは色々考えて、面白いことも結構人の事も考えられる子なんだな、と見えてきた。他の子に関心を持っているとか、どんなふうによしくしようとしているか、という姿がここにはいっぱい記録されています。

『振り返ってみて』を読むと、とうご君はいろんな事を見ているし、考えているし、友だちにも関

心を寄せているということが見えてきて、とうご君の成長が見えてくる。こういう視点で子どもの記録をとってみると豊かな成長があり、保育は、指示したり管理したりする営みではなくて、その子どもの主体的にやろうとする事にどう応えるかと言うことであって、いろんな応え方や沢山の選択肢がある、楽しい創造的な営みだとはっきりと見えてくるような気がします。

#### ◇保育者の専門性とは、子どもの見えない可能性が見えること

保育者の専門性というのは、一人ひとりの子の、見えていない可能性が見えるということではないのかなと思います。子どもの問題を見つけ出し、問題をなくすという考え方もあるけれど、そうではなくて、見えない可能性が見えるようになると、問題がなくなるわけではないが信頼関係ができるようになる。そしてもう一つ、子どもの見方と取り組みは、一つの正解しかないという考え方から抜け出さなければならないのではないかと私は思うのです。子どもの見方も保育もいろいろあっていいし、成果は一つだけという“思い込み”に、私たちは気づいていかななくてはいけないのではないかと思います。

# 「子どもの発達と保育の質」

## ー子どもの見方を変えて保育を楽しくーを聴いて

名古屋短期大学 牧 信子

今、保育を語るとき「子ども・子育て新システム」の基本制度案についての話題が必ずあがり、その目的・方針・新システム等々について語られることが多い。

目的については以下の4項目があげられている。

- ・すべての子どもへの良質な成育環境を保障し、子どもを大切にする社会
- ・出産・子育て・就労の希望がかなう社会
- ・仕事と家庭の両立支援で、充実した生活ができる社会
- ・新しい雇用の創出と、女性の就業促進で活力ある社会

また、方針の中には以下のような4項目があげられている

- ・子ども・子育てを社会全体で支援
- ・利用者（子どもと子育て家庭）本位を基本とし、すべての子ども・子育て家庭に必要な良質のサービスを提供
- ・地域主権を前提とした住民の多様なニーズに応えるサービスの実現
- ・政府の推進体制の一体化

超党派では「子育てしながら働ける体制作りとともに、幼児期からの教育・人づくりに力を注ぎ、雇用や経済成長にもつなげる」との合意を重視していこうとしている様子がうかがえる。平成25年度施行を目指して、財源の一元化、こども園、こども指針の創設、免許・資格の一本化など大きな制度改革が行われようとしており、新システムの実現の行く末もどのような形になるのであろうかと非常に気になるところである。

新システムの中身からは待機児童の解消や働く母親がクローズアップされ、その支援は行われ「保育サービスの量的拡大」が進む中で保育を受ける子どもの存在や保育の質については、なかなか見えにくい状況である。

乳幼児期の子どもにとって本当に大事にされなければならないことはなんなのか、乳幼児期の保育や教育の質が低下し、子どもの存在が非常に影の薄いことを感じずにはいられない。

ところで、今回の講演をお聞きしたあとすぐに、日本教育新聞12月13日号に[幼保一体化の行方]事務局5案に一長一短の大きな見出しを目にした。事務局の提示した、①～⑤案それぞれに一長一短があり、未だ着地点が見えない幼保一体化の状況である（①～⑤案については教育新聞を参照）。

この紙面で、認定こども園制度の設計にかかわった小田豊氏（国立特別支援教育総合研究所理事長）は「教育と福祉、根本理念の違う2つの法律に、同時に『こども園』を位置づけることが果たして可能か」と疑問視している。

今回の大宮勇雄氏の講演で、この「幼保一体化」の問題に多少は触れられるかと期待をしたが、そ

の点については、殆ど触れることなく、「保育の質」についての終始一貫したお話であったと思われる。しかも、保育実践のことに重きをおいて「保育の質」を熱く語られた講演であったのではなかろうか。

私としては、524 教室を埋め尽くした参加者（年齢層・保育経験年数・立場等々が様々であったと感じた）が、それぞれの立場で自分自身の保育を振り返るきっかけを与えて頂くことになった貴重な機会ではなかったかと考える。

保育をするということは、目の前の子どもたちが無我夢中になって、時を忘れ、自分の遊びに没頭する姿に、保育者自身が共に心を寄せ、心を揺らし、イメージを共有したり、子どもたちの気づきや発見に感動したりしながら、子どもと共にゆったりとした時間や場を過ごすことである。

子どもたちは、そうしたゆったりとした時間や場が保障されているからこそ、その中で、自分にとっての大切な体験をし、その体験したことが経験となって身についていくのである。そうした過程（プロセス）を保育者は大切にしたいものであり「〇〇ができるようになった」という結果のみで子どもの姿を捉えてほしくないと思う。ゆったりとした時間や場の保障は、自分の周りの環境に興味・関心を持ち、疑問を感じたり、試行錯誤を重ねたり、意欲を持って挑戦したり、時には挫折したり、葛藤したりと様々な学びを自分自身で身につけているのである。その過程をしっかりとらえ、育ちを促すことのできる保育者を「質の高い、専門性をもった保育者」というのではないだろうか。

大宮勇雄氏が講演の中で、また資料にも書かれているが「保育者の方たちよ、子どもたちの姿を、まず肯定的に受けとめることから出発し、何を子どもが実感しているか、何を体験しているか、子どもたちをどう理解するかが保育の質の中心である」と熱く語られておられたが、正にその通りであると考ええる。

しかしながら、今、子どもたちを目の前にしてこうした保育が展開されている保育現場が少なくなりつつあるのではなかろうかと、非常に危惧しているのを感じるが、私だけであれば幸いに思う。

保護者のニーズに合わせた（厳しく言えば保護者のニーズに迎合した）結果論のみが先行し、子どもの生活が寸断された保育が展開されているように思えてならない。

子どもの姿を肯定的に受け止め、子どもに付き合い、子どもとの時間を共有し、彼らの気づき、発見、疑問、感動等々に心から共感でき、幼児理解を常に深めようと努力する保育者でありたいと思う。またあらねばならないと強く感じている。

今回の大宮勇雄氏の講演を通して、幼児にとって「今が充実している」ということは、幼児一人ひとりの内面が充実していることで、とても重要なことであると考ええる。幼児一人ひとりの内面の充実を図ろうとすることが、すなわち保育の営みの中心となるべきであると言えるのではなかろうか。

ところで、保育者養成校で学ぶ学生を保育者として世に送り出すことが私たち教授している教員の役目である。新規採用され、希望に燃えて保育の場に臨む彼女たちが「質のよい保育・質の高い保育者」を目指して、先輩保育者の姿をモデルとしながら、常に自分自身を磨き、向上しようとする意欲を持って保育現場に出て欲しいと私たち教員は願い、「保育とは」「子どもを保育するということは」「乳幼児を理解するとは」等々を学生たちに語り、保育することの本質を学んでほしい、理解してほしいと日々願っている。

今回の大宮勇雄氏の講演内容は、今、子どもを取りまく保育の問題が様々に議論されている中、子どもたちの未来を見据えて、保育の本質を語られた印象に残る講演であったと感謝を申し上げたい。

また、名古屋短期大学・桜花学園大学・保育子育て研究所 主催として正に時を得た講師の招へいであったと思う。  
(執筆 2010年12月20日)

## 大宮勇雄氏の講演を聴いて

桜花学園大学保育学部 今野 正良

講演者の大宮氏は、我が国の保育政策の根底にある子ども観について、2つの考え方を提示している。OECD（経済協力開発機構）の「人生の始まりを力強く Starting Strong」と題する報告書（2001）の指摘に沿ったものである。大人に向かって成長する次の段階への「準備の時代」という捉え方と、人生の最初の段階としてそれ自体が大事な時代であり「子どもはひとりの市民である」とする捉え方の2つがあるとする。その上で、現代は子ども観の転換期であると捉える。今、欧米を中心とした世界の子どもの観は「準備の時代」から「市民としての子ども」観へ、ゆっくりと着実に転換しつつあるとみる。

この子ども観の一大転換を体現した保育実践こそが、イタリア・レージョエミア市で長きにわたって積み上げられてきた幼児教育実践であり、「テ・ファリキ」というカリキュラム指針から始まったニュージーランドの保育実践革新の運動であるとされている。

この講演のなかで話されたことの重点のひとつに、子どもの日々の生活をいかに豊かなものにしていくかという視点がある。保育の質の3要素として、プロセスの質（日々の子どもたちが経験する生活の質）、構造の質（職員配置やクラス人数、保育者の力量など直接的にプロセスの質に影響する条件）、労働環境の質（職員にとってのやりがい）の3つを挙げている。子どもの充実した生活にとっては、もちろんこれら3要素を充実させる必要がある。そのうち、ここではプロセスの質について再認識したことを中心に述べたい。

子どもや親の方とのかかわりを実践する際に、筆者はエピソード記述といって一種のインシデント・プロセスの筆記をとることが多い。記述を具体化、典型化して資料を作り、今後の対応についての具体的提案に向けて話し合うのである。話し合うことで、自分の習慣化した考え方やとっさの判断を振り返って、できごとを見直す新しい視点に出会うことがある。大宮氏は保育のプロセスの質を高める1つの方法として、ニュージーランドのマーガレット・カー氏が提唱した「学びの物語」というやり方を自らも実践し紹介している。

「学びの物語」は、社会文化的アプローチ（その社会において価値づけられた活動に子ども自ら意欲的に参加しようとして学ぶという観点）を保育原理に据えた「テ・ファリキ」という考え方に支えられており、子どもの可能性の発見と実現に最大限のエネルギーを注がなければならないという大人の態度にかかわっている。子どもの可能性の発見と実現のために5つの視点（関心、熱中、困難に立ち向かう、表現する、責任をとる）でとらえたエピソード記述が、「学びの物語」なのである。そのような視点で子どものありのままの姿を捉えなおすとき、今まで問題と見えていた行動の中に「困難に立ち向かう」姿、「責任をとる」行動などが見え、子どもの主体的な学びの姿が見えてくるという。

インシデント・プロセス法による事例検討会を実践してきた筆者にも、子どもの新しい姿が見えてきた体験があった。それは、自らの習慣化した子どもへの対応に気づき、新たな視点を得た瞬間であっ

たのだろう。

1例を述べさせていただく。当時、1～2歳だったアイちゃんは、目が見えず耳が聞こえなかった。抱っこしてトランポリンをしたり、大太鼓をトントン触らせたりしているうちに、気分が乗ってきたらしく嬉しそうに頭を前後に振って再三こうした遊びに没頭するようになり、筆者にしがみついてきて一緒に遊ぼうとしてくれるようになった。おやつの時間になると、哺乳瓶でジュースをたくさん飲んだ。食べ物については、極端に偏食があり、食事は普段からバターパン以外のものはほとんど口にできなかったという。大人がパンをちぎって口にトントン触れさせると食べてくれた。自分で持たせようとしても、「ウー」といって怒り、つかもうとはしなかった。パンを一口食べる度に、手のひらで口と鼻の辺りを何度も撫でまわすように触っていた。こうした、顔を手でこする行動は、パンを食べる時に毎回、しかも頻繁に見られるようになった。撫でる範囲も、顎から両方の頬、そして額へと広がった。パンを食べる時はいつも、顔中がよだれでいっぱいになったのであった。それから2か月ほどして、親の方から電話をいただいた。手にパンを持たせたら、自分で顔の頬の方へ運び、やがて口を発見し、口へと運んで食べたとのことであった。

これまで顔中へ手のひらでよだれを塗りたくっていたのは、口がどこにあるか、頬はどこにあるか、額はどこか、心的地図（メンタルマップ）を作っていたのだということに、筆者は初めて気がついたのであった。

その後、自分の口の位置を見出そうとする何人かの子どもたちに出会っている。子どもの主体的学びの姿が見えてきたときには、感動を感じる。大宮氏は、学び志向のある子どもに育てたいという。筆者も意を同じくするものであり、全ての行動には子どもにとっての意味があることを少しでも理解できるように、今後とも子どもたちや親の方から自分自身が学ぶかわり合いを進めていきたい。

ところで、2010年6月29日に少子化社会対策会議より、子ども・子育て新システムの基本制度案要綱が出されている。2011年の通常国会に法案が提出されて2013年度からの施行をめざすとされている。これについては、各方面から議論がなされているところであるが、主体としての子どもの生活の質を高める観点から検討が進められているといえるのだろうか。幼稚園・保育所・認定こども園の垣根を取り払い（保育に欠ける要件の撤廃等）、新たな指針に基づき、幼児教育と保育をともに提供するこども園（仮称）に一体化し、新システムに位置づけることは、地域における（障害児を含む）子育てに少なからぬ影響を与えるものと思われる。また、多様な事業者の参入による基盤整備を行うことについても、サービスの質を担保する客観的な基準による指定制を導入するとはしているものの、サービスの質の向上や子育て家族の経済的負担について十分な理解が得られているわけではない。今後の動向を注意深く見守っていきたい。

こうした折り、今回の講演会では保育の質に関する内容が中心であったが、筆者は改めて学び直す機会を得た。同時に、子どもと直接かかわる立場の一員として保育の質を考え実行し続ける大切さに改めて我が身を振り返っているところである。御講演をいただいた大宮氏に感謝申し上げます。

# 子育て支援活動の今後の課題

## —子育て交流会を支えるスタッフの声を通して—

### 子育て交流会スタッフ一同

#### 子育て交流会、8年のあゆみ

保育子育て研究所の子育て支援活動として、「子育て交流会」が名古屋キャンパスではじまって8年経ちました。地域に開かれた大学として、0歳から3歳までの未就園の子どもとその保護者が、いつでも、だれでも気軽に参加でき、ゆったり親子で過ごすなかで、育児の悩みから開放され、子育ての楽しさが味わえる子育て交流会をめざしてきました。

また、保育者養成校として、このキャンパスで保育学部、保育科、専攻科保育専攻の学生が大勢、保育者を目指して学んでいます。学生がこの交流会に参加する親子に触れるなかで、今、保育現場に求められている子育て支援を学ぶことも、この子育て交流会の大きなねらいです。

2003年5月、図書館の北側の元ピアノ練習室を改装した子育て支援室で、月1回、毎回平均、10組の親子の参加で、子育て交流会がゆったりスタートしました。保育子育て研究所の心強い支援がありました。担当のスタッフは宍戸一人でした。

2年目・3年目は、もっと回数を増やしてほしいという参加者からの要望に応え、スタッフに清と、事務担当として難波、母親の加藤、富崎、松浪の3名のボランティアを迎え、月4回実施し、毎回、20組を超える親子の参加がありました。

4年目には、参加者の増加で、赤ちゃん交流会と、自主交流会の日（開放日）をもうけ、スタッフに上村、水谷、そして母親のボランティア、武藤が加わりました。

年々、地域に根ざし、1年目、年間138組の参加者が、5年目からは、年間1000組を超えるまでに増え、時には身動きできないほどのたくさんの参加者があり、時々、付属幼稚園の広いホールを借りて実施したりしました。この年の大きな前進は、大学の事務局に、保育子育て研究所課長が誕生し、担当に馬場があたるようになったことです。ただし、専任といえども、他の課との兼務ですが、これは一歩前進です。スタッフの人数が増えたものの、全員、アルバイトであり、ボランティアは、まったく無償の状態、専任の職員がいなかったからです。

6年目にも大きな前進がありました。新しく出来上がった7号館のプレイルームが、子育て交流会室になったことです。部屋は残念ながら参加人数に比べて、狭いのですが、広いウッドデッキができ、広々とした芝生広場が使えることです。スタッフに荒川、ボランティアに高田、橋本が加わりました。

7年目は参加者がますます増え、時には、40組から50組の親子の参加があり、身動きできない状態の日もあり、学生に参加を遠慮してもらおうような日もできました。参加した親子がゆったりくつ

ろげ、学生も参加しやすいよう、年齢別に分け、回数も週2回に増やし、赤ちゃん交流会、1・2歳児交流会、2・3歳児交流会と実施するようになり、8年目を迎えています。

### 子育て交流会を支える学生・教員・スタッフ

この子育て交流会への学生の参加は、初年度より、支援室の壁面制作、牛乳パックを使った大型滑り台から絵本やおもちゃづくり、手遊び、ペープサート等々のさまざまな保育参加がありました。大学の教員からも、たくさんの支援、協力がありました。音楽担当の教員は、ゼミ生にすばらしいミュージカルや楽器の演奏を指導し、子育て中の母親の心をほっこりさせてくれました。図画工作担当の教員は、魅力的なおもちゃを提供してくれました。その他の先生方も、いろいろな協力をおしみなくしてくれました。

学生、教員からこのような多種、多様な援助がありましたが、スタッフもじつに、豊かな個性と特技をもっています。そして、それぞれの個性と特技をいかし、その力をいかにこの子育て交流会に発揮してくれています。

保育スタッフは長年の保育現場経験をいかした、子どもへの適切な声かけや保育指導をし、母親の育児相談にさりげなくのり、育児のコツを伝えています。事務担当スタッフは、毎回、早朝より、ウッドデッキに断熱用のカーペットを敷き、日差しをさえぎるパラソルをたてます。部屋を少しでも広くするため、ボールプールや滑り台、ゴーカートをウッドデッキに出し、受付の準備をします。



ボランティアスタッフの方々は、双子や、年子の兄弟がいて、日ごろ、なかなか抱いてもらえない子どもをさりげなく抱きとめてくれています。また、母親の苦勞した育児体験は、子育てに悩む母親の心をときほぐしてくれています。中には、プロ顔負けの、おもちゃ作りの名人や遊びの名人、歌姫がいたり、静かに黙っていてもまわりを明るくする笑顔のすてきな人もいます。そして、みんな子育て交流会を支える、なくてはならない大切なメンバーです。

保育士の資格があっても、それに見合った賃金が支払われていない保育スタッフ、そして、全く無償のボランティアスタッフの方々が、なぜ、この子育て交流会を長年支えてきてくれたのでしょうか。

今回は、ひとりひとりのスタッフの方々に、この子育て交流会から、学んだこと、感想等を書いていただき、そのなかから、今後の子育て交流会の課題を明らかにしていこうと思います。

### ボランティアスタッフの声

☆☆☆

「ちょっと遊びにきませんか？」という呼びかけに、3歳になる前の下の子を連れ訪れたのが図書

館の北側の元ピアノ練習室を改装した子育て支援室です。2歳上の姉を幼稚園に預けて下の子と二人で家の中で過ごす毎日に、突然暖かいお誘いを受けてワクワクしながら行ったことをまだつい最近のように思い出します。子どもを遊ばせる目的というより、私自身の子育ての悩みを聞いてもらいにせつせと足を運び、そうしているうちに同じ年頃のお友達が子どもにもでき、私にもできて、はじめは数組しかいなかった親子が何十組にもなっていました。

下の子が幼稚園に入園すると少し身軽になった私は支援室にママさんボランティアとして通うことになり、初めてのボランティアがいつの間にか8年目を迎えました。今になってとても驚いています。交流会という気取らないあの頃のホンワカとした雰囲気が大好きで、来てくれた親子の皆さんと、手作りしながらおもちゃを作ったり、悩みを打ち明けたり、井戸端会議をしたり、すべてが経験となっていることは、私のボランティアとしての実りです。そして大切な仲間との出会いが子育て支援室を通してあったことに感謝します。

谷川俊太郎さんの「目の窓 開けろ」の詩の手遊びを楽しんで歌う親子の姿がいつも目に浮かび、心が温かくなります。今後も支援室が人と人を結ぶ架け橋になる場所であってほしいと思います。

(加藤 香)

☆☆☆

子育て交流会ができて8年も経っていたのですね。居心地が良かったのでここまであっという間のできごとでした。この交流会ができた当初は、私の子どもも利用させていただきました。そして、名短の近くだったこともあり、自分の子ども見たさにボランティアをさせていただきました。不純な動機でしたが楽しく、やがて私の癒される心地よい場所となりました。



ただ、温かい雰囲気に甘え、自分のペースで参加させていただいたので、ボランティアとしてお役に立てず申し分けなく思っています。この貴重な体験は、今、私がちょっとしている仕事のきっかけとなりました。感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。(富崎 昭子)

☆☆☆

子育て交流会に私がボランティアとして参加することになったきっかけは、息子がお世話になった幼稚園の先生が交流会の担当をされるということと、お友だちのお母さん方がボランティアをされると聞いて、私もお手伝いできたらと思ったことがきっかけでした。7年近くになると思いますが、ボランティアを続けてこられた理由はたくさんあると思っています。先生方やスタッフの皆さんの気遣い、温かいお言葉、助言など本当に励みになりました。一緒にボランティアをしていたお友達の存在。交流会でのことはもとより、私自身の育児（小5の男児）の相談や健康面の悩みなど、お話できたり、

お聞きすることで、私も安心して育児ができたのではないかと思います。

それとやはり、参加してくださったお母さんとお子さんが笑顔になっていくのが近くで感じられたことだと思います。初めて来られるお母さんのなかには笑顔ではなく、心配顔ばかりで、お子さんを見られる方や、まわりのことが気になる方がいらっしゃいます。私もそうでした。まわりにどう思われているのか、私の育児はこれでいいのかなど漠然とした不安ばかりでした。そんな時、サークルに入って同じ年頃をもつお母さん方と会話してとても落ち着きました。なにより私の子どもを他のお母さんに「かわいいね」と言われただけで安心できたことを覚えています。

私もボランティアを通して交流会に来てくださるお母さんにこうした気持ちになってもらえるようにと心がけてやってきました。交流会は子と子、先生と子、母と母という、今現在のお母さん方の悩みや不安を軽く、明るくしてもらえよう存在であってほしいと思います。(松浪ゆかり)

☆☆☆

私自身、11年前第一子の娘と子育て交流会のデビューは、主人の転勤で行った東京でした。

出産後半年たったある日、区主催の子育て交流会を知りママ友を求め参加。ちょうど同じぐらいの月齢の子を持つママとすぐに友達になり、1週間に2・3回各家庭を回り、日中を一緒に過ごしたり、旅行にも行ったりす



る仲間になりました。後で聞いた話ですが、そのうちの一人も転居してきて知り合いもいなくてノイローゼ寸前で、友達作りに必死だった、と話していました。この交流会を含め、このような駆け込み寺的、救世主的出会いの場所は、特にまだ歩けないような小さい子どもを持つ母親のママ友づくりに必要不可欠だと思います。多人数になる等の問題がなければ、もっとPRすると思います。

下の子の時は、このキャンパスの子育て交流会にお世話になりました。先生や育児の先輩スタッフさん、私と同年代のボランティアのみなさんは皆かなり頼れる存在でした。いつも温かく、悩みを相談すると「大丈夫」と安心させてくれ、話をすることが楽しくて、毎度癒されました。子どもを遊ばせたいのはもちろんですが、私を含め母親本人が、誰かと話したい、悩みを聞いてほしい、相談したいと思ってくる場所としては、ベストだと思いました。下の子が幼稚園に入り交流会にいかなくなっても、まだこのアットホームな雰囲気味わいたいがために、ボランティアに残ったといっても過言ではありません。今ではスタッフの人と家族ぐるみでお付き合いするようにもなり、いい人達にめぐり合えたと感謝しています。

せっかく大学にある支援室なので、保育科、保育学部の学生さんが就職前の貴重な体験場所として子どもたちと自由にかかわりをもてるようにできたらいいと思います。母親も、特定の人以外のかかわりの少ないわが子に、いろいろな友達とふれあってほしいと思っているし、かわいがってもらっ

たら悪い気はしないし、子どもの反応を見られるから、嫌ではないと思います。

最後に、私ごとですが、木の手作りおもちゃやキッチンを、作らせてもらって置いてあります。市販のものにはかないませんが、木は加工しやすく、思いに近い形ができるので、いろいろ冒険させてもらい楽しく作らせてもらいました。それをたくさん子どもたちが遊んだり、触れたりしているのを見ると、作る苦勞が吹き飛ばし、かなり嬉しいです。(武藤 愛子)

## 事務スタッフの声

☆☆☆

私が子育て支援交流会に関わらせていただくようになって、途中1年の空白がありますが、もう8年になります。はじめは月に1回、5～6組の親子が参加されるだけののんびりしたものでした。しかし、年を追うごとに参加者は増え、広がったはずのプレイルームもとても狭く感じられます。



私がこの8年で特に感じたことは、もちろん問題点もたくさんありますし楽しいことばかりでもありませんでした。でも、あえて嬉しかったこと、喜びを感じたことを書かせていただきます。

まずひとつは、お母さんたちの笑顔が増えるのを見ることです。はじめは表情も硬く、子育てに疲れているお母さんたちが、何度も参加するうちに次第に気持ちもほぐれ、笑顔に変わる。子どもに対してもあまり笑顔で接することができなかつたお母さんが優しく笑っている。そういう場に立ち会ったとき、思わず「やった！」と思います。交流会は、もちろん子どもたちのためにあるのですが、子どもの幸せのためには、まずお母さんたちが幸せでなければなりません。お母さんたちが気持ちよく過ごせる、安心できる、そういう場ができていくか、いつも自身に問いかけていなければいけませんね。

私は事務を担当していますので、直接子どもたちと接することはあまりありませんが、先生方やボランティアの方々の心のこもった働きかけのおかげで、参加者が参加者を呼び、今のように大勢の方たちが利用するようになりました。お母さんが笑顔になると、自然に子どもも笑顔になります。交流会ってすごいな…と本当に思います。

もうひとつ、それは人との出会いです。子育て支援に関わる先生方や全てのスタッフ、また学生さん。ここに来なければ決して出会えなかつた人たちとの出会いが、私にとっては宝物です。特にボランティアさんたちが自然にお母さんたちの気持ちに寄り添っている姿は、見ても温かく、ホッとさせられます。自分もあのように接していきたいと思い、学ばせてもらっています。参加者のアンケートでも、スタッフがたくさんいるので安心、下の子を抱っこしてもらえたので上の子と久しぶりに遊べた、気持ちを聞いてもらえた、などの感想がたくさん出てきます。この交流会の大きな特色だと思います。

小さな子どもたちは、存在そのものが癒しです。私は子どもたちに癒され、そしてスタッフ同士で悩みを聞いてもらったり元気をもらったり…。仕事をしているというより、私が一番楽しませてもらってきました。感謝です。

課題はいろいろあると思いますが、先生方、事務スタッフ、ボランティアさんたちで時々ミーティングをし、情報を共有し合うことで解決していくことができるのではないのでしょうか。始まった当初の温かい手作りの雰囲気、これからも損なわれず続いていくことを心から願っています。

(難波 佐保)

## 保育スタッフの声

☆☆☆

保育者養成大学で子育て支援が、明るい施設を提供して無料開放していることは、ほんとうに素晴らしいことだと思います。私も参加してから、5年になるのですね。赤ちゃん交流会参加者を0歳児と限定してから2年目になりますが、参加人数が10組前後の日は、大きい子に踏まれる心配もなく、ゆったり過ごせる場は、心地よい空間になりました。一



人ひとりのお母さんに、お子さんの様子を見ながら、また、相手をしながら声をかけることができ、子育ての様子や困っていることを聞かせていただくことができました。(20組近くなると声をかけられない人も出てきました。)遊びの紹介なども声が届き、楽しめました。

子どもの背中に名前と生後何ヶ月かを書いたガムテープを貼ってもらいました。(男の子は水色、女の子は桃色)背中を見れば名前と呼んであげられるし、何ヶ月か?聞かなくても話しかけがしやすく良かったです。

赤ちゃんなので、ゆっくりめのテンポで歌ったり、視覚に入るゆっくりした動きに気がつけました。かわいいまなざしで注目してくれ、短いひとときですが、赤ちゃんとの心の交流を感じ、私も癒されます。

ゆったり親子で遊んでほしくて、短くて繰り返し遊べるものを1~2曲遊びの紹介をしてきましたがどうだったか?印刷物を用意したほうがよいか?先月の遊びのおさらいをしてから新しいものを紹介したほうがよいか?と参加しているお母さん方の状況を見ながら進めていますが、いかがでしょうか?この場に来て(数人の子育て経験者に見守られながら)、ここで子育ての輪を育んだお母さんたちが、今度は先輩ママとして、新米ママたちを応援し伝える。核家族が多くなった現代では家族間での縦の伝承は難しくなっているため、このような横のつながりとしての子育ての輪が広がっていく場であってほしいと思います。その場の援助者の一人として参加させてもらっていることをうれしく思います。

(上村 鍾子)

☆☆☆

学生時代の恩師、神野三千代先生から、「ちょっとお手伝いしてみない？」と嬉しいお誘いを戴き、母校のキャンパスに通い始めて早5年。私は毎回、人との出会いを楽しみに出かけています。この子育て交流会は、私が今まで続けてきたいろいろな活動をすべてつなげてくれたといっても過言ではありません。現実にも、その中で学んだことをそれぞれの場で生かすようにしています。神野先生には、本当に素敵なチャンスをいただきました。

私をはじめで参加した5年前から現在に至るまで、子育て交流会の変わらない魅力は、

①いつでも誰でも参加できること（年齢ごとに分かれています） ②ボランティアのお母さんスタッフの存在 ③学生さんとの交流

だと思います。とりわけ②のボランティアのお母さんスタッフの皆さんは、参加される親子をさりげなく受け止めてくださる方ばかりで交流会の大きな柱です。赤ちゃん連れのお母さんも、下の子を預けて安心して上のお子さんと遊べます。ママを独り占めできる嬉しい時間ですし、お母さんにとっても上のお子さんと向き合える大切なひと時になっているように感じます。



年々、参加される親子が増えてきました。スタッフとしてはありがたいことです。行ってみようかなと思ってくださることが嬉しいです。しかし、参加者が増えるということは、困ったことも出てきます。一人ひとり協力的な方たちでも、知り合い同士が集まるとおしゃべりに花が咲きます。お子さんから目が離れ、時には心も離れます。スタッフが見てくれるからいいわと思わせてしまったのであれば、それは私たちのミス。お子さんたちの安全が一番大事なことで、気付いていただくように言葉がけをしていかなくてはと思います。

ゆったりとしたやさしい語り口とほほえみで、お母さん方を包み、育児の不安が自信に変わるような魔法使いになれるように、これからも努力をしたいと思います。

(水谷真理子)

☆☆☆

「こんなに たくさんの親子さんが…」

子育て交流会にスタッフの一員として微力ながら参加させていただいて2年目になりました。上記は、毎回の感想です。交流会の担当をして思うことは、「お母さんたちは、何を求めて参加しているのだろうか？」という疑問でした。①家でもできる遊びや制作を知りたい ②たとえ30分という短い時間でも何かしてくれるので楽しい（気が抜ける） ③友達とのおしゃべりができる ④友達を作りたい ⑤子ども同士ふれあいたい など参加理由はさまざまだと思います。

担当の日は、その日に参加する子どもの年齢、季節を考慮し、あるいは経験させたい内容を準備するのですが、それは参加者の期待（要求）に応えていたのだろうか？と、反省することばかりです。

なかには、支援室の目的など無視に近い母親グループの参加の時など、子どもたちの存在が薄くなっていることを感じることもあります。支援室の目的等十分に浸透させ、支援室での活動に主体的に参加ができるようにしたいと思います。

また、1・2歳が対象の日は、遊びの内容を考える時にどこに焦点を当てたらいいのか難しく悩みます。現在2歳が参加できる回数が多いので、今のような人数なら年齢ごとにしたほうが落ち着くのでは、と思うことがたびたびありました。

スタッフ側として考えたいことは、情報交換の機会を多くしたいことです。参加してくる子どものなかには、個別配慮を必要としている子もいます。また、気になる母親もいます。遊びながら関わりを通して得た情報を共有することはこの支援室に来る子どもたちの成長、発達のために大切だと思います。短い期間ですが、母親と共に一人ひとりの子どもを大切に、かかわっていくことが重要なことと考えます。

最後に、こんなお母さんの言葉はスタッフとして、とても心強い励ましになります。「朝起きた時から交流会に行くって張り切っていたんですよー！」  
(荒川 良子)

### ☆☆☆

長く保育と音楽に関わってきていますが、「今」の乳幼児と保護者に接する機会を求めて、この子育て交流会への参加をお願いしました。温かく迎えてくださったことで安心し、また元来、小さな子どもが好きなので、子どもと同化してしまい、お手伝いに伺っているのか、遊んでもらっているのかと反省することもあります。ある日、2歳の女の子が「おべんとうばこのうた」という長い歌詞の曲をきちんと歌ってくれました。大変驚いたのと同時に、0～3歳児の参加だからと侮ってはいけないと改めて思いました。



自宅では、ピアノ教室を開いていますが、最近アイドル歌手の歌は歌えるけれど、童謡は歌えない子が増えています。「ぞうさん」「めだかのがっこう」も歌えないのです。そこで、実際に子育て中のお母さんは、どの位の童謡をご存知なのか、文化庁と日本PTA全国協議会が選定した「親子で長く歌い継いでほしい童謡・唱歌」から選んでアンケートをとらせていただきました。60歳以上の方のほとんどが、ご存知の「海」、「靴が鳴る」、「ないしょ話」などは、20～30歳代の方は1%未満しかご存知ありませんでした。確かに、童謡の歌詞には、現代生活には無い言葉も含まれていますが、脳の基本的な知性の適齢期や、聴覚を確立する0～7・8歳までは、リズム性の強い曲より良いのではないのでしょうか。この結果を考えて、機会があれば少しずつ童謡を紹介していけたらと思っています。

また、最近、新聞で「子育て孫育て講座」という記事を見ました。昔と今の子育て比較がされてい

ましたが、世の中の変化と共に、子育ても随分変化しているようです。「昔」の良いところを伝えつつ、「現代の子育て」を一緒に考えていけたら良いと思っています。(高田 伸子)

☆ ☆ ☆

子育て交流会は、保育者養成校としての特色をいかし、「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」をモットーに開催してきました。毎年、年度末に行ってきたアンケート結果を参考に、参加者のニーズにより細やかに応えるべく検討を重ね、試行錯誤しながらいくつかの改善点を織り込み新しい年度をスタートさせてきました。

いつも心がけてきたことは、子育て交流会の持ち味ともなっているアットホームな雰囲気を大切にしていくことでした。子育て交流会に私がたずさわるようになった頃、ちょうど長男が8か月になった時でした。私自身が子どもを連れ、地域の子育て交流会の場へ出かけて行った時、誰も友達がおらずその場でどうしたらよいのか戸惑いました。このような経験から、初めて来た人でもほっとでき、「また来たいな」、と思ってもらえるような場づくりが大切ではないかと実感したからです。

そこで子育て交流会では、参加される方が一人で不安を感じていても、交流会に来てスタッフが話しかけ、気持ちがあほぐれる…そんな場づくりをめざしてきました。しかし、年々好評を得て子育て交流会は発展し、参加者の人数も増え、スタッフが参加者すべての方と毎回かわりをもつことは難しくなってきました。そんな中、先輩ママのボランティアの方々が、初めて来られた方や困っている方に話しかけてくださったり、さっと手をさしのべてくださり、さまざまな役割を果たしていただきました。このような助けがあつてこそ、「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」を実践することができたのだと思います。

次に、保育者養成校が行う子育て支援ということでの工夫も重ねてきました。大学教員のもつ専門性をいかし、クリスマスミニコンサートやミュージカルの上演をしたり、さつまいもの栽培と収穫を取り入れたりしてきました。また、学生の実践の場として学生によるお楽しみの時間を作りました。このように、幅広い参加者の姿にあった活動の設定と内容の充実に努めていくとともに、参加者の実情にあわせて、保育室の模様替えや新しいプレイルームでの環境整備に努めてきました。

8年間の実践を積み重ね、大学キャンパスの中で子育て支援を行っているということも地域に根づき、保育者養成校における学生参加の子育て支援という面からも意義のある活動となっています。毎年、工夫を重ねてきたことが好評を得て、より多くの方が参加してくれるようになってきたことは、こうした交流会がますます入園前の親子の交流の場として高いニーズがあることを強く感じさせられます。今後も、「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」として未就園の親子の集いの場になることを願っています。(清 葉子)

### 子育て交流会の今後の課題

たくさんのスタッフの方々に支えられ、子育て交流会は8年が無事過ぎ、まもなく9年目を迎えるようとしています。ボランティアスタッフのお母さん方は、自分の子育て経験をいかし、母親たちの気

持ちをさりげなく受けとめ、育児で悩んでいる母親の心をホッと軽くしてくれています。事務スタッフは、朝早くから保育室の準備をし、受付から最後の片づけまで、全体を見まわし事故がないよう安全面に気を配ってくれています。保育スタッフは、長年の保育経験をいかし、親子が楽しめる保育内容を毎回しっかり準備し、展開してくれています。スタッフの一人ひとりが、それぞれの個性と持ち味をいかし、見事にチームワークよく、なによりもスタッフ自身が楽しんでこの子育て支援活動に取り組んでいます。それがこの子育て交流会のアットホームな雰囲気を作り出している大きな要因だと思います。そして今ではスタッフの一人ひとりがなくてはならない、かけがえのない存在になっています。

「継続は力」と言われていますが、いまでは地域にしっかり根づき、参加者も、年々増えています。時には、部屋からあふれてしまうこともあります。ゆったり過ごしてもらうため、0歳児、1～2歳児、2～3歳児と年齢別にわけて実施する方法をとっていますが、まだまだ参加者は増え続けています。これだけ強い要求があるのです。もっと、細かく各年齢毎に参加を絞ることも考えられますが、こうすると参加できる回数が減るという課題が残されます。

地域に開かれた大学として、また、保育者養成校としての今後の大きな課題は、子育て交流会専任の保育スタッフ、事務スタッフを置くことです。現在のスタッフは、全員、アルバイトや兼任、全く無償のボランティアの方々です。子育て交流会専任のスタッフがいれば、毎日実施できます。専任のスタッフがいれば、まさにこの交流会のモットー「いつでも、だれでも、気軽に参加できる子育て交流会」が文字通り実現できます。

地域の親子がこの交流会に参加し、親も子どもも笑顔になっていく、そんな姿を見ながらやがて母親になっていくこのキャンパスで学んでいるたくさんの学生たちにも、子どもを生み育てる夢と希望を与えることができます。そして、学生も教員もいつでもだれでも参加でき、子育て支援を学ぶことができます。そんな子育て交流会になる日をめざして、スタッフ一同これからもがんばっていきます。

(宍戸 洋子)

保育スタッフ

荒川良子 上村鍾子 清 葉子 宍戸洋子 高田伸子 水谷真理子

事務スタッフ

難波佐保 馬場美津子

ボランティアスタッフ

加藤 香 富崎昭子 橋本裕子 松浪ゆかり 武藤愛子

## 2010年度 子育て交流会の経過・参加人数・内容

保育子育て研究所

- 4月13日(火) 第1回 子育て交流会(0歳児) 天気:晴  
 子ども 22名 大人 22名  
 わらべうたでふれあい遊び「かくかくかくれんぼ」「なんの花がひらいた」  
 「ちょうちょうちょうおりておいで」「たんぼたんぼぼむこうやまへとんでけ」  
 「ここはとうちゃんにんどころ」「上から下から大かぜこい」  
 注意事項説明 (上村)
- 4月16日(金) 第2回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:くもり  
 子ども 15名 大人 13名  
 手遊び「パンダうさぎコアラ」「あたま・かた・ひざ ポン」  
 絵本「くつついた」、ふれあいあそび「おかあさんとくつついた」(荒川)  
 注意事項説明、「トントントントンアンパンマン」(水谷)
- 4月20日(火) 第3回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:雨  
 子ども 15名 大人 14名  
 注意事項説明  
 紙芝居「びよびよびよちゃん」  
 手遊び「もみもみマッサージ」「一本ばしこちょこちょ」  
 集団遊び「大なみ小なみ」「いわしのひらき」(水谷)
- 4月23日(金) 第4回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:くもり  
 子ども 24名 大人 23名  
 手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」  
 ストローとんぼを作ろう!(ストローと牛乳パックを使って) (水谷)
- 4月27日(火) 第5回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:雨  
 子ども 19名 大人 17名  
 集団遊び「大なみ小なみ」  
 手遊び「パンやさんにおかいもの」「だいこんづけ」「りんごがころころ」  
 絵本「ひよこ」 (水谷)
- 4月30日(金) 第6回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
 子ども 10名 大人 7名  
 手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「キャベツはきやつきやつきやっ」  
 絵本「おやさいとんとん」(荒川)  
 うた「トマト」「おかあさん」「ことりのうた」(高田)  
 手遊び「トントントントンアンパンマン」(水谷)
- 5月11日(火) 第7回 子育て交流会(0歳児) 天気:雨  
 子ども 15名 大人 15名  
 ふれあい遊び「おでこさんをまいて」「こっちのたんぼや」「うまはとしとし」  
 はいはいの大切さ…はっている子に注目  
 安全面の注意 (上村)

- 
- 5月14日(金) 第8回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 27名 大人 23名  
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「キャベツはきゃっきゃっきゃっ」  
ふれあい遊び「おうまのおやこ」「よちよち歩き」  
絵本「たまごのあかちゃん」(荒川)  
「トントントントンアンパンマン」(水谷)  
アンケートのお願い「知ってる曲」(高田)
- 5月18日(火) 第9回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 21名 大人 19名  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「パンやさんにおかいもの」  
「もみもみマッサージ」「パンダ・うさぎ・コアラ」  
紙芝居「ママ、どこかしら」(水谷)
- 5月21日(金) 第10回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴  
子ども 36名 大人 34名  
紙皿を使って  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」(水谷)  
「キャベツはきゃっきゃっきゃっ」(荒川)
- 5月25日(火) 第11回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 33名 大人 31名  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」  
「もみもみマッサージ」  
集団遊び「大なみ小なみ」(水谷)
- 5月28日(金) 第12回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 26名 大人 23名  
集団遊び「あぶくたつたにえたつた」  
絵本「そらまめくんのベッド」  
手遊び「キャベツはきゃっきゃっきゃっ」(荒川)  
注意事項説明  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」(水谷)
- 6月1日(火) 第13回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 39名 大人 38名  
集団遊び「大なみ小なみ」  
手遊び「もみもみマッサージ」「パンやさんにおかいもの」  
「トントントントンアンパンマン」(水谷)
- 6月8日(火) 第14回 子育て交流会(0歳児) 天気:雨  
子ども 19名 大人 19名  
ふれあい遊び「(布を使って)上から下から大かぜこい」「でろでろつのでろ」  
「ちょんちょやちょんちょ」  
見せる「からすかあかあ」「うちのうらのくろねこが」(上村)
-

- 6月15日(火) 第15回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:くもり  
子ども 17名 大人 16名  
人形劇「かくれんぼ」(お母さんへ、乳房触診の勧め)  
絵本「おとしものしちやた」  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」(水谷)
- 6月18日(金) 第16回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:雨  
子ども 31名 大人 30名  
手遊び「バンダ・うさぎ・コアラ」  
見せる「びよんすけ劇場」  
牛乳パックでカエルを作ろう! (水谷)
- 6月25日(金) 第17回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 26名 大人 21名  
手遊び「ゲー・チョコキ・パー」  
絵本「おつきさまこんばんは」  
集団遊び「ロンドン橋」(ピアノ:高田) (荒川)
- 6月29日(火) 第18回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 44名 大人 42名  
手遊び「バンダ・うさぎ・コアラ」「トントントントンアンパンマン」  
「パンやさんにおかいもの」「もみもみマッサージ」「あたまかたひざボン」  
絵本「ひよこ」(水谷)
- 7月2日(金) 第19回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 22名 大人 16名  
手遊び「ゲー・チョコキ・パー」  
パネルシアター「げんこつやまのたぬきさん」  
集団遊び「ロンドン橋」「あくしゅでこんにちは」(荒川)
- 7月6日(火) 第20回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり  
子ども 16名 大人 15名  
雨の日のおうち遊び(障害物を使って)の紹介…ボール遊び、くぐり遊び  
注意事項説明  
わらべうた「たなばた」「かくかくかくれんぼ」「たかいたかい」(上村)
- 7月9日(金) 第21回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:雨  
子ども 39名 大人 37名  
色水を作ろう!(しその葉で)  
手足口病の注意 (荒川)  
手遊び「めのまどあけろ」「にんじゃのじゃんけん」(宍戸)  
うた「アイアイ」「ながぐつマーチ」「かえるのうた」「だから雨」(高田)

- 
- 7月13日(火) 第22回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:雨  
子ども 19名 大人 16名  
集団遊び「大なみ小なみ」  
手遊び「いわしのひらき」「もみもみマッサージ」「トントントントンアンパンマン」  
新聞紙をちぎって紙ふぶき→紙ふぶきをビニール袋に入れてボール(水谷)
- 7月16日(金) 第23回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴  
子ども 62名 大人 56名  
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」  
大きなシャボン玉を作ろう!(針金ハンガー、金魚すくいを使って)
- 9月7日(火) 第24回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり  
子ども 16名 大人 15名  
わらべうた「上から下から大かぜこい」「いないいないばあ」  
「米ついたらはなそう」「うまはととし」「ブランコ」(上村)
- 9月10日(金) 第25回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 58名 大人 53名  
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」  
ふれあい遊び「きゅうりができた」「いっぽんばしこちょこちょ」  
絵本「おつきさまこんばんは」(荒川)  
手遊び「いわしのひらき」「りんごがころころ」「トントントントンアンパンマン」  
注意事項説明(水谷)
- 9月14日(火) 第26回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴  
子ども 42名 大人 36名  
「空気でポン!」を作ろう!(トイレトペーパーの芯と紙コップ、ビニール袋)  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「パンダ・うさぎ・コアラ」(水谷)
- 9月21日(火) 第27回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:くもり  
子ども 27名 大人 25名  
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「トントントントンアンパンマン」  
集団遊び「大なみ小なみ」「ママといっしょにジャンプ!」  
紙芝居「びよびよびよちゃん」(水谷)
- 9月24日(金) 第28回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:くもり  
子ども 31名 大人 26名  
ふれあい遊び「きゅうりができた」「だしてひっこめて」  
絵本「おつきさま」  
うた「お月さま」(うた・ピアノ:高田)(荒川)  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」(水谷)
- 10月1日(金) 第29回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 44名 大人 41名  
手遊び「アンパンマン」「ちょちちょちあわわ」「グーチョコキパーでなにつくろう」  
絵本「これだ〜れだ」(荒川)
-

- 10月8日(金) 第30回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 28名 大人 21名  
手遊び「どんぐり」  
ペープサート「おつきさまこんばんは」、絵本「おつきさまこんばんは」  
親子遊び「ぎったんぱったん」「びよんびよんびよん」(荒川)  
手遊び「トントントントンアンパンマン」「アンパンマンのおでかけ」(水谷)
- 10月15日(金) 第31回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴  
子ども 23名 大人 20名  
トレイでパズルを作ろう!  
手遊び「ゲーチョコキパー」「もみもみマッサージ」「トントントントンアンパンマン」  
(水谷)
- 10月22日(金) 第32回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり  
子ども 14名 大人 12名  
お母さんと赤ちゃんのふれあい遊び  
「上から下から大かぜこい」「どんぐりころちゃん」「ゆすりゃゆすりゃ」  
ねこじゃらしで遊ぶ(上村)
- 10月26日(火) 第33回 子育て交流会(2,3歳児 幼稚園ホール) 天気:晴  
子ども 43名 大人 35名 学生(専攻科) 15名  
親子ふれあい遊び(専攻科2年)  
楽器(マラカス)作り(使い捨てのプラコップを使って)  
楽器を使って歌う(どんぐり)(専攻科2年)
- 10月29日(金) 第34回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:くもり  
子ども 24名 大人 20名  
手遊び「パンダ・うさぎ・コアラ」「きゅうりができた」「あたま・かた・ひざボン」  
絵本「まるくておいしいよ」  
うた「おうまのおやこ」(ピアノ:高田)(荒川)  
「トントントントンアンパンマン」(水谷)
- 11月2日(火) 第35回 子育て交流会(0歳児) 天気:晴  
子ども 8名 大人 6名  
ふれあい遊び「いないいないばあ」「だるまさん」「おでこにチュっほっぺにチュ」  
紙風船で「あんたがたどこさ」(上村)
- 11月13日(土) 大学祭 プレイルーム開放 天気:晴  
子ども 23名 家族19組
- 11月14日(日) 大学祭 プレイルーム開放 天気:くもり  
子ども 17名 家族14組
- 11月16日(火) 第36回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 42名 大人 34名  
どんぐりひろい  
どんぐりでコマを作ろう!(田端先生)  
どんぐりボーリングの紹介  
手遊び「トントントントンアンパンマン」(水谷)

- 
- 11月19日(金) 第37回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴  
子ども 25名 大人 22名  
マラカスを作ろう!(ヤクルトの容器を使って)  
手遊び(水谷)
- 11月26日(金) 第38回 子育て交流会(1,2歳児 幼稚園ホール) 天気:晴  
子ども 33名 大人 30名 専攻科学生 3名  
集団遊び「ロンドン橋おちた」手遊び「トントントントンアンパンマン」(荒川)  
手遊び「グーチョコキパー」「バスにのって」 専攻科学生  
うた「もみじ」「しあわせなら手をたたこう」(ピアノ・歌:高田)
- 11月30日(火) 第39回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 15名 大人 13名 専攻科 3名  
絵本「どんぐりどんぐり」落葉であそぼう(水谷)
- 12月3日(火) 第40回 子育て交流会(0歳児) 天気:くもり時々雨  
子ども 8名 大人 6名  
うた「りんりんなるよ」(小さい鐘をふりながら)「こめついたらはなそ」(お手玉)  
ふれあい遊び「いっぽんばしこちょこちょ」「ぼーずぼーず」(上村)
- 12月7日(火) 第41回 子育て交流会(0~3歳児 幼稚園ホール クリスマス会) 天気:晴  
子ども 63名 大人 55名 学生 専攻科 13名(見学) 基村ゼミ9名  
手遊び「おおきなくりのきのしたで」「キャベツのなかから」  
ミッキーの手遊び「1ぼんと1ぼんをあわせると」  
ミュージカル「シンデレラ」(基村ゼミ学生)  
手遊び「あたま・かた・ひざボン」「トントントントンアンパンマン」
- 12月10日(金) 第42回 子育て交流会(1,2歳児) 天気:晴  
子ども 19名 大人 15名  
手遊び「あたま・かた・ひざボン」「あたまがひとつ」「とうきょうとにほんばし」  
絵本「だるまさんと」(荒川)
- 12月14日(火) 第43回 子育て交流会(2,3歳児) 天気:晴  
子ども 22名 大人 17名  
枯葉すべり(箱ぞりで)  
芝生で「おおなみこなみ」「トントントントンアンパンマン」(水谷)
- 12月17日(金) 第44回 子育て交流会(作って遊ぼう) 天気:晴  
子ども 15名 大人 13名  
うた「赤鼻のトナカイ」「あわてんぼうのサンタクロース」(ピアノ:高田)  
新聞紙でクリスマスリースを作ろう!  
手遊び「トントントントンアンパンマン」(水谷)
- 1月14日(金)、1月18日(火)、1月21日(金)、1月25日(金)、2月8日(火)、2月15日(火)、2月23日(水)、  
2月25日(金)、3月1日(火)、3月4日(金)、3月8日(火)、3月11日(金)
-

# 保育者養成校における「保護者支援・子育て支援」力の育成課題について

保育学部 豊田和子

## 問題意識

### (1) 子育て支援に関する保育所の役割、保育士等の業務の変化から

子どもと子育て家庭を取り巻く状況の急激な変化によって、保育所とその職員である保育士には、「子どもの保育」と並んで「保護者支援」の役割が不可避なものとなっている。2008年告示の「保育所保育指針」では、このことがいっそう強調され、保育所の役割と保育士等の業務について、周知のとおり以下のように明記されている。

・第1章 総則 2 保育所の役割 (3)

「入所する保護者に対する支援及び地域の子育て家庭に対する支援等を行う役割を担うものである。」

・第6章 保護者に対する支援 (序文)

「保護者への支援は、保育士等の業務であり、その専門性を生かした子育て支援の役割は、特に重要なものである。

2 入所している子どもの保護者に対する支援

3 地域における子育て支援

「保育に支障がない限りにおいて(中略)地域の保護者等に対する支援を積極的に行うよう努めること」  
(下線、引用者)

1990年度版では「家庭養育の補完」、1998年度版では「家庭養育の補完」+「地域の子育て支援も」という記述だったが、上掲のように2008年度版では保育所の役割の3番目に「保護者支援・子育て家庭支援」が位置づけられ入所児童の保護者だけでなく地域の子育て家庭に対する支援の役割が明記されているのである。その根拠は、児童福祉法第48条の3「保育所は、当該保育所が主として利用される地域の住民に対してその行う保育に関して情報提供を行い、並びにその行う保育に支障がない限りにおいて、乳児、幼児等の保育に関する相談に応じ、及び助言を行うように努めなければならない」である。この条文の限りでは、入所児童の保護者支援は日々保育していく上で欠かせない業務であるが、地域の子育て家庭支援は努力義務として規定されている。しかし、育児不安や虐待問題など子育て困難を抱える今日の社会状況においては、保育所における地域の子育て家庭支援の役割は、入所児童の保護者支援と同様に益々重要になっている。

## (2) 保育者養成校としての新たな教育課題から

上述のように児童福祉法と保育所保育指針の改正に伴って、2011年度からは「保育士養成課程」も改正され、そこには上記した保育所の新たな役割と保育士の業務拡大に対応した養成科目の新設や学習内容の強化が盛り込まれている。数例を挙げると次のような科目や学習内容の充実化であり、養成段階において保護者支援・地域の子育て家庭支援に対応できる専門的知識や技能を形成していくことが、今後の保育士養成教育の課題として重要視されていることを示している。相談や支援体制等の学習強化の方向が読み取れる。

- |                     |  |
|---------------------|--|
| ・「家族援助論」⇒「家庭支援論」へ   | (家庭、地域を視野に入れた支援のあり方や<br>支援体制を理解する)       |
| ・「社会福祉援助技術」⇒「相談援助」へ | (保育との関連で相談援助の内容や<br>方法について学ぶ)            |
| ・新設科目「保育相談支援」       | (保護者に対する保育に関する指導について<br>具体的に学ぶ)          |
| ・「児童福祉」⇒「児童家庭福祉」へ   | (児童福祉の増進とともに、児童の家庭を含めて<br>支援する体制や仕組みを学ぶ) |

本学でもこのような指示に従って、2011年度入学生から新しいカリキュラム適用となる。保育士養成校としては、「保護者支援や地域の子育て家庭支援」に関する教育は、その担当教員に一任しておけば十分というわけにはいかない。というのは、前述したように、保育所の役割と保育士の業務内容が広がりつつあるという大きな枠組みの転換によって、保育者養成校の教育課題そのものも重層的に拡大化していると認識すべきなのである。養成校の教員がその教育を担う組織の一員として、新たな教育課題としての「保護者支援・地域の子育て家庭支援」のための力量形成やその土台となる基礎知識・技能をいかにして学生たちに学ばせるべきなのかについて共通認識しながら各教員の専門分野に係る教科目を位置づけるという脈絡においてはじめて、これからの保育者に求められる専門性・力量形成の教育に寄与できるのである。

しかし、今回のような養成教育課題は政策の改正や保護者等の生活などの社会状況の多様化の問題と複雑に絡んでいる要素が多々あるので、保育者養成教育に携わっている教員としてはその課題意識は持ちつつも、即応的に自分の専門分野と結びつけてそれを学生たちの学習に還元できるノウハウを持ちえているかという点、必ずしもそうではないのが実際であり、またそれは当然の実情でもある。

折りしも、私は2010年度の日本保育学会第64回大会での自主シンポジウム「保護者支援の専門的力量的形成と機関連携システムの構築を考える～養成校は何ができるか～」に一提案者として参加する機会があり、そのために保育士養成校の取り組みや保育所現場の声を聞くなどしていくらか調べたりしたので、その一端をここに報告させていただく。本稿は先述したように養成校教員が組織の一員としてどのような認識や課題意識をもっていくべきなのかを、私自身が整理したいという問題意識から手がけたものであり、そのための資料提供ができればという程度のものであるので、関係各位から批判的なご意見も拝聴したいと期待する。

上述の問題意識から、本稿では次の3つの調査研究を基にレポートする。

- I. 最近の研究発表にみる養成教育の工夫の分析から
- II. 養成校における「子育て支援」関連科目の設置と教育の実態の分析から
- III. 保育現場が新卒保育士に求める「保護者支援力・子育て支援力」の分析から

## I. 最近の研究発表にみる養成教育の工夫

### (1) 研究発表のテーマ（学生教育を主眼としたものだけに限定）

日本保育学会での「保護者支援・子育て支援」に関する最近の研究発表から、どのようなねらいや方法で、学生たちにこのテーマの学習をさせているのか探ってみた。

【表1】日本保育学会研究発表のテーマ（2008年と2009年分の発表論文集より抜粋）

< 2008年度 >

- ① T 短大「『子育て支援活動』参加を保育者養成に生かす試み（1）  
- 学生の気付きを手がかりに -」
- ② N 短大「養成段階で子育て支援に必要な資質と専門性の基礎を育てる一試み  
学生による「もちっこ広場」の実践的研究を通して」
- ③ H 大学「大学における子育て支援活動 - 『つどいの広場』の設置を通して -」
- ④ T 短大「大学における『子育て支援』の意義と可能性（1）（2）」
- ⑤ S 大学・K 短期大学部「大学生の育児と育児支援の理解についての一考察  
- 子育て広場を通しての大学生と母親の相互作用を通じての考察 -」
- ⑥ S 大学「子育て支援センターにおける学生の学び」
- ⑦ S 短大「子育て広場を介して地域と学生を繋ぐ短大教育 学生の変化と教育効果の評価方法について」
- ⑧ T 短大「地域と連携した保育者養成校の子育て支援～育児文化研究センター『子育て応援隊』の取り組み～」

< 2009年度 >

- ⑨ S 短大「保育者志望学生のカウンセリングマインド育成のための教育方法  
- カウンセリングの技法習得に対する意識調査をもとに -」
- ⑩ S 大学「子育て支援の目的とあり方に関する一考察」
- ⑪ N 短大「養成段階での子育て支援に必要な資質と専門性の基礎を育てる一試み（二）  
学生主体による『もちっこ広場』の実践的研究を通して」
- ⑫ S 大学「連絡帳を活用し低年齢児保育と保護者支援への理解を高める研究」
- ⑬ K 大学・H 大学・S 短大「『子育て支援力』育成のための保育士養成教育に関する研究（1）- 短期大学へのアンケート調査の分析を通して -」
- ⑭ 同上「『子育て支援力』育成のための保育士養成教育に関する研究（2）  
- 短期大学生の子育て支援広場への「関与観察」を通して -」
- ⑮ T 大学「地域における子育て支援 - 外遊び支援の実践 -」
- ⑯ C 大学「大学付設の子育て支援センターの意義と役割に関する一考察」
- ⑰ S 大学「大学が発信する子育て支援 - 子育て応援キャラバン隊の実践から -」
- ⑱ K 短大「学生が参画する子育て支援における地域支援」
- ⑲ S 大学・K 短大「大学生の育児と育児支援の理解についての一考察（3）  
- 大学生の育児支援への保護者の意識からの考察 -」
- ⑳ N 短大「地域協働による大学内子育て支援拠点『にのみ子育てカレッジ』I・II」
- ㉑ S 短大・大学「白梅子育て広場における学生の主体的な参画という視点からの考察」
- ㉒ T 大学「保育者の質の向上をめざして - 大学における子育て支援活動から -」
- ㉓ U 大学「地域社会と連携した保育者養成（1）（2）」
- ㉔ S 大学「体験的子育て理解教育の実践 - 子育て中の親へのインタビューから -」

上掲の研究発表から保育者養成校における養成教育段階での学生教育の実施状況を分析してみると、大きく次の2種類のタイプでの工夫を読み取ることができる。それは、以下で述べる①「子育て広場」等への参加学習と②授業を活用しての体験的学習である。

## (2) 養成校付設の「子育て広場」等への参加学習による教育方法の工夫と成果

養成校付設の「子育てひろば」「親子サロン」などを活用して、そこに学生参加を促進して学習の場として位置づけている(①②③④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒)。そこには、次のようなさまざまな教育方法の工夫と成果が見られる。

【表2】 養成校付設の子育て広場等のタイプとその教育的活用

子育て広場のタイプ	主たる企画運営者	学生参加の方法	主な学習方法
○親子のためのプログラム提供型	●子育て広場専任のスタッフが在る(学内雇用者)	◎授業の一環として参加する	△観察して親子の実際を知る △未就園の子どもとかかわること
○意図的ノンプログラム型	●専任スタッフと教員の両者で企画している	◎希望者またはボランティアとして参加する(保育系以外の学生も含む)	△親子の両方にかかわること △一緒に遊ぶこと
○親同士の集いを主としたサロン型	●学外ボランティアに依頼している		△教員主導の企画運営から、学生主体の企画へと促す

(注：上の分類には、単一型ではなく複線型で取り入れている養成校も複数ある)

この種の「養成校付設の子育て広場等の活用による教育」は、年々増加傾向にある。前掲の研究発表では、教育的ねらいと学習成果が多岐にわたって報告されているので、その論文内容を解読した結果、以下のように整理できた。

【表3】 参加型学習の教育的ねらい・工夫および学生たちの学び

教育的ねらいや方法の工夫	参加した学生の学びの内容
○既定の保育実習とは異なる保育への参加から様々なことを学ぶことを目的に、参加学生に継続的記録と討議を行う。	△保育実習とは違った学びがある。(子どもだけを配慮した玩具設定から、親子を想定した玩具設定を考えるようになった。他の学生の保育を見て、自分だったらこうするを考えるようになる)
○子育て支援に必要な資質・専門性として、子育ての現状への探求的態度の形成、子育て者への共感、パートナー意識を育むことをねらいに文献学習や集団討議を行う。	△母親は毎日、ストレスが溜まるかと思っていたが、たくましく強いことに気付いた。 △母親の言葉に耳を傾けるようにすべきだ。 △普段乳幼児とかかわる機会がないので楽しい、かかわりを持つことで普段見ることのできない親子のかかわりを知った。
○学生のボランティア養成に重点を置き、実際の子どもと過ごす楽しさ、育児不安の親の心情を知るなど学生自身も将来親になることに希望をもつこと。	△乳幼児とのコミュニケーションの難しさや、母親の重要性を認識している。 △支援者としての視点からの「親子理解」ができた。 △親子を画一的に見るのではなく、個性の重要性に気付いた。
○乳幼児の個性的な違いを理解する	△子ども理解から親理解へ、支援者の課題に気づきつつある。
○保育者になるための基礎として、「親子」を実感し、学ぶこと。	△多世代の人たちとの協力や適切な援助を可能にする力が育つ。
○子育て広場の企画力・運営力の育成	△地域への育児センター等への参加力へとつながっている。
○地域の子育て支援ニーズを知る機会とする	△ありのままに他者を受け入れることの難しさを実感した。 △親がニコニコしていると子どもは楽しく遊べることを知った。
○子どもの遊びや子ども同士のかかわりを直に学ぶ、親子がかかわる姿を直接学ぶ。	△この経験を生かして、地域の子育てサークルや支援センターに自主的に出て行きたい。 △学生たちが、教員の手を借りずに主体的に企画する力を身につけてきた。

(論文集の記述からの読み取りによる範囲であることを付記しておく)

### (3) 授業を活用した体験的学習の工夫 (9⑩⑫⑮⑱⑳㉑㉒)

研究発表の中には、子育て支援や保護者支援に関連した授業科目において、積極的に教育工夫を試みているものも多数見られた。

【表4】 独自に設置されている科目名と、学習の主なねらいについて

科目名	学習のねらいと教育方法の工夫 (左科目名との対応記述ではない)
○カウンセリング特論	△コミュニケーション力を養う。
○子育て支援実地研究	(コミュニケーションの基本、保護者との対話の仕方など)
○保育学演習	△保護者との懇談による「子育て中の母親理解」。
○家族援助論	△24時間の生活理解をして、子育ての不安や喜びを知る。それに保育者としてどう
○フィールドワーク	応答していけばよいのか考える。
(一部活用)	△特化型授業により、さまざまな子育て支援センターやサークルにグループで出かけ
○子育て支援実習	て、子育て中の親から学ぶ。
○子育て支援	(ネガティブな印象から、親子の温かい関係などの発見)。
○子育て支援活動	△地域の子育てサークルの例会に参加させ、子どもの遊び、親子遊びを行う。
○児童臨床実習	学生は実際に親子に触れることで自信をもち、自尊感情を育む。
○保育学Ⅰ (数回)	△近隣の家庭訪問し、インタビューを行い実際の親の考え方や家庭での子どもの
など	様子を知る。

(「家族援助論」は独自科目とは言えないが、研究発表に挙がっていたので有意性を認めた)

### (4) 研究発表の分析と考察

上記の研究発表から、次のような点が指摘できる。

- ①養成校がこれまで研究成果としては公表されてきた「保護者支援・子育て支援」に関するテーマや内容は、研究者や子育て支援者（保育者）主体の取り組みが主流だったが、近年は養成教育における学生の学びに焦点を当てたものが確実に増加しつつある。
- ②その教育方法は、参加体験型学習方法と授業方法工夫との2種類が見られる。
- ③参加体験での学びでは、その対象が「子どもだけでなく、親子あるいは親」であることから、「親と子どもの関係を知る」「親から学ぶ」ことに、通常の保育実習とは異なる意義がある。「観察」「かわり」「記録」といった学びのプロセスを重要視しているが、この作業を通して人間としてのコミュニケーション能力の基礎、相手への尊厳性といった事柄がその成果として現れている。
- ④各養成校の取り組みの実績から学生たちはこれまでにない有意義な学びを得ていることが検証されている。養成校（あるいは学科）ぐるみで組織的に取り組んでいるところでは、教員間での議論を踏まえて実施され成果を積んできているので、教育の目標や学びの質が共有されている。
- ⑤逆に、子育て支援・保護者支援に求められる専門的資質や力量の基礎とは何かについて、養成校教員間の共通認識に至っていない現状もある。担当教員に一任されている場合には、養成校内でのカンファレンスを十分に展開し、学科のカリキュラム改善と課外活動も含めた学生指導や支援体制づくりのアプローチが必要だと思われる。
- ⑥先進的な取り組みは、その養成校の実態を踏まえて地域のニーズに対応していて、示唆を得るところが多い。特に、GP採択校の実践は養成校としてのモデルを提示している。

## II. 養成校における「子育て支援」関連科目の設置と教育の実態

全国保育士養成協議会に加盟している中部ブロックの養成校 34 施設（2009 年 4 月名簿）を対象に、「子育て支援関連科目に関する実態調査」を実施した。（趣旨を示し回答を得た）

- ・調査時期：2009 年 11 月末～12 月初旬
- ・方法：紙上質問とし、郵送による返信
- ・有効回答数とその割合：24 校（66.7%）
- ・有効回答の属性：2 年制養成校 11 校、3 年制養成校 1 校、4 年制養成校 12 校
- ・回答結果：「子育て支援」科目設置校は 12 校、未（非）設置校は 12 校で、各 50% ずつであった。次にその内容をさらに述べる。

### (1) 「子育て支援」関連科目を独自に設置している養成校の実態

【表5】「子育て支援」関連科目の状況

(A) 科目設置校への質問	回答の結果
1. その科目名は?	「子育て支援論」(3)、「子ども発達支援」、「子育て支援の方法」、「地域育児援助方法」、 〈回答に「家族援助論」(6)があり、質問がまずかった)
2. 履修は必修か選択か	①必修 8 ②選択 1 ③選択必修 3
3. 授業形態について	①講義 11 ②演習 1
4. いつから開設したか	①3年以上前 11校 ②1年前 1校〈新設学科校〉
5. 開講学年	①2年制養成校は、すべて2年次 ②3～4年制養成校は、すべて3年次
6. 担当教員の専門分野	1位：保育学(6)、2位：教育学(3)、3位：心理学(2)、4位：福祉学(1) その他(看護学、発達発達学、学外の子育て支援専門家、)〈内、複数制1校〉なお、専任担当校が6、非常勤担当校が6であった。
7. 学習の到達点は何か (4問中複数回答可)	1位：子育て支援の必要性や意義の幅広い理解 10校 2位：現場で必要な子育て支援力の基礎知識 7校 3位：相談応対技術の習得 3校 4位：親子遊びなどの技術習得 2校 その他：履修後に自ら地域に出かけて参加すること 1校

### (2) 「子育て支援」関連科目を独自に設置していない養成校の実態

【表6】この科目設置に関する考えや今後の予定

1. 今後「子育て支援」科目設置の予定はありますか	①設置したい 3校(25.0%) ②予定はない・できない 9校(75.0%)
---------------------------	---

②「設置の予定がない・できない」と回答した養成校の理由は、「必要性は感じるが過密なカリキュラムでこれ以上増やせない」「他の科目で扱っているので不要」が多く(8校)、「担当教員がいないため」(1校)もあった。

### (3) 養成校は「保護者支援・子育て支援」教育に対してどのような姿勢をもっているか

【表7】養成校の学生への教育姿勢(4問中複数回答可)

1. 養成校として、学生に現場体験を推奨しているか?	①サークルやボランティアなど課外活動を推奨している 15校(62.5%) ②授業として付設の子育て広場等への参加を実施している 10校(41.7%) ③現場に出向くことを積極的には推奨していない 3校(12.5%) ④まったくやっていない 1校(4.2%)
----------------------------	---

#### (4) 実際に行われている教育工夫や学生参加の支援について

【表 8】 学生が現場に出てから有効だと思われる授業工夫や学生の自主的活動について

<p><b>&lt;授業工夫&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 少人数授業を活かして、母親役と保育者役のロールプレイを取り入れ、模擬体験を全員がする。</li> <li>・ 親子向けの手遊び・歌遊び・リズム遊びを学生による相互紹介。</li> <li>・ 人間関係を学ぶための遊び指導の模擬保育を取り入れている。</li> <li>・ 演習として、子育て支援に係る活動を学び、学生による事例発表。</li> <li>・ 総合演習Ⅰ・Ⅱ（3年次開講）で、一部教員がゼミでその内容を扱っている。</li> <li>・ カリキュラムにはないが、事前実習に相当する「プレ実習」という制度を導入し、実習前の幅広い体験学習を推奨している。</li> <li>・ 「教育相談」の授業で、ピアヘルパー資格取得のピアヘルピング技術を学んでいる。</li> <li>・ 「子育て支援論」の授業で、学生が自分の居住地域のセンター等を訪問し、レポート発表を行っている。</li> <li>・ 「子育て支援の方法」で、親子遊び、地域の親子の実際を知る、地域の親子対象の行事に参加している。</li> <li>・ 総合演習（ゼミ）で、地域（県や市）主催の親子対象の行事に、ブースを担当したり、全学生参加のイベントを行っている。ゼミ担当教員も参加する。</li> <li>・ 早期に「子育て支援」演習等カリキュラムのモデル化を図りたい。</li> </ul> <p><b>&lt;参加体験&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 附属幼稚園の観察実習では、家庭学級や未就園児対象の子育て支援教室も見学する。ゼミで学んだ技術として、学生たちは、折り紙、独楽、カプラなどを紹介している。</li> <li>・ 今後は、付設の子育て支援センターで学生による「出前遊び」を積極的に行いたい。</li> <li>・ 地域における「子育て相談・情報交換」等の集まりからの協力依頼に、手遊び・歌遊び・託児などを積極的に参加させている。</li> <li>・ 学内「育児文化研究センター」企画で、全学生に「子育て応援隊」メンバーを募り登録制にして、地域からの要請やセンター企画のイベントに年間を通じて、大半の学生が教員と共に準備段階から積極的に参加している。</li> <li>・ 付設の「子育て支援室」主催の親子支援活動に、ゼミなどの時間を活用して随時参加している。</li> <li>・ 学生のサークル活動として、土曜日などを利用して地域の子どもたちを学内で面倒を見たり一緒に遊ぶなどしている。</li> <li>・ 教員が講師として、子育て支援講座などに招かれたときに手伝学生を参加させ様子を学ばせている。</li> </ul> <p><b>&lt;その他&gt;</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学生自主組織である「幼児教育研究部会」が、遊び支援に関する活動を学びあい、大学祭などで子ども向け活動を実施している。</li> </ul>	<p>（自由記述による回答のほぼ原文どおりを列挙）</p>
--	-------------------------------

## (5) 養成校の科目設置や学生支援の実態調査結果の分析と考察

「保護者支援・子育て支援」のための学びを促し深めるために、養成校ではカリキュラムやさまざまな授業の工夫がおこなわれていることがわかった。以下に、傾向と考察を列挙してみる。

- ①現段階では、独自に「保護者支援・子育て支援」に関する科目を設置している養成校の割合は多くない（質問の不備から、「家族支援論」と回答した養成校が多かった）。
- ②科目を設置している養成校では、最終学年または高学年においてこの科目を開講している。しかし、授業形態が「演習」ではなく、「講義」が多いのも特徴的であった。
- ③担当教員数は、大半の養成校では一人で、複数制を取っているところは少ない。また、学外の実践的専門家を担当教員としているところもあった。保育・教育学系が多い。
- ④未（非）設置校においてもこの科目設置の必要性は感じているが、カリキュラムの過密や適任教員がない等の理由から対応できない実態も判明した。しかし、ゼミや総合演習など他科目を活用してこのテーマの学習を促進している努力が見られた。
- ⑤養成校では教育課程内外において「保護者支援・子育て支援」に関する学生の学びをサポートするためのさまざまな工夫がなされている。それは特に、授業の充実化と並行して課外活動としての学生の学びを重視している点に見られた。

## Ⅲ. 保育現場が新卒保育士に求める保護者支援力・子育て支援力について

愛知県・岐阜県・三重県の各市町村（名古屋市のみ複数区）に原則1施設を任意に抽出し（公私不問）、100施設長に「新任保育士に求められる子育て支援力（保護者支援力）に関するアンケート」を実施した。「新任」とは「新卒者」に限定していることを説明した。（趣旨を示して回答を得た）

- ・調査時期：2010年4月15日～4月末
- ・方法：紙上質問とし、郵送による返信
- ・有効回答数と割合：54施設長（54.0%）

### (1) 養成校での学習に対する要望について

「子ども発達支援」と「保護者支援・子育て支援」の面での学習について、その比重を聞いた。

【表9】子どもの保育技術の充実か、保護者支援・子育ての学習強化か？（3問1択）

①今以上に、「保護者支援や子育て支援」の学習を深めてほしい	1施設長	(1.8%)
②それよりも、「子どもの保育技術や発達支援」の学習を深めてほしい	27施設長	(50.0%)
③「保護者支援力・子育て支援力」と「子どもの保育技術や発達支援」を同じくらい学習させてほしい	26施設長	(48.2%)

### (2) 養成校での「保護者支援・子育て支援」に関する学習内容について

保育現場は、養成段階で何をどこまで学習することを要望しているのかについて質問した。

【表 10】 保育現場が求める学習内容（5 質問中、複数回答可）

①現在社会の子育て状況に関する基礎的な理解を深める	42 施設長（77.8%）
②「親子遊び・ふれあい遊び」等の技術を習得をする	24 施設長（44.1%）
③「親相談・家庭相談」ができるカウンセリング力を習得する	16 施設長（25.9%）
④園で「子育て支援」を企画するような力や技術を習得する	7 施設長（12.9%）
⑤センター等での親子観察や親子とのふれあいの参加体験を積む	43 施設長（79.7%）

### （3）就職1～2年目くらいの間に、どの程度の「保護者支援・子育て支援」ができることを要望しているかについて

この設問の回答分析は、（4）と重複する部分が多いので省略するが、大半の施設長が、「園長（所長）など上司や先輩のサポートを受けながら、担当する保護者支援ができること」を求めていることが明らかになった。

### （4）新卒保育士が「保護者支援力・子育て支援力」を習得していくために現場指導者としての考え

【表 11】 新卒保育士は現場でどのような資質や力量が求められ、どのように形成されるのか  
（自由記述に非常に丁寧に回答して下さったので、ほぼ原文に近い形で列挙する。順不同）

#### <「子どもの保育・発達支援の学習」を深めてほしいと回答した施設長からの要望・意見>

- ①現場に出てみないと分からないことが多いので、園長や先輩保育士がその都度伝えるようにしている。
- ②新任は日々の保育に精一杯であるので、親支援に大きな期待は当然できない。しかし、今の社会では子育て問題が多く、養成校で社会への関心を持つことが、現場での力量につながるので、社会を見る眼、視野を広げること、保育士としての人間性の育成に期待する。
- ③保護者との信頼関係が大事なので、まずは、保護者を受け入れる心が大事。
- ④子育て支援力という前に、話し方や文章力を身につけてほしい（敬語の使い方、早く文章を書く）。自分勝手に判断しないで、小さなことでも相談できる力を身につけてほしい。
- ⑤上司や先輩の指導の下で、保育力を高めるために、職員とのコミュニケーションを取れるようにしてほしい。
- ⑥保護者との信頼関係が大事なので、園内や学校で実践的に対話能力を付けてほしい。
- ⑦職員間の報告や連絡を密にし、前向きで懸命な姿勢が望まれる。
- ⑧協働する力を付け、所長など上司の援助を受けながら意欲的に身につけていくことが望ましい。
- ⑨基本は学校で勉強し、4～5年後に、地域や現場に合った対応ができればよい。
- ⑩コミュニケーション能力、メンタルな強さ、チームとして仕事をする力を付けて就職すれば、子育て支援もできるようになる。カウンセリングまで習得できれば望ましいが、その入り口までの学習は求めたい。
- ⑪子育て支援力にはプロとしての実績が大事なので、それよりも社会人としての自覚やプロ意識を高める資質を望む。保護者には、同じ目線で接する心が大事。
- ⑫子どもをしっかりと見て保育する姿勢・意欲が、保護者にも理解してもらえと思うので、サークルやアルバイト、近所づきあいで他人の気持ちがわかる思いやりのある人間性を期待したい。
- ⑬「保育所保育指針」を十分に理解すること。自分の疑問を上司や先輩からのアドバイスに傾聴できることが「子育て支援」につながると思う。
- ⑭基礎的なコミュニケーション力を付けてほしい。それがあれば、先輩からの助言に学ぶことができる。

- ⑮保護者理解の必要性を学んで、意欲をもって就職してほしい。職場では自分の技術も磨き支援できるようになる。
- ⑯新任は複数担当が多いので、何年か経験をつんで子育て支援はできるようになると思う。
- ⑰学生時代に、ボランティアや子ども・親とかかわる機会をもっともって、触れ合いを体験してほしい。
- ⑱基本は子どもの側に立つこと、子どもの状況を理解し環境を考えること、そのための子育て支援でありたい。
- ⑲新卒者は、社会の人間になるということで、自主的に勉強したり、他人に気遣いできる人であってほしい。
- ⑳先輩の行動をよく見て、協力する態度。
- ㉑まずは社会人として自分から積極的に挨拶できること、保育の中で遊びや生活を的確にとらえる能力を身につけてほしい。
- ㉒保護者と接するとき、相手の表情や行動からその場の空気を読み取る力を付けてほしい。
- ㉓子育て支援センターでの実習を保育実習のような形で取り入れるのもよいと思う。
- ㉔やはり現場に出て分かることが多いが、養成校には実習時間を増やし、現場でのいろいろな経験をすることを重視してほしい。このようなアンケートで保育現場の声を聞いていただけて嬉しい。
- ㉕保育士を選んだ責任意識を持ち、困難にも前向きで取り組む気力を期待したいです。上司から学んでほしい。
- ㉖現場には様々な難しい保護者や無理な要求をされる家庭も増えていて、子どもにも障害に近いグレーゾーンが増えているので、新任としては保護者の内面を理解するのは無理があるので、上司と話し合い相談しながら、協力してやるのが保護者との信頼関係を確立することに、まず目標をもってやってほしいです。

#### <「子育て支援力」と「子どもの発達支援力」を同じくらい深めてほしいと回答した施設長からの要望・意見>

- ①自分一人で解決するのではなく、職員や保護者と共有しながら問題解決の喜びを感じられるようになってほしい
- ②文章力の低下が見られるので、保護者の言葉や子どもの声などをよく聞き、聞いたことを記録する文章力を付けてほしい。
- ③人間性豊かな保育士になってほしい（主体性、意欲、学びの態度、柔軟性、受容の心など）。
- ④運営上人件費削除の園もあるので、若い人には園長などからのサポートが必要である現状、祖母などの送迎時の苦情にも耳を傾け、上司にコンタクトをとる必要性もある現状なので、人間性豊かな人を望む。
- ⑤正規職員の割合も減ってきて、新採保育士の指導が難しいので、学校で保護者支援も学んできてほしい。
- ⑥クラスをまとめることも大事だが、子ども一人一人の理解、思いに添った保育が子育て支援に通じる。
- ⑦目先の出来事にばかり目を奪われず、その背景にあるものを考え洞察する力を身につけてほしい。それが子育て支援を的確にできることになるのではないだろうか。
- ⑧保護者の言うことに耳を貸す、自分で判断しないで先輩に話相談する事が大事。
- ⑨即戦力を望むのは無理だと思うので、一人で解決するのではなく他の職員と考えあう姿勢を持つことが、相手への理解につながるのではないか。
- ⑩保護者支援につながるような実習経験も大学でやられるとよいと思う。心が折れないたくましい保育士を望む。

- ⑪まずは保護者の話を聴くことを心がけ、信頼関係を築く。学生時代には、専門性よりも社会性や人間性をしっかり身につけてほしい。自己研鑽していく姿勢があれば、保護者にもきちんと伝えられると思う。
- ⑫挨拶、コミュニケーション、人の話をよく聞く、など基本を身につけて職場に出ることが望ましい。
- ⑬若い母親のことなど全く知らないではなく、現在の子育て支援などについて知識として持ってきてほしい。
- ⑭保育士としての明るさ、先輩のサポートを素直に受け入れる、動作がハキハキ、何よりも子ども好きが大事。
- ⑮発言する力、社会人としての常識を身につけて来てほしい。これが保護者支援につながると思う。
- ⑯社会情勢や親子の問題などを現場に出てから知るのではなく、知識として学生時代に学んでほしい。友人や大学教員などとの人間関係を磨き、コミュニケーション力を高めてほしい。これが保護者支援に有効である。
- ⑰現場で直接子どもに接してみて、先輩から学び取って、保護者対応を学んでほしいと思う。
- ⑱支援とは何かについて基本的な学習をしてきてほしい。
- ⑲子育ては社会と共に変化するもので、保育技術だけでなく社会情勢に目を向けてほしい。カウンセリングも大事だが、一人一人の職員の感性の豊かさや人間性が大事なので、仲間と何かを創り上げたりしてやりとげる体験を通じて人とつながる喜びを実感したり、学ぶ楽しさをして人間性豊かに成る教育をしてほしい。
- ⑳保護者だけでなく、職員とのコミュニケーション力、学生気分ではなくプロとしての意識をしっかりと持つ。

#### <今以上に「保護者支援・子育て支援」の学習を深めてほしいと回答した施設長の要望・意見>

- ①やはり現場に出てみないと分からない面があるが、現在社会の母親が置かれている立場について基礎知識を身につけてほしい。
- ②保護者の思いに耳を傾ける力、他の職員と連携しながら協力し合う力、柔軟に考える力を身に付けてほしい。
- ③相手をより深く理解するようにする力を育ててほしい。子育て支援は相手に寄り添うことが第一。寄り添うだけの心の厚みがないと支援者にはなれないと思う。形だけになってほしくない。
- ④いろいろな保護者がおられるので、偏見を持たないで傾聴の気持ちが大事。実際には現場に出てから身につけると思う。
- ⑤何よりも、子育て支援・保護者支援には、協働する力を身につけてほしい。

#### (5) 保育現場調査結果の分析と考察

上掲のアンケート結果から次のようなことを指摘しておく。

- ①新卒保育者に養成校がすべき学習の重点では、「まずは子どもの発達支援の学習」と「子どもの発達支援と保護者支援・子育て支援の両方の学習」を期待する回答がほぼ同数であった。これは児童福祉法や保育所保育指針の趣意に沿うところであると理解できる。
- ②「保護者支援・子育て支援」に関しては、基礎的な知識の習得と親子と触れ合う体験を重視していることが挙げられる。学生の時から保育現場において体験的に学ぶことが就職してから有効に作用するという指摘である。
- ③その際に現場が最も強く求めていることは、保育士という専門職を前提とした「豊かな人間性」である。これには、いくつかの側面が総合的に求められている。重要なこととして、社会問題への関心、協働できること・コミュニケーション力（相手を聴く、受け入れる、理解するなど）・

メンタルな柔軟性と強さ、などが要望されている。

- ④「子どもの保育（発達支援）」を主任務としてきた従来の保育者にも求められてきた事項ではあるが、「保護者支援・子育て支援」の役割がいっそう強調されることによって、「社会人としての保育者であること」がより求められている。

## V. まとめに代えて（養成校は何ができるのか）

「保護者支援・子育て支援」ができる保育者になれるように、多くの養成校では養成段階においても、その機会提供や学習内容・方法の工夫を手がけていることがわかった。そのことを踏まえて、次の3つの視点から今後の方向性を提言したい。

### （1）養成校の学習観の転換を図ること

- ①養成校は、「保護者支援・子育て支援」の学習を「子どもの発達支援」の学習と一定の乖離あるいは付与された別の内容と捉えている現状はないだろうかと自省する必要がある。その背景には、多くの教員がこの面での専門教育を受けていないことも大きな要因である。
- ②「子どもの保育（発達支援）」に求められる資質や専門性と「保護者支援・子育て支援」の面での資質・専門性を、より有機的に結び付けて捉えていくことによって「人間性に支えられた専門的資質や力量」を課題としていくステージにきている。
- ③養成段階での教育方法としては、「体験型学習＝実習」をより多く取り入れて、「授業内での基礎知識の習得」との両輪でもって学びを充実させる工夫が必要だと思われる。
- ④その学習観は、「一方的な教授による学習」ではなく、「親子から学ぶ、保護者から学ぶ」対話型学習である。具体的な指導方法として、教室内の学習に加えて実際場面で学び体験が重要視される。さらに、観察、試し、かかわり、記録、記録、討議、省察、ロールプレイなどの工夫が有効であることが、今回の分析からわかった。

### （2）養成校の教育課程内外での学びを深めるための学校づくり＝開かれた大学づくり

- ①教員主導による学びから学生主体の学びに発展させるためには、学科をあげて教育課程の内外での改善を図る必要があると思われる。過密なカリキュラムの中でどうやって、学生主体の活動時間を確保できるのか。たとえば、学生どうしのサークル活動の支援体制、地域でのボランティア活動時間の確保など、養成校はサポート体制をつくる必要があろう。
- ②このテーマは特に、養成教育段階の教育と就職後の継続研修等に繋げていくことが求められることから、養成校の側から積極的に地域の保育行政や保育現場及び子育て支援センター等の関係機関との親密な連携を築いていくことも、これからはより求められる。

### （3）養成教育段階での教育到達点の再確認の必要性

- ①養成教育の出口段階としては、「保護者支援・子育て支援」に関しても、プロの保育者になるための基礎的資質・専門性とは何かを明確にしていくべきだと考える。つまり、養成課程修了時はプロの専門職になるための入り口であり、その入り口に繋げるような基礎的専門性をしっかり見極めて養成する。

- ②「のりしろ」時期（就職後2～3年まで）に養成校と保育現場が共同しながら、確実な力量形成を図ることが必要であろう。保育現場は新卒者に即戦力としての「保護者支援力・子育て支援力」を求めているわけではない。就職後に所長や上司からの助言・指導を受けながら徐々に身につけていくことを期待する回答が多いことから、のりしろ時期の研修等に関して、養成校と保育現場とが密接に協同できることが重要になってくる。

（本稿は、日本保育学会第64回大会自主シンポジウムにて配布した資料に加筆・修正を加えて文章化したことを付記しておく。同時に、アンケート調査にご協力いただいた中部ブロックの保育士養成校ならびに保育所長の方々にこの機会を借りて謝辞を申し上げたい）

（執筆 2010年11月26日）

【参考資料・文献】

- ・日本保育学会準備委員会編『日本保育学会第61回大会発表論文集』 2008年
- ・日本保育学会準備委員会編『日本保育学会第62回大会発表論文集』 2009年
- ・厚生省児童家庭局『保育所保育指針』 1990年3月7日
- ・厚生労働省児童家庭局『保育所保育指針』 1998年3月25日
- ・厚生労働省児童家庭局『保育所保育指針』 2008年3月28日
- ・厚生労働省編『保育所保育指針解説書』 2008年 フレーベル館

# 「『かぐや』を助けるために、 1つになったこどもたち」

こすもす保育園 富田靖子

## はじめに

こすもす保育園は、名古屋市の瑞穂区にあります。桜の名所、山崎川のすぐそばにあり、春はピンクのトンネルを、夏はセミの鳴き声にさそわれ緑のトンネルを、秋は赤や黄色に色づいたハッパのトンネルを、そして冬ははだかになったトンネルを元気に通りぬけて毎日さんぽを楽しんでいます。

山崎川をはさんで反対側には、分園のさざんか保育園もあり、10年前より、あわせて120名の定員の保育園になりました。近年は、地域子育て支援センターの指定を受け、休日保育事業も実施しています。地域要求に応える保育づくりと、「育ち合う保育」の実践を日々大切にしたい保育を積み重ねています。

## 4才児「だいこん組」の出発

2009年度が出発しました。3才児クラスからもち上がった23名の子どもたちと私、そして8時間パートの谷沢保育士が加わってのだいこん組も、にぎやかにスタートしました。4月は、それまでの2階のお部屋から1階になり、目の前に広がるお庭やテラスに大よろこびで毎日とびはねていました。すぐ隣の年長クラスのお兄ちゃん・お姉ちゃんのやることにも興味津々で、光るドロ団子作りや鉄棒、なわとびのあそびをマネしてみたり、「カメ吉」当番の仕事にくぎづけになったり……。4、5月のI期に、ずいぶんといままでの生活に幅ができた感じがしました。

クラスは、男子が15名、女子が8名という構成なので、全体的にパワフルな感じのするクラスです。3才児の頃から鬼ごっこの的なあそびが大好きで、この頃は「3匹のコブタごっこ」や「ピーターパンごっこ」というつもりのある鬼ごっこがもり上がっていました。

ささやかながらクラスのベランダにプランターで「畑」もつくり、ナスとキュウリとトマトの栽培に挑戦もしてみました。「食べる」ことの大好きなクラスだったので、大好きな「マーボーナス」と「キュウリのつけもの」それに「トマトソースのスパゲッティ」をお腹いっぱい食べてみたい！というこどもたちのささやかな要求を実現したいな、と思つての挑戦でした。畑づくりをきっかけにお手伝いの仕事もスタートさせたりして、ちょっぴり背のびした活動が子どもたちの生活に色をつけてくれました。

## 真夏のある日、事件がおきました！

この日、主任のさゆりちゃん（この園では保育士を先生とは呼ばない）より園のコーヒーを買って来てほしいとお願いがあり、クラスみんなで近くのコーヒー屋さんにおつかいにいきました。その帰り道、な・なんとお人形にされてしまった「かぐや」にバッタリ会ってしまいアタフタする保育士と子どもたち。お人形といっしょにあった手紙には「わたしを助けて」とありますが、さてさて、この話、どうなることでしょうか。

## 7月30日（木） クラス通信より

### I 事のはじまり

保 「あれ？何か聞こえなかった？」

子 「ウンウン！セミダヨ！」

保 「うーん、せみもないてるんだけどね。ちょっとちがうなー」

子 「アレ！ホント！ナニカキコエル」「クルマノオト？」「うーん、チガウキガスル?!」

保 「何だろう?!（よーくきく）あれ？何か・・・あかちゃんの・・・」

子 「アレ?!アカチャンノナキゴエジャナイ?」とはるとくんが「ホーラココ、ホーラ!」と何かを発見!

みれば『かご』が・・・。「こわーい」と2～3人の子が言っていた。トミダがかごをとり「あけるね」「うわーこわーい!」そーっと開けると中に『お人形』と『ミルクが2本』『かぐや姫の絵本』と『漢字ばかりの手紙』があった。

保 「あれ?!『だいこんさん助けて』って書いてあるね」

子 「エーッウツソオー!」ととにかく大変!大変!と園に戻り、手紙の続きを読むことにした。

### 2 手紙には

手紙には3つのことが書いてありました。

#### ①「私を助けて?」

私は、月の国の「かぐや」です。私は、月の世界でお父様とお母様と一緒に暮らしていました。そこに、ある日“からす天狗”というものがきて、私と結婚したいと言うのです。私は他に好きな人がいるので、結婚できないと言ったら、からす天狗は怒って、私をこのような人形に……。私を助けられるのは、勇気があり、力を合わせることの好きなだいこんさんだけなのです。どうか助けてください!!

#### ② 私の助け方

からす天狗は「かぐら鈴」が嫌い。そこで月の国のかぐら鈴をまほうのひもで結んでしまったらしい。

そこで、そのまほうのひものまほうをとり、かぐら鈴を手にいれるために

- 1、天狗ゲタにのり
- 2、ひもから「かぐら鈴」をとる

そのかぐら鈴でカラス天狗をやっつけてまほうをとく粉を手に入れるのです。☆

### 3 わたしの育て方

- ① ミルクを飲ませて。 白ミルクを 朝 オレンジミルクを 夜
- ② お風呂に入れないので、体ふきをしてください
- ③ 夜、一緒に寝てください

怖いという子もいたけど、「みんながいるから（一人じゃないから）やりたい！」と言いました。お休みのこうすけ君に聞いてクラスとしてどうするか決めます。育てることは「母ちゃんに聞いてみる」と云う子もいて宿題になりました。8月3日（月）にクラスとしてどうするか決めます。今夜言う子も言わない子もいると思います。どうかあかさなたちからきりだして下さーい！よろしくね。

#### 「ミンナデ、カグヤヲ助ケタイ！」

8月3日（月）

お昼ごはんの時、この間お休みしていたこうすけくんにも例の「かぐや」の話をしてみました。聞いている子どもたちも、もう1回あの時のことを思いだして「ソーソー ソレデハルトガ カゴ見ツケタンダヨオ。」「アヤカガサ ソコデイイ考エシテクレテサー・・・」等、いろいろ話になりました。

そして、いよいよこうすけくん気持ちきくと、「コウチャンモヤル！！ミンナデ カグヤヲ助ケタイ！！」23人目の意見もOKで、いよいよ「かぐや救出プロジェクト（?!）」がスタートする運びとなったのです。

お家からのノートにはドキドキの方が大きい子、ワクワクの方が大きい子、いろんな状況の子がいるようです。このとりくみを通し、“1人じゃだめだけど、仲間がいれば大丈夫”とか“みんなで力を合わせれば、こんなこともできる”みたいな気持ちがこどもたちの中に感じられればいいな、という願いをこめて、このとりくみをすすめていくことにしました。

#### いよいよ、お家での「かぐや」のお世話がはじまって

クラス全員（23人）で、「かぐや」を助けるために立ち上がった、だいこんさん！いよいよ、「かぐや」を見つけた時にいっしょにあった手紙に書いてあった「わたしの助け方」にしたがっての救出がはじまりました。

手紙にあった「わたしの助け方」についてみんなで話し合うと、天狗ゲタにみんなでのる日がある！というのです。それは運動会の日でした。こすもす保育園では毎年4才児は、運動会で天狗ゲタに挑戦するのです。「ほんとだ。その日だったらみんなで天狗ゲタに乗って、からす天狗がかけたかぐら

鈴のまほうをとくことができるかも！！」「キット大丈夫ダヨオ！」「ヨーシ ミンナデ カ合ワセヨウ！！」「ミンナデ 天狗ゲタ練習シテ ノレルヨーニナロウ！！」と、子どもたちも大はりきりになりました。

次に、手紙に書いてあった「わたしの育て方」をみて、またまた話し合いになりました。ミルクの飲ませ方やおふろの入れ方、夜の過ごし方など、具体的に書いてあることをききながら「アレ?!アノサー 朝ハ保育園デ ミンナデ オ世話シタライイケド 夜ハドウスルノ?!」という子がでて、みんなで、あ〜本当だ!!ということに。保育士が連れていくだとか、夜だけ園長に頼んでみたら…とか、意見もでましたが、最終的には「オクチャン（担任のこと）バッカ連レテイクト大変ダカラボクタチモ手伝ウ。」といいだし、土・日とか長いお休みのときは保育士が連れて帰り、あとはみんなで順番にお家に連れて帰ってお世話をすることで意見も一致し、「かぐや」のお世話がはじまったのでした。

## 8月4日（火） クラス通信より

「かぐや」プロジェクト 「はるとくんの家に泊まる」の巻  
昨夜、初めて子どもたちのおうちにお泊まりした「かぐや」とその本人はると君に、朝の会で

インタビュー

保 どうでしたか？

は タノシカッタ

保 怖いことはありませんでしたか？

は ナカッタヨ カワイカッタヨ

保 困ったことは？

は ナカッタヨ

保 よかったことは？

は アッタヨ ボクガミルクヲアゲタラワラッタヨ

保 ミルク何時あげたの？

は ヨルハゴハンタベタアト。アサハオキタトキ

こんな会話で話が進みました。昨日はトミダのところに泊まりした話。そして今日のはるとくんの話でいろいろ具体的になってきた子も多く、わからないことでドキドキしてた子も話を聞きながらドキドキがわくわくに変わってきた子も多いようです。

ママやパパたちには、ホントご協力をありがとうございます。

具体的なお世話は

① ミルク 朝は白 夜はオレンジ

② 1体ふき おふろはだめで体ふきをやってくださいよ

あとは、一緒に遊んだりだっこをしてください。次の日事務室に返していただければ、OK。わからないことは何でも聞いてね。夏休み中と金曜日はトミダが連れていきます。

## 8月5日(水) クラス通信

### かずき君のうちの泊りの様子です！

はるとくんと同様、まるで「妹」ができた勢いでお世話のかずきくんです。

お母さんのノートに、「一緒にだっこしてねていて、朝もいっしょに起きてきて、ミルクをあげていました。1人っ子なのでまるで兄弟がいるみたいでうれしかったんだと思います」とありました。「かぐや」に出会った時のこと、みんなでお世話して自分のうちに連れて行ったこと、これからはじまる「かぐや」救出劇のなかでのとり組(天狗ゲタ)を通して泣いたり笑ったりはらはらしたり恐かったり嬉しかったり悲しかったりの経験をいっぱいして仲間や周りの大人のカも借りて乗り越えてほしいと思います。いつか大人になって“仲間っていいな”って思える心が育っていることを夢見て、私も、子どもたちとドキドキ・わくわくしたいと思います

### 「お泊まりほいく」に、「かぐや」からのプレゼントが・・・

9月4日-5日で、クラスの大きな行事の「お泊まりほいく」がありました。前半あたためてきた仲間づくりの力をギュッとまとめることや、来年、年長さんになったらやるキャンプへの第一歩をねらいにして毎年やっている行事です。

その「お泊まりほいく」の夜、「だいこんさん、だいこんさん、お客さまがきています。」という全館放送が入り、ベランダにでてみると、不思議な音楽とともにお姉さまが2人・・・ステキな炎の舞を披露してくれて、そのあとに「かぐや」からの声のプレゼントが届いたのです。

「毎日 私ノコトヲ ヤサシクオ世話シテ  
クレテ アリガトウゴザイマス。

ワタシヲ タスケルタメニ 天狗ゲタノ  
練習ヲ ハジメテクダサッタトカ。

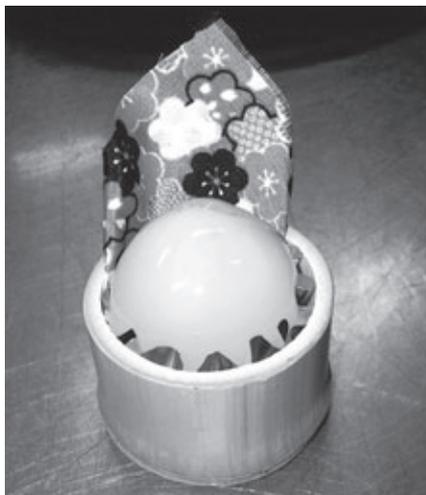
ドウカ コレヲタベテ 元気ヲダシテク  
ダサイネ。ワタシハ ダイコンサンガ 必  
ズ助ケテクレルト 信ジテイマス。

ソレデハー」



次の日の朝、かぐやから竹の筒につつまれた『月のデザート』が届き、夢みる気持ちでお家にもって帰って食べたという子どもたちでした。「アノデザートハ、スゴクオイシカッタヨネー！！」と、ますます、やる気満々になっていったのです。

そののち、からす天狗がかくしてしまったという「かぐら鈴」もみんなで探しだし、いざ運動会への気持ちが高まっていったいこんさんなのでした。



## いざ！！「運動会」へ

夏の間中「かぐや」のお世話も順調にすすみました。「お泊まりはいく」も無事に終えて、いよいよその盛り上がりとともに、運動会に気持ちは向かっているこどもたちでした。

8月の最終日、はじめてこどもたちに天狗ゲタを渡しました。

## 8月31日（月） クラス通信より

「くじらまつり」もあるけど・・・「お泊まり保育」もあるけど・・・

### めざせ！運動会！ 『天狗ゲタ』

「かぐや」プロジェクト、「かぐや」を救いの終章がはじまりました。今日は子どもたちに『天狗ゲタ』を渡したのです。お部屋で少しのってみました！わっ思ったより難しそう…大丈夫、だから練習するんだよねと、泥団子を作るようになったときのこと、上り棒や鉄棒縄跳びのこと・・・思い出しながら練習して運動会に向かうことを確認！今日は初日で初乗りしてきましたよ。

この日より、約一カ月の「天狗ゲタ」の挑戦がはじまりました。すんなりのれる子、苦勞する子…といろいろでした。が、「かぐや」を助けるためにあきらめない子どもたちでした。クラスの仲よしさん関係を中心に「練習ノ1マデデキタラ 2ダヨ。イッショニ ヤッテミヨウヨオ。」と手とり足とりはげまして練習につきあってくれる仲間といっしょに次から次にのれるようになり、毎日練習し自信もつけて運動会に向かっていったのでした。

当日は、スタートの気持ちのできた子から挑んでいき、23人目の仲間がゴールすると肩を抱きあっ

て大よろこびの子どもたちでした！かぐら鈴のまほうはとかれ、高らかに鈴の音が会場にひびきました。会場にからず天狗の声がきこえ、子どもたちに「よくやった！！くやしいが金の粉のありかを教える」と金の粉のありかも分かり、いよいよ「かぐや」をもとの姿にもどす日が近づいてきました。

さよなら「かぐや」。元気でね！！

## 12月4日（金） クラス通信

「さよなら かぐや。元気でね。大人になったらまた会おうね」

とうとう「かぐや」とのお別れの日！空は真っ青で太陽もピカピカ。お天気は、どうやら味方に付いてくれました！まずおへやで、朝から順番に抱っこしたり よしよししたり チューしたり・・・で、最後のスキンシップ！そして、こんなこともあったねーあーだったねーと、この取り組み（プロジェクト）が始まってからのことをみんなで思い出しました。もう、その時点で、ヒクヒク・・・なっていた子も。

そしてさいごのダッコのお別れタイム。一人ひとりまえにでてきて、おもい、おもいにこえをかけながら。お別れをするこどもたちでした。（チュしてくれた子もいましたよ）

### おわりに

こすもす保育園の4才児のクラス目標の中に「みんなで力を合わせるたのしさを知る」というのがあります。1年かけてどうやって子どもたちにこんな思いを気持ちの中に育てよう・・・と想了。いろいろな方法があったとは思いますが、私は、日頃あまり起こりえない出来事と出会うことを通し、その中で何かこどもたちが本気で向かっていくことで実感できるかもしれないと思い、このとりくみを考えてみました。

日頃は、テレビのヒーローやヒロインにあこがれて、その世界の中でなりきってあそんでいるこどもたちですが、たまにはおとぎの国のお話の中でいろんなイメージをたのしみながらドキドキしたりハラハラしたりワクワクしたりをたのしんでもいいのでは・・・と、夢多き「かぐや」の世界をもちだし、自分たちがいつもさんぽで親しんできた竹やぶで事件をおこしてみました。その竹やぶも、とうとう工事が入りマンションが建つようです。「コノタケヤブガナイト カグヤ オレタチノコトワスレチャウンジャナイカナ～」とか「ココカラ 月ノ世界トツナガッテイタンジャナイカナ。カグヤニ会エルカナ マタ・・・。」とか、1年たって年長になったこどもたちが今もずっと気にしています。時々クラスで事件が起こると「オレタチズットミンナデ 力合ワセテキタジャン。カグヤノ時ダッテ スゴカッタジャン。ダカラ今度モ デキルト思ウ。」なんていう発言もとびだし、そうだ、そうだ、という雰囲気は今でもできます。

そんな姿をみていると、あの時の「かぐや」のとりくみは、今も子どもたちの心の中で生きていて、子どもたちにやる気をわかせてくれるんだなあと思います。それが何?!と思うけれど、いっしょにいた私もあの時のことを思うと今もジーンとしてこどもたちとの一体感を感じるのですから、きっと大事なことを教えてくれたような気がします。

# お母さん お父さんに今、伝えたいこと —園長だより「つながり」を通して—

半田市立清城保育園 松本敏子

## はじめに

清城保育園は、新美南吉の里である半田市にあり、0歳～6歳までの156名の園児と、37名の職員で構成されている市内でも比較的、大きな園です。特に乳児は、年度初めから定員がいっぱいになり、賑やかなスタートです。

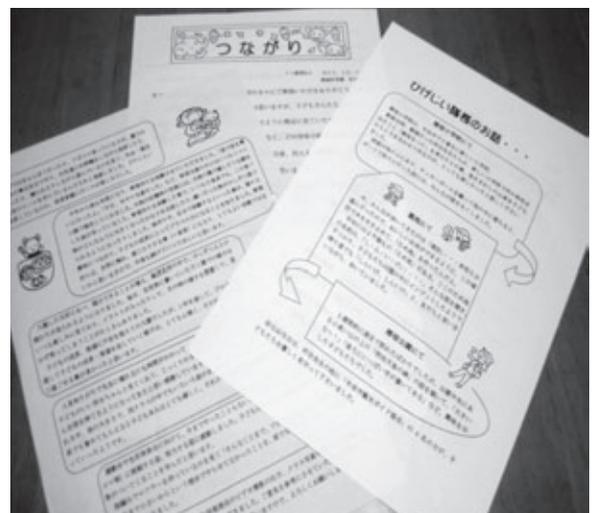
さて、半田市は、保育指針の改定を受け、2010年度より各園の保育課程を作成し保育を進めています。我が園も、子どもたちの実際の姿をふまえ、「今、子どもたちにどんな力をつけていきたいか」ということで、職員間で話し合い、共通理解を深めました。そして「自分に自信を持てる子ども」「五感を伴った経験を通して豊かな感性を持つ子ども」「人との関わりを楽しめる子ども」の3つを園の「めざす子ども像」としました。

これらの目標を日々の保育に結び付け、どう保護者にわかりやすく伝えていくかというのは、園長3年目の私にとっては大きな課題でした。そこで、月1回程度を目標に「園長だより」を発行し、試行錯誤しながら取り組んでいます。

## つながり No.1 (4月15日号)

今年度も、45名の新入園児とお家の方々との素敵な出会いを迎え、早、半月が経ちました。「出会った他人は、自分に必ず何かを教えてくれる、意味ある偶然」・・・私の好きな言葉です。この出会いを大切に、子どもさんやお家の方々が充実した日々を送れるようにしていきたいと思っています。また、「人は、いつも誰かとつながりを持って生活しながら、そのつながりをどんどん広げて豊かになっていく」・・・という思いを持って、この1年「つながり」というタイトルの園長だよりを発行させていただきます。

今、人との関わりが希薄になっているという事をよく耳にしますが、「友だちとの関わりを楽しめる子」を目指し、保育を進めていきたいと思ひます。そして、保育士とのつながりは勿論の事、お家の方々同士も、



つながりが持てるような工夫を行事の中などでできたらいいな、と思っています。

下記に、昨年度末に保護者の皆様から寄せられた御意見を一部ですが掲載させていただきました。お母さんたちが、子どもさんのご家庭での様子を見たり、話を聞いたりすることで、保育を評価していただいたことをとてもうれしく思いました。お家の方々のご意見は、私たち職員の「宝物」として、大切に今年度につなげていきます。

人見知りがちで先生に慣れるにも時間がかかって、先生も大変だったと思いますが、子どもの良い所をちゃんと見てくれて、じっくり付き合っていただけなので、だんだん自信を持てるようになってきたと思い感謝しています。小さいうちは、やはり生まれ月や、体の大きさで、同クラスの中でもいろいろ差があると思いますが、小さな成長でも誉めてもらえると子ども本人はとても嬉しく、それがまた次のやる気につながっていったようです。



今年から娘も年長になり、野菜作りを体験させていただきました。「皆で苗を買いに行ったよ」「今日、水やり当番だった」など、野菜当番の日にはいつもニコニコ顔で報告してくれました。大根の収穫時の写真には、大根の横で嬉しそうな顔をした娘が写っていました。野菜作りを経験した事で、いつもの食卓でも、この食べ物がどんなふうになくなったかななどを会話したり、嫌いだった物が少しずつ食べられるようになったりしました。物作りや、自分で体験するといった事が、様々な興味につながり、子どもの成長にとってプラスの力になる事を知りました。野菜作りは自然に触れ、感じたりする事(=食育)にもなり、とても良い活動ではないかと思しますので、今後も続けていってほしいと思います。

運動会や生活発表会に向けて、今までやったこともないような事(竹馬・逆上がり・剣玉・コマ等)に挑戦する姿、努力する姿に感動しました。子どもはそれらの経験から努力すれば結果がついてくる事を学んだと思います。指編みでマフラーを作っているのを見て「そんなことまで、できるようになったのか」と思い、今まで小さいからという理由でやらせてなかったことを、家でもやらせてみようかなという気持ちになりました。

※この「つながり No.1」のお母さんの意見にもあるように、野菜作りを中心にした食育活動を年長児を中心に取り組んでいます。何の野菜を育てたいかをみんなで出し合って決め、苗を買いに行く、土作りをする、草取り・水やりの世話など、子どもたちは育てていくうちに、どんどん主体的に取り組む姿を見せてくれます。収穫すると調理員さんが素材の味を生かし、すぐに調理してくれるこ

とも子どもたちの励みになっています。

又、「げんキッズ」という絵本から、4つの栄養の食品群を知り、朝食のメニューを「朝の会」で話題にしたり、給食の時、今、食べている野菜が何の食品群かなどの会話をしたりする姿が見られます。そして、家庭の食卓でも食育の話題が広がってきていることを実感しています。



### つながり No.2 (5月31日号)

5月21日、抜けるような青空の下、年長組さんが「地域探検めぐり」に出かけました。隊長は「ひげじい」こと河合克己先生……。河合先生は、校長や幼稚園長を経て、今は「半田市観光ガイド協会」で活躍されている私の中学時代の恩師です。

先生は「半田市内どの地域でも、いわれや歴史があるから、どこでも説明してあげるよ」と気軽に声を掛けて下さいました。正直、清城地区にそんな所があるのかな、と思っていましたが、今回探検してみても、グッとこの地域に親しみが持てました。雁宿小学校→親池→雁宿公園というルートで探検し、隊長の話聞く子どもたちの顔は真剣そのもの……。後で先生が「子どもたちに話をしている『伝わった』という瞬間が何度かあった。落ち着いて話を聞くことのできる素晴らしい子どもたちだね」と誉めて下さいました。なお当日は、河合先生の他に「半田市観光ガイド協会」の4名の方々も子どもたちを優しく見守って下さいました。



※この「つながり No.2」では、地域の方との触れ合いを話題にしました。自分たちの住んでいる所

に興味を持ち、いろいろな方の話を聞く事は、子どもたちにとってはとても新鮮で、良い学びになりました。

#### つながり No.4 (9月7日号)

9月になっても猛暑が続き、「スポーツの秋」には程遠さを感じますが、登園後、園庭に走り出し、竹馬に挑戦している水組さん(年長組)の気持ちは運動会に向けてきています。昨年度の水組さんへの憧れから、4月頃から竹馬に取り組んできた子どもたち・・・随分、足取りもしっかりしてきました。



先日の「はんだっこ(子育て支援センター)」主催の講演『運動好きな子に育つには?』(日本福祉大学子ども発達学部教授 山本秀人氏)の中で「運動嫌いになるのは本人の責任ではない。小さい時にいろいろな運動遊びに取り組む中で、一生懸命に行っているのに『Aちゃんはできるのに何であんたはできないの?』という心ない大人の一言が子どもを運動嫌いにさせる事が多い」というお話がありました。そして、「子どもたちのやれるようになりたいという気持ちを受け止め、その子が技術的にどこでつまづいているかを見極め、声を掛けていく事が大切。」と言われました。

単に「できる」「できない」という表面的なことで子どもたちを見るのではなく、その子たちがどのような取り組みの中で運動会当日を迎えたのか、という事に重きを置いていきたいと思います。そして、お家の方々と一緒に「できるようになってきた過程」や「できかた」に注目し、その子なりの頑張りを認め合っていけたらいいですね。

#### つながり No.6 (11月16日号)

10月末にあった個人懇談会での事です。懇談を終えた担任が、事務室に走り込んできました。「園長先生、聞いてください!! Bちゃんのお母さんが私に話してくれたんです。『運動会、とっても感動しました。我が子が、力いっぱいリレーで走っていた姿はもちろんですが、自分が走り終わった後、すぐに友だちを応援していたこと・・・とても成長した、と実感しました。1歳から入園しましたが、よくぞここまで育ってくれたと嬉しかった。』と」・・・。



そんなお母さんの言葉に、子どもさんの心の成長を見てとってくれた事を、保育者である私たちも感動してしまいました。自分の事だけでなく、友だちに目を向け、友だちとのつながりを深めている

子どもたち……。その内面の育ちを見逃さず受け止めてくれるお母さん……。とっても素敵ですね。

※「つながりNo.4とNo.6」では運動会という子どもたちにとっては、大きな節目となる行事を通して思いを綴りました。「No.6」では、Bちゃんのお母さんが本当に心から感動した事を伝えてくれたことで、担任と「保育って悩んだり、迷ったりする事もいっぱいあるけど、こういう事があると、自分のやってきた保育を肯定してもらえたみたいで、保育者冥利につきるよね。」と喜び合いました。

## おわりに

半年余りの「つながり」を振り返ってみましたが、発行する中で、ややもすると、自分の思いが強く一方的な文章になってしまったり、「こうあらねばならない」という教訓的なものになってしまったりすると、お母さんやお父さんたちの気持ちとは、かけ離れてしまうのではないか、という事に気付かされました。自分が、保育実践や講演などの話の中で心を動かされた事、子どもの姿や、お母さんたちの思いで感銘を受けた事など、具体的に書く事で「伝わった」という実感が持てる時がありました。



まだまだ、取り組み始めたばかりで、これからですが、タイトルである「つながり」というキーワードをしっかりと日々の中に位置づけて進めていきたいと思っています。

今、そんな思いで意識的に行っているのは、登降園時、毎日玄関に立って、親子に挨拶をすることです。一言二言ですが、声を掛けることで、お母さん、お父さんとの距離が縮まり、少しずつ心がつながっていくのを感じています。そして、そんな積み重ねの中で、子どもさんの家での様子を話して下さる方や、保育園生活の中で思う事などを素直に口に出して下さる方が増えてきました。

自分の思いを伝えたいのならば、まずは、お母さん、お父さんの思いをしっかりと受け止める努力が大切だという事を肝に銘じて、これからも一步一步進んでいきたいと思っています。

# 「完璧な親なんていない！」 から始まる子育て支援

子育てサークルプーさんクラブ代表  
Nobody's Perfect ファシリテーター 横山 悦子

## はじめに

今回このようにして、桜花学園名古屋キャンパス保育子育て研究所年報に私の活動（という程のものではありませんが）を書かせていただくことに大変感謝しています。

私は名古屋短期大学保育科を卒業し専攻科保育専攻に進学しました。専攻科を卒業後、教員として公立幼稚園で働いていましたが、長男出産を機に退職しました。

今、6歳と4歳の男の子の子どもがいます。長男は幼稚園の年長、次男は3歳児の年齢ですが、在宅で（私が住んでいる地域の公立幼稚園は2年保育なのです）子育てを頑張っています。現在は子どもたちも成長してきたため、子育てによる身体的負担は以前に比べるとだいぶ軽くなりましたし、近所に心許せるお母さん友達もできたことで精神的負担も減り、ようやく子育てが楽しい、と思えるようになってきました。

しかし子育てが始まった当初は、初めての育児に右往左往しながら、自分の親としての未熟さ、現代社会での子育てのしにくさを痛感して、とても悩んだものでした。「どうして子育てがこんなにつらいのだろう」「もっと楽しく笑って子育てがしたい」と思って、子育てサークルを作り、カナダの親支援プログラムを学び実践をしてきた中で、私が感じてきたこと、子育て当事者としてのお母さんの気持ちをここでお伝えできたらと思います。

## 1. 幼稚園教員時代

私がまだ保育科の学生だった頃、神戸の連続児童殺傷事件や子どもに関する様々な事件が起り、連日テレビや新聞ではその事件が大きく取り上げられていました。人間形成の上で幼児期がとても大切だと思い、その時期に関わりたいたいと思って保育者を目指していた私は、これらの事件を知りさらに、子どもが子どもらしく子ども時代を過ごし「自分が自分であっていいのだ」という自己肯定感を感じられるような保育がしたいと思ったものでした。

しかし学校を卒業し、いざ現場に入って様々な子どもたちと出会う中で、なんだか違和感というか、悶々とした気持ちが年々増していきました。友達とどう関わっていいか分からなくてすぐにトラブルになる子。いつも先生を求めてくる子。親に身なりなどをあまりかまってもらえず、毎日がとても不安定だった子。もちろん、そんな子はどこにでもいるだろうし、そうした子どもたちに保育者は丁寧に個別に応じる必要があると思います。ただ、そういった子がクラスに何人かいたり、いく

つかの問題が同時にクラス内で起こったりして1人では対応できない事態が何度も起きました。保護者の方とも、子どものことについて「今日はこんなことがあって・・・」と共有したり、「お家のほうではどうですか？」と家庭での様子を尋ねたりする時間を積極的に作っていましたが、毎回十分な時間はとれませんでした。また、育児不安を訴えてみえる保護者の方に、なんと云ったら良いのか当時子どもがいなかった私には分かりませんでした。

そんな日々を過ごす中で、なんとなく「子どもが成長する上で、親や家庭の影響力は大きいなあ」「子どもが家庭で安心して過ごせるように、保育者としてできることは何か?」「どのような方法で保護者の方に伝えたらいいのか、歩み寄ったらいいのか?」などを考えるようになりましたが、さして緊急の問題でもなかったため、いつも頭の片隅に置いてあるだけで、深く考えることはありませんでした。「保育者にできることは限りがあるのではないか?」そう漠然と感じながら退職することになりました。

## 2. 初めての子育て

結婚し自分の子どもを妊娠したとき「子育ては大変だろうけど、なんとかできるだろう」と甘く考えていました。子どもはかわいいし、出産すること自体がゴールで、あとは子どもとの幸せな生活が待っている。そんな風にすら思っていました。

しかし、いざ子どもが生まれて子育てがスタートしてみると、夜中に何度も起きて授乳しなくてはなりません。また、トイレに行きたい時に行くこと、ご飯を座って食べることなど、これまで当たり前できていたことができなくなってしまう生活に戸惑いました。また、子どもが生まれてから24時間休みなく子どもと一緒に生活が、次第にストレスになっていきました。

「保育と子育ては全然違う!!」とはよく聞く話でしたが、本当にその通りだと実感しました。仕事(保育)では子どもは定時に家に帰っていきますし、休日もあります。体を休めたり、リフレッシュする時間がありました。

子育て(お母さん)は24時間休む暇がなく、疲れはたまっていくばかりです。しかも初めての子育て、大切なわが子ということで、ちょっとした病気や育児用品ひとつ決めるのにも「これでいいのか?大丈夫か?」と不安の連続でした。近所に気軽に相談できる友達もなかなかできないし、毎日同じような子育てだけの日々が続いていると、社会からも切り離された生活をしているようで、漠然とした不安感やイライラが募っていきました。

次男が生まれると、ますます余裕がなくなってきて、ささいなことで子どもや夫に当たってしまったりしていました。「なんだか自分が想像していた子育てとは違うなあ」と思いながら「でも子育てなんて昔からみんな自然にやってこれたことなのに、今はなんでこんなに大変なんだろう?」そんな疑問が湧いていきました。

幼稚園教員時代とは違い、今度は自分の身に起きている緊急の問題だったので、必死になって大学の時に学んだ服部祥子氏の『子どもが育つみちすじー愛と英知の親子学』<sup>(1)</sup>を引っ張り出してきて読み始め、そこから色々な本を読み進めていきました。その中で私が深く共感し、今でもバイブルとし

て読み返している本がいくつかあります。原田正文氏『みんな「未熟」な親なんだ グループ子育てのすすめ』<sup>(2)</sup>『育児不安を超えて - 思春期に花開く子育て』<sup>(3)</sup> 伊志嶺美津子氏、新澤誠治氏『21世紀の子育て支援、家庭支援 子育てを支える保育をめざして』<sup>(4)</sup>です。

これらの書物から、今こんなに子育てが大変なのは、私の責任ではなく、社会の変化によって多くの親が苦しんでいることを知りました。この子育てのしんどさ、つらさが自分の親としての未熟さからだけではなく、社会の流れ、構造が現代の親を子育てしにくくさせていることを知識として知り「ああそうなんだ、私が悪いだけではないんだ…」と思えたその時の安堵感は、今でも忘れられません。

### 3. 本音と言えない支援センター、子育てサークルができるまで

それでも当時の私は、まだ赤ちゃんの次男と2歳の長男と、3人でイライラしながら、心から悩みを言えるママ友達にも出会えずに悶々と過ごしていました。「あ〜、この気持ち誰かに聞いてもらいたい〜!!!」と思って地域の子育て支援センターに出かけても、なぜか「こんなに困ってて、子育て大変だわ!」ということが言えずに、その場で会ったお母さんとも当たり障りのないわべだけの会話をして、すっきりしないまま家に帰ることが多くありました。沢山の親子が遊んでいる中で、なんだか自分が親として評価されているのではないか、と思えて、結局支援センターでは「いい親」を演じていただけなのかもしれません。

「このままでは嫌だな」と思い、どこかに自分の気持ちを受け止めてくれる子育てサークルなどはないか探してみました。しかし、子どもが中心で何かイベントをしたり、遊びを提供するような所ばかりで、お母さんがゆっくりと子育てについて話ができるサークルはありませんでした。「よし、ないなら作ってみよう!」と近所の公民館をかりて、子育てサークルをスタートさせました。はじめは2,3人の参加でしたが、1年もすると毎回10人くらいが集まるようになってきました。

原田氏のグループ子育ての参考をしながら、毎回テーマを一応決めて「トイレトレーニングについて」とか「友達とのトラブルをどう考えるか」など、その時のメンバーの関心ごとを出し合っ

て話をするスタイルを続けてきました。決まった形があるようでないような、井戸端会議のサークル版といった感じです。

でもそれが良かったのか、私自身もここで心から話せる友達と出会うことができ、お互いに育児の大変さを共感しあったり、くつろいだり、支えあいながら、だんだんと子育てが楽しくなっていました。上の子が小学校に上がる前に、地域に親同士のつながりが持てたのはサークルのおかげです。サークルを作って本当によかったなあとと思っています。

### 4. Nobody's Perfect (「完璧な親なんていない!」)との出会い

子育てサークルでは、しつけや子どもの発達などについて、みんなで話し合うことがよくありました。その時は、いつもそれぞれの体験を出し合うだけで、話が先に進まないことが多く、なにか道筋やヒントになるような書物や、話の進め方の手法はないかな、と探していたところ、カナダのNobody's Perfect (以下NPと略)プログラムと出会うことができました。

Nobody's Perfect（日本語では「完璧な親なんていない！」と訳されています）とは、カナダ生まれの子育て中の親のための支援プログラムです。どんなものか簡単に紹介します。

『0歳から5歳までの子どもを育てる親のための、学習と支援のプログラムで、1980年代はじめに、カナダ保健省と大西洋4州の保健部局により開発され、1987年にカナダ全土に導入された歴史あるプログラムです。

日本では、2002年にテキストが翻訳され、NPプログラムを実践するNPファシリテーターの養成が始まり、NPプログラムが実施されるようになりました。

Nobody's Perfectプログラムは、0歳から5歳までの子どもをもつ親を対象に、参加者がそれぞれに抱えている悩みや関心のあることをグループで出し合って話し合いながら、必要に応じてテキストを参照して、自分にあった子育ての仕方を学ぶものです。

同年齢の子どもを持ち、共通の興味や関心をもつ人々と出会うことができる安心できる場を親に提供するプログラムです。

プログラムは、10人前後のグループで、1回2時間、週1回で6～10回連続で行うことを基本にします。研修を受けたファシリテーターが、プログラムを準備・企画・実施し、参加メンバーの話し合いと交流を円滑にすすめていく役割をにいます。

このプログラムの目的は、親が自分の長所に気づき、健康で幸福な子どもを育てるための前向きな方法を見出せるよう手助けすることにあります。』<sup>(5)</sup> というものです。

NPの親用テキスト<sup>(6)</sup>を読んで「私はずっとやりたかったのはこのことだ！」と直感しました。まさに運命の出会いのようでした。私自身の子育てはずいぶん楽になってきていましたが、幼稚園教員時代からいつも心にひっかかっていた何かを、NPは見事に言い当ててくれました。「はじめから一人前の親などいません。皆、まわりの助けを得ながら親になっていくのです。」「親だって人間です。」このフレーズを初めて読んだときに、なぜだか分かりませんが涙が出て、号泣しながら読んだことをおぼえています。

私を含め、完璧志向が強い現代の親に、このメッセージを届けられたら、どんなに安心できることでしょう。「このプログラムを現代のお母さん方はきっと求めている！」そう確信しました。そしてNPについて知れば知るほど、NPファシリテーターになりたいと思うようになり、養成講座を子育て中の身でありながら、受けることにしました。

## 5. NPの実践でみえてきたこと

NPファシリテーター養成講座を無事修了し、これまでNPを4回実践しました。学べば学ぶにつれNPの奥深さを知り、私だけに限ったことではなく、現代の日本の親にはぴったりだ、ということが理論的にも分かるようになってきました。

子どもが少なくなり、地域のつながりも薄くなっている中で、私自身も自分が親になるまでに、子どもの様子を知ったり、親の役割（親業）を理解する環境には恵まれませんでした。それでは親になったときに戸惑うのは当たり前だし、そこから不安になり、育児を外注に頼ってしまう現代の親の姿は、

当然の結果だと思えます。

NPの基本的な考え方・信念(Beliefs)のひとつに「生まれながらに一人前の親はいない」「親はまわりからの情報や支援により、子育ての中で親として育っていくのだ」<sup>(7)</sup>ということがあります。ですから現代の親には、親とはどんなことを子どもにするのか、を丁寧に伝えていく(上から教えるのではなく)必要があるのです。NPのような親業を学ぶ機会を社会が積極的に提供すれば、現代の親たちも親としての役割を引き受け、イキイキと子育てを楽しむことができるのだと思います。

学ぶといっても、NPは勉強のように学ぶものではありません。参加者中心のアプローチ方法です。これまでの母親教室などのように、上から良い育児の方法を伝えて親の行動を変えよう、という方法とは大きく異なります。ファシリテーターが子育てについて何かを教えることはしません。では、どのようにプログラムが進んでいくのでしょうか。

NPには2つのキー・コンセプト(Key Concepts)があります。「価値観の尊重」と「体験を通して学ぶ」ということです。NPでは参加者がすでに知っていること、自分や子どものためにすでに行っていることを土台としています。日々の子育て体験を出し合いながら、自分の価値観に気づき、価値観について問い直したり、肯定したりする機会を提供します。子育てはその人の価値観と切っても切れない関係にあるためです。

また、子育て体験を(なにがおきたのか?) → (それはどういうことか?) → (これからどうするのか?) という「体験学習サイクル」を回しながら、参加者がそのことについて気づき、考え、それを応用できるように助けます。そして日々、自分がやっていることに対する自信が増したり、新たなスキルを得て、これまでとは違う対処の仕方ができるようになったりするので。

これまで実施してきた中で、安心して子育て中の親と出会うことができ、気兼ねなく話せる子育て仲間を得た親同士は、ファシリテーターとの接点がなくなっても自分たちでアドバイスやサポートをし合う関係が続けたり、前向きにイキイキと子育てするようになる姿を見てきました。その度に私は親の持つ力を信じずにはられませんでしたが、そもそも親はみな親業を素晴らしくこなす力を持っていると確信できるようになりました。

NPのゴール(Goal)は「複数の親が集まって自分たちの生活や子ども、親としての役割などについて、安心して考えられる場を提供すること」<sup>(8)</sup>です。このようなプログラムが、もっと沢山の親に届けられる環境にはよくなってほしいな、と思います。

追加ですが、Nobody's Perfect - Japan 代表の原田正文氏(大阪人間科学大学教授、こころの子育てインターネット関西代表)が今年度、NPの良いところを取り入れながら、独自の手法をもちいた「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた!”」(略称BP)というプログラムを開発しました。このプログラムは「初めて赤ちゃん(第1子)を育てる母親のためのプログラムで、子育ての仲間づくりと子育ての知識の学習を通じて、親子の絆づくりを応援するもの」だそうです。NP同様、これから日本各地で「こんにちは、赤ちゃん事業」「4ヶ月児健診」の受け皿として位置づいていくことを期待しています。私も機会があればBPファシリテーター資格を取得し、この地域でもBPができるといいなあと思っています。

## 6. 今、もとめられる子育て支援とは？

近頃では、子育て支援が社会的にも注目されるようになってきました。国も「子ども子育てビジョン」や「子ども・子育て新システム」などを打ち出し、施策が明確にされようとしています。子育て支援の新しい在り方が、これから進んでいくことをうれしく思います。

昨年度まで、次世代育成支援対策推進法による、私の住む市の次世代育成支援後期計画の策定委員をさせていただく機会がありました。策定会議に何度も参加して思ったことは「なぜ子育てを支援するのか。」といった根本的な合意形成が、子育て支援者や行政担当者の中でも、まだ十分されていない、ということです。事業が担当者の主観や個人の価値観で行われていることも少なからずあり、そのような支援の仕方が、若い親たちにどのような影響があるのか、と思うと今国の方針をしっかりと打ち出し、真に子育て家庭を支える子育て支援の在り方を、早急に示してもらえたらどんなにかいいだろうと思いました。

私が今、子育て支援に必要なだと思うことは「当事者性」と「親の気持ちに寄り添う支援者の存在」です。(他にも沢山あるとは思いますが) 子育ての主体は親(又は親に代わる人)なので、その親を支援する方法が、子どもの幸せ(最善の利益)のための最も一番の近道だと思うのです。

子育ては、親に大きな喜びをもたらしてくれますが、現代社会ではそのことよりもまず、子育てが辛い、子どもがかわいく思えない、という親が沢山みえることも事実です。でもその親が決して親失格なのではなく、たまたま子育てしにくい環境にいるだけなのです。それも今の閉塞感漂う現代社会の現われでもあるわけで、一概に親の責任ではありません。

必要なのは、親の「もうダメです。子育てしんどいです。」という声をきちんと聞いてくれる支援者や子育て仲間の存在だと思います。子育てが辛いとおっしゃる親御さんには、何かしら、辛いと思う要因があるので、その原因を解決しないまま「親なんだからがんばりなさい」だけでは親は落ち込むしかありません。今ある現実を受け入れてくれて、立派な解決策を教えてくれなくてもいい、どうしたらいいかを共に探り、寄り添ってくれる支援者・仲間が求められていると感じています。

言葉で説明すると簡単なことのように思えますが、これがなかなか大変であることを、実際に支援をしていて感じています。沢山の親子を見ていると「なぜ子どもにそんな態度をするのか」と思ってしまう時もあります。子育て中の親を支えたい、という思いで活動をしているスタッフからも、「なぜここまで支援しなくてはならないのですか」と疑問の声を投げかけられたこともありました。

こうした子育て支援現場のジレンマを、大日向雅美氏は『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』<sup>(9)</sup>で指摘しています。この本からも、子育て支援関係者に「なぜ子育てを支援するのか」という理念を、みんなで共有する大切さを訴えられているな、と感じました。

その理念は、私なりの解釈ですが、NPの信念と同じだと思います。私自身、NPの実践経験により、この信念を理解できてからは、親への見方が変わりましたし、ゆるぎない親への信頼が子育て支援には大切であることを学びました。

最後に、そのNPの信念(Beliefs)を紹介したいと思います。

『NPの基本的な考え方は次の通りです。

- ・親は自分の子どもを愛し、よい親になりたいと願っている。また、子どもが健康で幸福であってほしいと願っている。
- ・はじめから一人前の親などいない。親は誰でも情報とサポートを必要としている。たがいにサポートしあうグループの一員になることで、参加者は自分の長所に気づいたり、自分に何が必要かを理解することができる。
- ・親のニーズを満たすことは、その親が子どもの要求しているものを満たせるようになるための大きなステップとなる。
- ・親は実際的で前向きな、費用のかからない考え方や方法を求めている。』<sup>(10)</sup>です。

子育て・家族支援は「完璧な親なんていない！」という基本理念からスタートし、だからこそ親を支援する必要があるのだ、という目的を見失わないように、支援者自身が足元を見つめながら、自分の支援の仕方が独りよがりになっていないか、常に自分を見つめ、問い直す必要性があると思っています。

## おわりに

最後になりましたが、専攻科時代にお世話になった大村恵子先生、大村先生が私とつなげてくださった小嶋玲子先生、お二人にはとても感謝しています。

こうして活動をまとめていますと、順調に過ぎてきたように思われますが、時々行く先が見えなくなって、どこに進んだら良いか迷うことが何度もありました。その度に私は、先生方にどうしたら良いかを聞くことができました。卒業生の私の質問に、先生方はお忙しいにも関わらず快く、的確なアドバイスをいつもしてくださり、私の活動に力を貸してくださいました。

卒業した後でも、こうして先生とつながりを持てたり、学ぶことができる学校を卒業して本当に良かったと思います。今年度開催した、Nobody's Perfect プログラムの託児ボランティアに参加してくれた桜花学園大学の学生さん方も、大変熱心で感心しています。

私の活動は沢山の方々に支えられています。親と子の幸せを願って、自分の家族も大切にしながらバランスよく活動を続けていけるよう頑張っていこうと思っています。

### 参考文献

- (1) 服部祥子『子どもが育つみちすじー愛と英知の親子学ー』朱鷺書房 1989年
- (2) 原田正文『みんな「未熟な親」なんだ グループ子育てのすすめ』健康双書 1999年
- (3) 原田正文『育児不安を超えてー思春期に花開く子育てー』朱鷺書房 1993年
- (4) 伊志嶺美津子、新澤誠治『21世紀の子育て支援・家族支援 子育てを支える保育をめざして』フレーベル館 2003年
- (5) Nobody's Perfect ホームページ (<http://homepage3.nifty.com/NP-Japan/>)
- (6) ジャニス・ウッド・キャタノ『完璧な親なんていない！』ひとなる書房 2002年
- (7) (8) (10) ジャニス・ウッド・キャタノ『親教育プログラムのすすめ方』ひとなる書房 2002年
- (9) 大日向雅美『「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない』岩波書店 2005年

# 海外での保育士資格取得プログラム ～その構想から成り立ちまで

名古屋短期大学保育科 高橋一郎

## はじめに

名古屋短期大学保育科は短大課程の2年に加えて、その上の2年課程として専攻科保育専攻を設置し、短期大学修了後さらなる学びの場を用意し、長期実習と合わせ、保育ニーズの多様化・高度化に対応してきました。修了後は教育学士と幼稚園教諭1種免許を取得し、保育現場や行政からの要請に十分に応えうる力量のある保育者の養成期間としての役割を果たしてきました。

2009（平成21）年度より、従来の専攻科の課程に加えて「留学タイプ履修プログラム」を設定しました。これは専攻科の2年間の学びの中に9ヶ月の海外滞在を取り入れたもので、専攻科における長期実習を海外で実施することを通して国際的な現場で活躍できる保育者を養成することが可能となりました。本稿では、この新しいプログラムの成り立ちと学生の学びの様子、そして今後の展望を記します。保育者養成校の新しい試みの理解の一助になればと思う次第です。

## 短期大学の海外保育実習

名古屋短期大学では短大1年時の夏休みに「海外保育実習 in Australia」を2005年度より実施してきました。その詳細については本年報2006年度版第4号に高須裕美氏（名古屋短期大学保育科）が「海外における保育実習の成果と課題」と題して詳しく記されています。ここでは重複を避け、簡単にプログラム概要を述べるにとどめます。この実習は短期大学1年時にオーストラリアの保育園にて7日間実習を行うものです。いわゆる視察・研修プログラムとは違い、実際に保育園（Childcare Centre）のクラスに入り担任教員と連携しながら保育を行うものです。直近の2010年度には併設の桜花学園大学保育学部生も含めて70余名の学生が参加しています。筆者自身は2004年度以来、「海外幼児インターンシップ（ニュージーランド）」と「海外保育実習（オーストラリア）」の二つの海外への保育実習の引率をいたしました。

出発前に語学面での不安をもつ学生もいますが、実際に現地に行くと片言の英語でも十分意思疎通は可能です。そうした不安を吹き飛ばす、たくさんの新たな発見と喜びが学生に前向きな姿勢を取らせました。日本の園とは異なった保育のあり方、異なった習慣、などに今まで「こうあるべき」と刷り込まれてきた固定観念（ステレオタイプ）から解き放たれ、今までにない視野と考え方の扉を開く役割をしてきました。

「いただきます」もなく、それぞれ個人が食べ始める昼食に驚き、何の制限もなく遊ぶ姿に日本の

保育との違いを見だし、時には日本のやり方の方がよいのではないかと考えたり、など単に善悪や文化の違いといった二元論に留まらず複眼的視野を学生に提供できる生きた実習をこのプログラムは実施することが出来ました。新たな体験に対する学生の驚きは好奇心となって学習意欲を駆り立てました。滞在地のコンドミニウムでは教員の部屋で簡単な英会話教室を開催しますが、普段の大学の授業と違い真剣なまなざしで学び、早速翌日の実習で言い回しを使う姿に、普段からその姿勢で学んでくれば…、と苦笑せざるを得ない時があったのも事実です。英会話教室を初めとした任意参加のプログラムに皆がやってきて真剣なまなざしで時間をオーバーしてまで学ぶその姿勢に、これこそ本来の学習ではないかと感じました。

実習修了後の評価アンケートでは全員が「行って良かった」との感想を残し、気がつけば、授業単位科目でもないこの海外保育実習が、高校生から名古屋短大保育科を進学先と選ぶ一つの理由となるまで成長しました。

### 発端は学生のリクエストから

実習初日はとまどいながらも園に出向き、恐る恐る子どもと接していた学生も、実習が終わる頃には子どもとも園の先生とも、人によって度合いは違うものの、保育を通して様々な交流が生まれます。その結果、帰国の時期が近づくと「まだ帰りたくない」「また来たい」といった声が学生から聞かれました。そんなある時、教員の部屋で学生と談笑していると、「オーストラリアで保育を学ぶことは出来ないのですか？」との質問が1人の学生から発せられました。そして聞くと何人もの学生が海外保育実習の経験から、オーストラリアでより学びたいとの思いが潜在的にあることがわかりました。単位や宿題に追われる学習とは違い、純粹に、より掘り下げて学んでみたい、という気持ちを大切に、そうした学生の思いが実現できないか、調べてみることにしました。2007年夏のことです。学生の声は同時に、この分野における国際交流、国際的視野を持った人材の育成の必要性を感じさせるものでもありました。こうして、オーストラリアにおいて保育を学ぶプログラムを持つための調査が始まりました。事前のあてはなく、手探り状態で情報を集め始めました。

### 専攻科「留学タイプ履修プログラム」の成案まで

オーストラリアの保育士資格は大別して3種類あります。

- 1 Certificate III (保育アシスタント資格)
- 2 Diploma (保育リーダー資格)
- 3 Advanced Diploma (保育園長資格)

それぞれのクラスに通常リーダー1名とアシスタント1名が配置されます。園によっては資格(立場)によってユニフォームのポロシャツの色を変えているところもあります。全ての園では保育スタッフの顔写真と取得資格が掲示されています。これらの資格取得のために学ぶのがTAFE (Technical and Further Education=州政府が運営する職業訓練専門学校)です。ここでそれぞれの資格取得のために必要な授業時間の情報を得ました。以下は海外保育実習を行っているオーストラリア・クイー

ンズランド州の州立職業訓練専門学校の保育士資格コースです。

Certificate III	1年コース	講義2日	実習1日	入学時期	2月か7月
Diploma	2年コース	講義2日	実習1日	入学時期	適時
Advanced Diploma	1年コース	講義2日	実習1日	入学時期	適時

オーストラリアでは多くの人々がまず Certificate III を取得して実際に現場で保育士として働き始めます。そして自分が時期を選んで上級の Diploma コースに働きながら学ぶというのが一般的な流れです。Diploma 以上の資格では入学時期が適時となっているのはそのような背景があります。

オーストラリアで保育を学ぶとなると、Certificate III がその第一歩となります。海外からの留学生がそのコースで学ぶには一定の語学レベルに達することが要求されます。短期大学卒業後にオーストラリアに留学して英語を学んだとしても7月までにそのレベルに達するだろうか、また達しなかった場合は次の入学時期が2月であることを考えると、経済的負担が増えないか、など実際に計画を立てるとなると様々な困難が考えられました。

いくつかのシミュレーションが作られましたが、効率的なプログラムは構築できず暗礁に乗り上げた格好になりました。そんなとき、上述の海外保育実習の原型となる実習を十数年前から実践し、名古屋短期大学がこの実習を実施するにあたって全面的に協力をいただいている名古屋文化学園保育専門学校の小野克志氏より新たなお話しがありました。同氏はオーストラリア・ゴールドコーストの生き字引と言えるほど実習地について詳しい方です。そして、Imagine Education Australia という私立専門学校（職業訓練コースだけに限らず語学、高校・大学予備コースもある）に、短大卒業後に適したプログラムがある、との紹介を受けました。詳細を見ると、同じ資格でも若干コース形態が異なっていました。

Certificate III	授業週 24 週	講義 2 日	実習 1 日	週 20 時間学習	入学時期 適時
Diploma	授業週 28 週	講義 2 日	実習 1 日	週 21 時間学習	入学時期 適時
Advanced Diploma	授業週 52 週	講義 2 日	実習 1 日	週 21 時間学習	入学時期 適時

最大の違いは、TAFE が1年のフルタイムコース（季節の長期休みがある）なのに比べ、Imagine Education ではその種の休日週間はなく、連続して授業を受ける形態になっていることです。また、各週に学ぶそれぞれのユニットは独立したものであることから、どの週からでもこのコースに入学できることがわかりました。加えて、同じキャンパス内に語学学校部門があることから、語学コースと保育士コースが連続して学ぶことが出来ることとなります。保育士コースの入学時期が TAFE のように限定（2月と7月）されていないので、学生の語学力が職業訓練専門学校に入学するに十分というレベルに達した時点で直ちに保育コースに進むことが出来て時間的ロスが起こらないことも確認できました。

学生のオーストラリアで学びたいという強い気持ち、多くの暖かい人々との出会いを経て当初不可能かと思われていたプログラムが徐々に整っていきました。小川雄二氏（名古屋短期大学保育科）によって構想の骨格部を記した草稿が何回にもわたって書き換えられました。保育科でも実現可能かどうかの議論を幾重にも重ね、最終的に専攻科保育専攻に9ヶ月の留学を含んでオーストラリアの保育

士資格が取得可能な「留学タイプ履修プログラム」が実現するに至りました。

表 1 専攻科留学タイプ履修プログラムの年次スケジュール（2年次は国内タイプと同スケジュール）

専攻科 1年生	4月	専攻科入学 ▶ 集中講義 ▶ オーストラリア渡豪 ▶ 語学コース入学
	5月	語学コース
	6月	語学コース
	7月	語学コース卒業・Certificate III コース入学 専攻科集中講義
	8月	Certificate III Childcare コース 専攻科集中講義
	9月	Certificate III Childcare（オーストラリア保育士資格）コース
	10月	Certificate III Childcare（オーストラリア保育士資格）コース
	11月	Certificate III Childcare（オーストラリア保育士資格）コース
	12月	Certificate III Childcare（オーストラリア保育士資格）コース

Certificate III コースの必要実習は週に1日です。しかし専攻科生としての実習を更に一日加え週2回の実習日数を確保することによって国内の専攻科プログラムと同等の実習時間としました。国内であれば夏休みや冬休みなどの長期休暇がありますが、この留学タイプ履修プログラムは週末を除き休みのないハードなものです。上記表の内、語学コースの間は月曜から金曜まで一日中英語の学習を行い、Certificate III のコースでは、講義日週2日、実習日週2日、もう一日は学校に来て講義に対する課題を行う日、と月～金5日間のスケジュールです。ただし熱意はあってもそれがそのまま学習効果として現れるかは保証されません。表1では語学コース卒業を7月と設定しましたがこれはあくまでも予定であり、学生自身の頑張りがなければ後ろにずれていきます。2ヶ月の予備期間を設け、その間に資格を取得して留学の成果を上げることを期待と目標として学生を送り出すことになりました。

### どのように送り出して学ばせるのか

保育科の学生は言うまでもなく保育が専門であり、語学は短大の1年次に選択必修科目としてあるのみです。それも専門的な内容ではなく一般教養範囲内のものです。ここでは、そのような背景から、どのように準備をして学生を送り出していったかの過程を先般帰国した第2期生を例にとって時系列的に述べてみます。

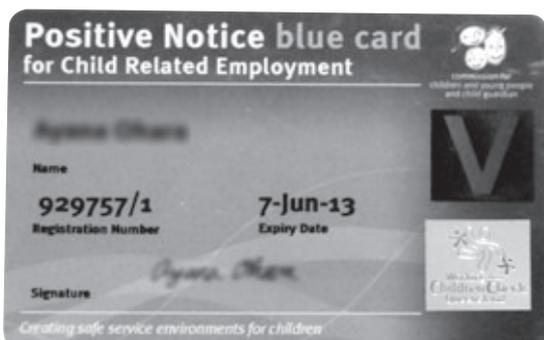
2009年7月～ 専攻科入試が行われ、合格者の内、5名が留学タイプを希望しました。同一キャンパス内にある桜花学園大学卒業予定者の1名を加えた計6名に対して、専攻科合格発表の直後より事前指導を始めました。2009年内は月に1度のペースで指導を進めました。この間、ビザの申請、外貨準備、健康診断など通常の渡航手続きを進めました。

2010年2月 1期生が帰国して、オーストラリアより Imagine Education の関係者も来訪され、「オーストラリアの保育士資格(Certificate III)授与式が行われました。これに渡航予定者も出席しました。「1年後は皆さんが授与される立場となるよう頑張る必要がある」と檄を飛ばしました。また関係者

が来訪されたのを利用して、語学テストと面接を行いました。また保護者説明会を合わせて開き、直接留学先の担当者より説明を受け、質疑応答が交わされました。

2010年2月～3月 通常授業が終わったので学生の自由時間も多くなります。連日、語学特訓授業を開きました。出席は任意です。学びたい者が学ぶ、自らの意志で学ぶ、ということを徹底させました。少しずつ、日本語を減らし、英語を使う量を増やしていきました。

2010年4月 5名が正式に専攻科に入学しました。必要な授業を集中講義で受け、4月半ばにオーストラリアに旅立ちました（前述の通り、専攻科生5名と桜花学園大学卒業生1名）。その際、現地における日本人同士のコミュニケーションも学校内では英語で行うことを厳命しました。また7月からの実習に備えて、ブルーカードの取得の手続きを始めました。オーストラリアではこのカードがないと原則として保育現場に立ち入れません。こうして語学力を鍛えながら、海外の保育コースの実習へ向けての環境も整えていきました。



無犯罪証明ブルーカード



保育園の実習風景（短大海外保育実習）

2010年5月 語学学習期間はあまり日本から連絡を取らないようにしました。しかし学生からいくつかの質問もあり、Skype（インターネット電話）をかけてくる学生もいました。特にこちらから何も言わなくても、拙いながらもすべて英語で筆者に話す姿に驚きました。聞けば仲間同士でも学内では英語を話していると聞き安心をしました。ただし、ホームステイでは、滞在先によって格差があり、それが学習の支障になっている場合もあり、筆者も日本から可能な限り先方と連絡を取って対応に当たりました。

2010年7月 渡航から3ヶ月が過ぎ、全員語学学校を卒業して保育コースへの進学が決まりました。短期大学の「海外保育実習」の引率で渡航した際、卒業式を見に行きました。修了証を手渡され、いきなり修了スピーチを行うように促された学生は流暢に英語を操っていました。集団は時に怠けきった集団を作ることもありますが、今回はお互いを高める役割を果たしたことがわかった学生達のスピーチでした。こうして保育コースに進みました。

2010年8月 短期大学の「海外保育実習」で渡航中の教員より専攻科の論文指導の集中授業を受けると共に、短大生に活躍の場を披露することにもなりました。短大のバーベキューの行事に専攻科生を呼んで、留学中の先輩のありのままを後輩に示してもらえました。保育コースに入り、自習も始まり順調に進んでいる様子を確認できました。

2010年12月 学生達にとっては渡航直後の語学コースが一番厳しかったと口を揃えて言います。保育コースは、その時点で語学力がかなり上昇したことと、保育自体は既に日本で学んでいることから余裕を持って学んでいる様子が伝わってきました。修了と資格取得が見えてきました。

2011年1月 滞りなく全員が保育コースを修了しました。

2011年2月 1年前は先輩の資格授与式に参加していた者が今回は主役となって証書を受け取りました。それを見つめる3期生の10人は本誌発行時には留学中です。この結果、1期生6名、2期生6名の12名全員が「海外の保育士資格を持った日本の保育士」となり、一定の成果を収めることができました。



2011年2月 オーストラリア保育士資格授与式

### Certificate III では何を学ぶのか

専攻科の学生が学んだ、オーストラリアの Certificate III ではどのようなことを学ぶのでしょうか？授業を見学させていただいた際、学生の大半はオーストラリア人で年齢層は様々でした。このコースの参加者は初めて保育について学ぶので、既に短大を卒業している専攻科生には馴染みのある内容となっています（表2参照）。しかし「園の運営と管理」といった日本の保育科のカリキュラムにはないものも含まれています。逆に日本では1年時から学ぶ心理系の項目は少なく、これらは上級資格の Diploma コースに含まれていました。

表2 2009年度 保育コースの各講義の概要

	ユニット	
1	Identify and respond to children and young people at risk of harm	事故の危険性とその対応
2	Ensure children's health and safety	健康と安全の確保
3	Care for children	保護、管理
4	Respond to illness, accidents and emergencies	病気、事故、緊急時の対応
5	Work within a legal and ethical framework	保育における法律と倫理
6	Support the development of children in the service	子どもの発達援助
7	Participate in workplace safety procedures	安全の手順
8	Deliver services/activities to stimulate children's development and enhance their leisure	子どもの発達とレクリエーション

9	Develop an understanding of children's interests and developmental needs	子どもの興味と発育
10	Apply basic First Aid	応急手当
11	Interact effectively with children	子どもたちの交流、ふれあい
12	Undertake administrative work	園の運営と管理
13	Care for babies	乳児の保育
14	Participate in the work environment	職場への参加
15	Work effectively with families in caring for the child	家庭との連携

1期生は、帰国して専攻科2年生に進級し、学位論文を書きました。そこでは留学時代に得たものを題材に日本との比較など実践的な学修成果が示されました。本稿は、留学プログラムの成り立ちを記すもので、保育現場の実践や比較は稿を改めねばなりません。一点だけ例を挙げます。日本での保育の5領域が、オーストラリアの保育では7領域と定義され、その中には日本にない「多文化共生・異文化理解」が含まれていることとそれがどのように実践されているかを論文でまとめた学生がいました。今後、留学をした学生から様々な切り口で保育が論じられ、それがまた日本の保育に良い意味での刺激を与えることになることを願っているところです。

### おわりに ～ 留学タイプ履修プログラムの持つ意義

この9ヶ月のプログラムはどのような意義を持つのでしょうか。表面上は、海外の保育士資格を取得できるというプラス面が対外的にはありましよう。しかしこのプログラムに関わってきた者として、それは些事のように思えるのです。資格取得という一つの結果よりも、そこで得た、国内では経験できない多くの事柄を今後の保育者人生で生かしていくことこそ重要ではないかと思うのです。別の言葉で言えば、長期的視点でこのプログラムを見据えて育てていくことが大切なのではないかと思うのです。

プログラムは始まったところで、今後、回を重ねることによって海外で就職する者、世界各地で活躍する者（海外青年協力隊では保育職の募集が多い）などもやがて輩出するであろうことを期待はしています。しかし、そればかりでなく、帰国後、ごく通常に日本の園に就職して保育職に就いた方が、ふとした時、異なった視点・視野から日本の保育の現場に新しい風を吹き込んでくれればいいのではないかと考えています。それは必ずしも直ぐのことではなく、10年後、20年後かもしれません。海外に出て行くだけが留学経験を生かすものではありません。日本国内にて海外で得たものを紹介・発展させるのも立派な国際的な活動です。また若き頃に習得した語学力はその後の長い人生で役立つことでしょう。実は、一般の語学留学で英語を学びに留学するより、英語で専門分野（今回は保育）を学んだ方が語学力もより伸びるのではないかと感じる参加学生の成果でした。

名古屋短大専攻科の留学タイプ履修プログラムはまだ始まったばかりで、理解度も浸透度も今ひとつかもしれません。また、保育職を目指して大学に入学してくる全体の学生数からみると僅かな数です。しかしこの小さなプログラムも時とともにその必要性和重要性が今よりも増すのではないかと思います。こうした保育者養成校の国際化への取り組みを、前向きに見守っていただければと願い紹介した次第です。

資料

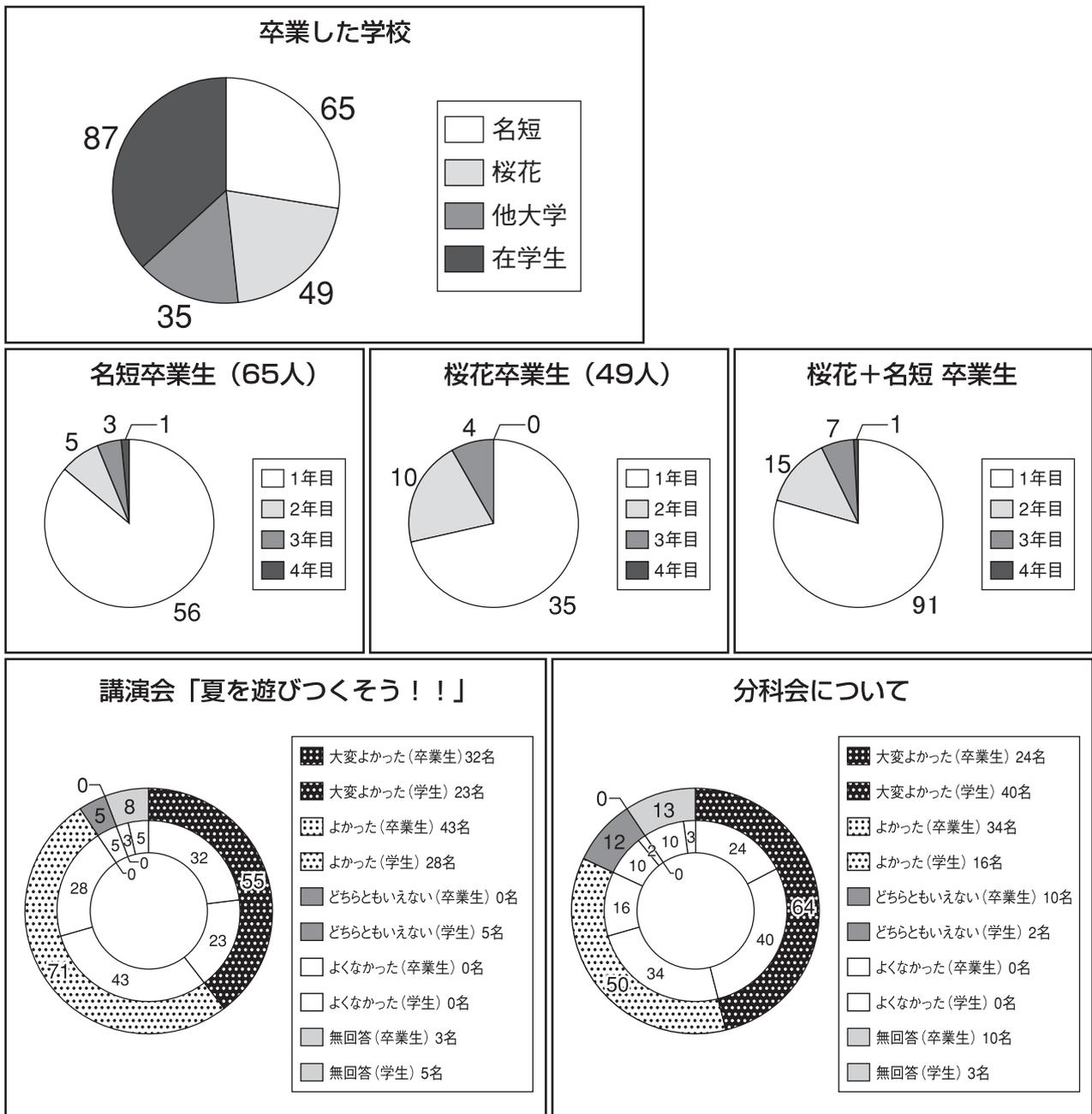
2010年度 事業報告

1 子育て交流会

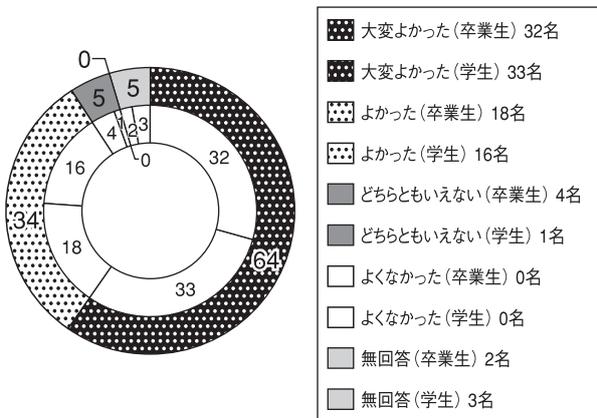
本号の「子育て支援活動の今後の課題」をご覧ください。

2 第8回夏季保育研究セミナー

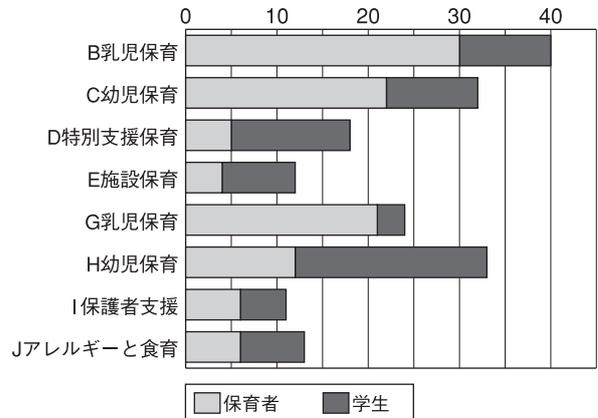
2010年度夏季保育研究セミナーアンケート 結果と考察



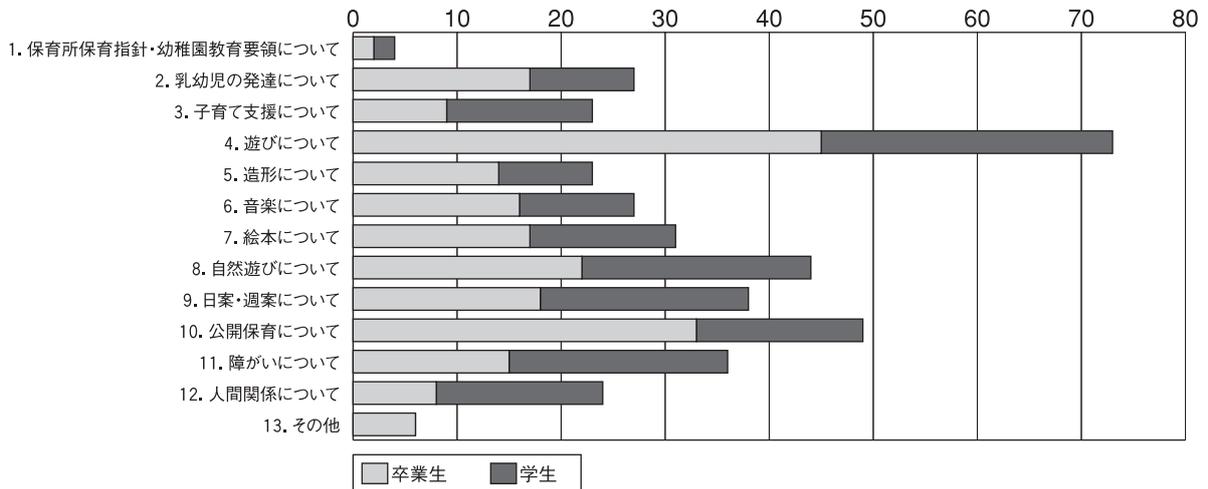
### 屋台村・手遊び村について



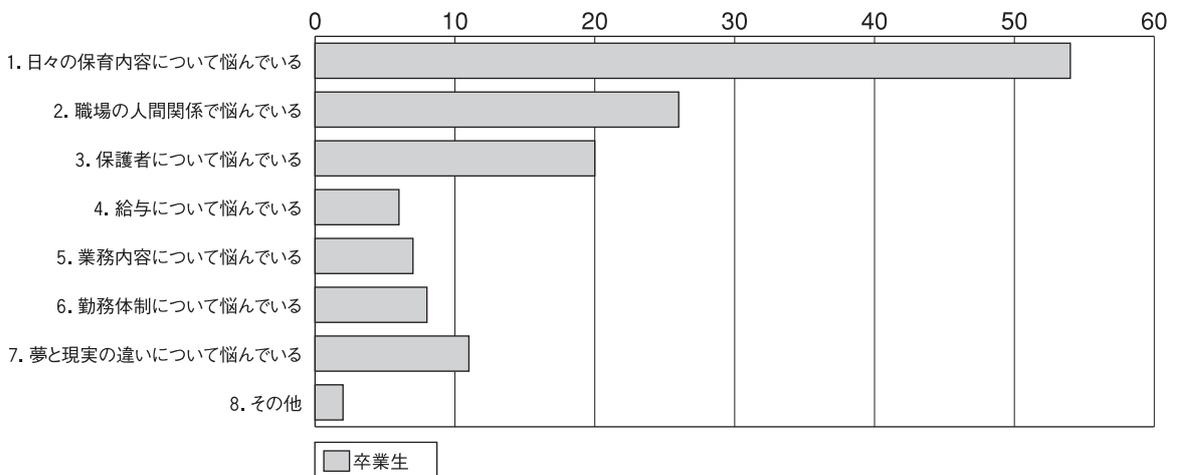
### 分科会参加者の内訳



### 夏季保育研究セミナーで取り上げてほしい内容 (複数回答可)



### 現在の保育における悩みについて (複数回答可)



**【考察】**

2010年度の参加者は236人であった。参加者数が昨年度より40%増加している（昨年度169名）。増加の理由として、①本年度から学生参加の呼び掛けをした ②他大学卒業生の参加者が増えたことが挙げられる。本学の卒業生のみだけでなく、地域の保育者が交流を行うことは、昨年度急逝された保育子育て研究所主任研究員：故神田英雄先生のセミナー開始当初からの願いであっただけに嬉しい限りである。次年度も、より開かれた地域の若手保育者の支援を行いたいと感じる。

次に、アンケートの結果について考察を述べる（今年度のアンケート回収率59%）。

講演会とワークショップ「夏を遊びつくそう！！～保育者の援助と環境づくり」については、＜大変よかった＞と＜よかった＞が90%を占め好評であった。特に卒業生（現職保育者）から好評であった。内容が、明日からの保育にすぐに役に立つという実践的なものであったことが理由と考える。

分科会については、＜大変よかった＞と＜よかった＞が82%を占めた。特に学生は参加者のうち65%が＜大変よかった＞と回答した。先輩保育者と交流を持つということが、学生にとって今後の学習の励みになったと考える。卒業生（現職保育者）からは、悩みを共有することによって負担が半減したと意見があった。また本学教員から専門的なアドバイスを受けることができ、明日からの保育の解決策となったという意見もあった。

屋台村・手遊び村については、＜大変よかった＞と＜よかった＞が71%を占めた。明日から実践できる製作や手遊びのメニューを増やすことができるということで好評であった。本年度は、竹井先生のご厚意により、「お菓子な家をつくろう」「お菓子なファニーフェイス」と題したワークショップコーナーを新設した。ヘンゼルとグレーテルに登場するようなお菓子の家を作ることができるとあって、参加者一同童心に戻り製作することができたと感じる。 （田端 智美）

### 3 講演会

今年度は、福島大学人間発達文化学類教授の大宮勇雄先生を迎えて開催されました。詳細は、本号の講演会報告をご覧ください。

2010年度保育子育て研究所講演会アンケート結果集計

アンケート回答者内訳	本学との関係	数	講演内容について				
			大変よかった	よかった	普通	あまりよくなかった	未記入
保育所・幼稚園関係者	本学卒業生	56	30	21	4	0	1
	現・元教職員	11	5	5	0	0	1
	その他	99	52	43	2	0	2
教職員（小・中・高・大）	本学教員	4	2	1	1	0	0
	その他	2	0	2	0	0	0
一般		10	5	3	2	0	0
学生		27	27	0	0	0	0
未記入		1	0	0	0	0	1
計		210	121	75	9	0	5
		100.0%	57.6%	35.7%	4.3%	0.0%	2.4%

#### ◇自由記述（抜粋）

##### \* 保育所・幼稚園関係者（本学以外）

・貴重な講演を聞くことができた。・次回もぜひ参加したい。・学ぶ機会をできる限り作っていただきたい。・園に帰って職員に話したい。・すごく良かった。・保育に対して考えていくきっかけになった。・子どもたちを肯定的にみるということを今後も心がけていきたい。・日々の保育に反省するばかり。明日から新たな気持ちで取り組んでいきたい。・日頃の一言、視線の向け方など気をつけながら保育をしていきたいと思った。・子どもの受け入れ方、見方についてとても勉強になった。・自分の保育を見つめ直す機会になった。・先生の話聞いて保育を楽しめるような気がしてきた。・また新鮮な目で子どもたちと向き合える気がした。・心情、意欲、態度という言葉の大切さ、意味をかみしめることができた。・保育とは、人と人が応答すること、手間暇かけておこなうことが大事であると思った。・園の子どもたちとのかかわりを変化させることができたらと思いました。・大変いい話でした。眠っている脳を起こされた感じです。・若い保育者と共に「学び志向」の子どもたちの芽を積まないように気をつけていきたい。・光を見つけた気がします。・肯定的な保育を目指して頑張ります。・保育の柱が自分の中にできた気がします。・子どもを見る目をもう一度入れ替えたい。

##### \* 保育所・幼稚園関係者（本学卒業生）

・普段の保育実践についてもう一度考えることができた。・元気が出ました。・職員も伸びていける職場づくりをしていきたい。・わかりやすい話でした。・自分の保育を見直したいと思いました。・子どもたちの意欲を大切にしていきたいと思いました。・もっと聞きたかったです。日常の保育の中で自分が子どもに対応している態度を考え直したいと思いました。・改めて一人ひとりを大切にすることにはっとさせられました。・学びの物語の視点に立って保育をしていきたい。・働いてみてさらに「知りたい」気持ちが学生の時より出てきました。・子どもに対する接し方がまた変わりそうな気がします。

---

**\*一般**

・今からでも時間の許す限り、少しずつ子どもの言葉に耳を傾けていきたいと思った。・4歳児の母です。今日からは、いろいろな可能性を引き出してあげるようにしたいです。・子ども理解について本当によくわかる話だった。

**\*学生**

・子どもを見る目が本当に変わりました。・とても勉強になりました。・海外と日本の保育制度の違いにとっても驚きました。・学生でもわかりやすく楽しい講演でした。・学び志向など新たな発見ができてよかったです。・結果ではなく、その過程を大切にし、その子の視点から子どもを理解することが大切だと思った。

(野津 牧)

**< 2010年度保育子育て研究所役員体制 >**

所長	宍戸洋子	(保育科)
主任研究員	田端智美	(保育学部)
主任研究員	野津 牧	(保育科)
主任研究員	吉見昌弘	(保育科)
主任研究員	今野正良	(保育学部)
事務職員	馬場美津子	(庶務会計課兼務)

保育子育て研究所年報第8号 執筆者

穴戸 洋子 名古屋短期大学保育科 教授  
田端 智美 桜花学園大学保育学部 助教  
大宮 勇雄 福島大学人間発達文化学類 教授  
牧 信子 名古屋短期大学保育科 教授  
今野 正良 桜花学園大学保育学部 教授  
荒川 良子・上村 鐘子 子育て交流会保育スタッフ  
清 葉子 子育て交流会保育スタッフ (椋山女学園大学教育学部講師)  
高田 伸子・水谷 真理子 子育て交流会保育スタッフ  
難波 佐保 子育て交流会事務スタッフ  
加藤 香・富崎 昭子・松浪 ゆかり・武藤 愛子 ボランティアスタッフ  
豊田 和子 桜花学園大学保育学部 教授  
富田 靖子 こすもす保育園 保育士  
松本 敏子 半田市立清城保育園 園長  
横山 悦子 子育てサークル プーさんクラブ代表  
高橋 一郎 名古屋短期大学保育科 教授  
野津 牧 名古屋短期大学保育科 准教授

(掲載順)

編集後記

子育て交流会の展開、夏季保育研究セミナーの開催、講演会の開催など、盛会のうちに2011年度を迎えようとしています。名古屋短期大学保育科、桜花学園大学保育学部の教職員、学生、卒業生、ボランティアスタッフが力を合わせて、地域と共に新たな保育の学びを創造していきたいと願っています (今野)。

**保育子育て研究所年報 第8号 (2010年度)**

発行者 桜花学園名古屋キャンパス  
保育子育て研究所  
発行年月日 2011年3月31日  
住所 〒470-1193  
愛知県豊明市栄町武待48  
桜花学園大学 名古屋短期大学内  
電話 0562-97-1306  
FAX 0562-98-1162  
HP <http://www.hoiku.ohkagakuen-u.ac.jp/koso/home.html>  
印刷 (株) シイエム・シイ

桜花学園名古屋キャンパス  
保育子育て研究所

